

齊興公

自嘉永七年正月

齊彬公

至安政五年十二月

追 舊 記 雜 錄 卷百六十五

白木御文書拾番箱中 五十九番

吉書

一 神社佛閣修造興行事、

一 可專勸農事、

一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

嘉永七年正月十一日 齊彬御判

雜抄

嘉永六年丑十二月廿三日、御老中阿部伊勢守殿方御留

守居御呼出の御達、

此度大船并蒸氣船製造之儀伺之通相達外、然處 公義
におひても追々製造被仰付積にり得共、其筋之役々迎
も製造方不案内之儀に付、既に蒸氣船ハ薩摩守家來に
製造御用被仰付外程之儀に、急速御製造難行届、薩摩
守の老兼る琉船其外大船製造方心得罷在り趣に付、
今度伺之員數早速出來致り都合もりハ、右之内差
繰り兩三艘 公義より入用等御下りの、出來次第上納
外様ニハ相成間敷哉、強る差支之儀も無之外ハ、右
之通取計有之度旨内々相達外事、

一 此度從

公邊、海防之儀被 仰出外付る老、大砲・軍船其外要
用器製造に付、莫大之入費相成申外、右老無據時節に
外間、萬事無手抜取計可申老當然にり得共、夫丈ハ萬
事節儉不相用外る老、後來之處令心配外間、勸農救助
老格別、雜用之分猶又吟味を盡し儉約行届、國政差支
無之様急度可取計り、手元之儀々無益と存外儀老、早
々申聞外様可致、右に付る老萬事過當之儀吟味之上可
申聞外、

一米價之事、追々申達下落の老相成り得共、自然と高直

ニ相成レハ様子も有之、既に當春も兩度程直上リニ相成
上、不順ニも有之ハ間、參府後ニ弥增高直可相成哉

と存レハ間、折角心付、格別不及高價様取計專一存レ事、
一度々相違レ得共、諸士之風儀今以て不立直向有之哉ニ
相聞得レハ間、猶又無油斷可致教諭レ、

一學問之儀文章訓話(マツ)之上になつミ、倫理實用之道理ニ昏

くレハる者、不學無識之者ニ同しく無益之事ニハ、元來
學文之本意ハ、義理を明かにして心術を正し、己を治

め人を治むる器量を養ひ、君父に對して忠孝を盡し、
全體を不汚儀第一之要務と存レハ間、能ク可申諭レ、武

道之儀同様、武術之末流ニ不拘、匹夫之勇に不墜、行
儀を正し、士道之本體を不失様、厚可申渡レ、

嘉永七
甲寅 正月

白木御文書拾番箱中 六十番

(朱)「嘉永七年寅二月」

(翁彬男、虎壽丸)
若殿様ニ

近衛忠潤公御女子

信君様御縁組一卷

右一冊ノ蓋紙也

(の1)

(張懸若君虎壽丸君ト近衛信君ト婚約整ふ)

若殿様ニ

近衛右大臣様御女子

信君様御縁組被爲整度被 思召上レ付、此節伏見より

上京いたし、御賞請之御使者相勤レ様、御國許ニハ

御直承知仕レ付、御使者勤方之御日柄、彼御方ニ及御

掛合申越レ様、前以京都御留守居田尻次兵衛ニ申越置

ハ處、彼御方御用人迄掛合之上、二月十九日四時相勤

御差支無之段申來レ旨、次兵衛より 御中途ニ申越レ

付、同十八日 御先ニ大坂出立、同夜致着伏、十九日

朝六時伏見出立、錦御屋敷ニ致着、次兵衛同伴ニハ四

時參 殿仕レハ處、竹之間ニ被差通、御近習足立要人致

出會レ付、

(近衛忠潤)
右府様

(近衛忠房)
大納言様

信君様時候御見廻之御口上申述、手扣書相渡レ處引入、

引續諸太夫中川讚岐守致出會レ付、

虎壽丸様ニ

信君様御縁組御整被遊度被仰進レハ間、御目出度 御許

容被成下り様程能致演話、別紙手扣書相渡り處、
近衛様達 御聽、明日 御返答可被 仰出段、讃岐守

申聞り、夫より外諸大夫・御用人多人數致面會り付、
夫々相應挨拶いたし、九時分御屋敷に罷歸り、

一同廿日 御返答被 仰出候付、午刻後參 殿いたしり
様、中川讃岐守より前日奉札到來付、御文書差出り事、

一同廿日、御留守居差支、御留守居付役寄横田鹿一郎同
伴、九時過參 殿仕り處、竹之間に御酒・御吸物被

下、諸大夫并御用人出會挨拶有之、無程於 大御書院
御目見被仰付、御縁組之儀被應御願り段、 御返答被

仰出、御手熨斗被下り付相下、自分進上之御太刀御備
付有之り付、再罷出 御目見相濟り、左り別段
御小書院に

右府様

大納言様御出、御近く被召寄、此節 御縁組之儀以御
使者被 仰進、不斜 御満足被 思召、幾久敷御目出

度 御領掌被成り段、別る御懇に被仰聞候付、則伏見
に罷下、薩摩守に可申聞、乍恐至私別の難有仕合奉存

外旨申上相下り處、御料理被下御着一臺拜領被仰付り
付、諸大夫迄御禮申述、七時分罷歸り、

一同日青侍増田庄司御使者に、紗綾三卷・眞綿五把拜
領被仰付、且又讃岐守より書付相添、此節御土産品獻

上付、爲御會釋
右府様より色紙五枚白木箱入
筆者目録相添

大納言様より八丈嶋二端拜領被仰付り付、御禮讃岐守
迄申越り事、

一拜領物爲御禮參 殿仕筈り得共、 御返答之趣早く薩
摩守に申聞度、今日伏見之様罷下り付、其段申述、横

田鹿一郎參 殿いたしり事、
一右御使者勤方付る者、前以諸大夫等得と申合被仰進筈

り得共、此節分る差急御參府之事り得者、迎表其通
運兼り付、其段者御留守居を以爲致内談、右相濟り筋

を以、御酒料として諸大夫并御用人相中に、金子五千
疋被成下り處、別る難有奉存り旨、御禮申出り事、

一同日伏見に罷下、右勤方之形行等都る 御直に申上、
江戸

御方々様は問合書を以達 御聽候事、
右府様

右府様 拍
(02)

御太刀 進上 一腰

(の3)

右府様

大納言様

〔采〕
「信君様江御同様」

松平薩摩守

春寒之節御座江得共、愈御勇健被成御座、玆重御儀奉存
外、此節家老差登候ニ付、時候御見舞申上外、

二月十九日

使者

嶋津豊後

〔采〕「料紙中奉書切紙美濃折かけ」

大納言様益御機嫌能被遊御座、恐悦御儀奉存外、然者嫡

男虎壽丸當六歳罷成外、依之

信君様御事、虎壽丸江御縁組被爲整被下外様奉願外、此

段私を以申上外間、御目出度 御許容被成下外様、幾重

ニ表奉願外、以上、

二月十九日

使者
家老

嶋津豊後

〔采〕「料紙中奉書切紙美濃折かけ口達手扣と認」

(の5)

御馬 代白銀十兩 一疋

以上

嶋津豊後

久寶

〔采〕

「大納言様御方御同様中奉書ニツ折」

覺

右府様江

一鶴氈三枚

一源氏煙草一箱

一御肴料五百疋

以上

大納言様江

一鶴氈二枚

一源氏煙草一箱

一御肴料三百疋

以上

おほへ

信君様江

一ちりめん二端 白紅

一御肴代三百ひき

以上

(采)

「右覺三通、小奉書切紙相認、美濃折かけ覺と認、

右府様 大納言様御方十九日進上、 信君様御方廿日進上
仕事事」

信君御方御返答

弥御安全被成御座珎重思召外、 然者今般御家來嶋津豊後
爲御差登、依之時候爲御見舞御使者被遣御満足 思召外、

二月

右ラ一冊トス

(06) 薩摩守様愈御勇健被成御座珎重思召外、 然者御嫡男虎壽

丸様は

信君御方御縁組之儀被 仰進、不斜御満足被思召、幾久
敷目出度被成御領掌外、 仍此段 御返答被仰入外事、

(09) 若殿様は

近衛様御女子

信君様御縁組被爲整度、御貫受之御使者拙者相勤候様、
御直ニ承知仕外付、大坂より御先ニ致上京、先月十九日

參 殿仕、諸太夫中川讃岐守は出會、

若殿様は

信君様御貫受被遊度、 御目出度 御許容被成下り様、

御口上之趣相應申述、別紙手扣書も差上置り處、翌廿日

參 殿仕り様、中川より申來り付罷上り處、

右府様 御目見被仰付、御縁組之儀被仰進、被應御願外

段 御返答被 仰出、尚又 御小書院は

右府様

大納言様 御出、御近く被召寄、 御縁組之儀御使者を

以被仰進、不斜御満足被 思召、幾久敷目出度被成 御

(07)

松平薩摩守様は

御返答

弥御勇猛被成御座珎重思召外、 然者今般御家來嶋津豊後
爲御差登、依之時候爲御見舞御使者被遣御満足 思召外、

大納言殿より

右御同様御満足 思召外、

二月

松平薩摩守様は

(08)

領掌_ハ旨、彼是御委敷 御沙汰_ハ被爲 在_ハ付、御受申上、別紙御返答御書取_テ中川を以被成御渡_ハ間、則日伏見之樣罷下、

太守樣達 貴聞、同廿二日

太守樣より爲御禮、鮮鯛一折拙者御使者を以被進、諸事御都合能相濟_ハ、右付_ル者自_ラ表向御願立其外、御手續_ハ及有之事_ハ得共、未御内々之御事_ハ間、其内大目付以上并御側御用人・御側役御使番・御記録奉行_ハ被相達置可然存_ハ、

先者御縁組被爲濟、幾久敷恐悅御同意奉存_ハ、此段御内用を以申越_ハ、以上、

但別冊手續之書付爲御見合差越_ハ、

寅三月十九日

鳴津豐後

川上筑後殿 (久封)

鳴津石見殿 (久浮)

新納駿河殿 (久也)

樺山伊織殿 (久感)

右包紙_ニ

嘉永七年寅四月十二日、筑後殿より上村休兵衛_ハ被成御渡、致帳留置_ハ樣致承知_ハ付、寫濟之上白木御文書拾番箱へ納置_ハ事

216

白木御文書拾番箱中 六拾壹番

一 御脇差一腰 美濃國兼定 長九寸分半 代金拾五枚

一 御臺鉏二重金上下着

一 御縁頭角磨

一 御二所物地赤銅七子箱船之細工色繪裏咄金

一 御小刀 奥州會津住三善長道

一 御柄鮫白

一 御星目釘金

一 御鴉目金

一 御鞘蠟色

一 御下緒紫

一 御袋純子裏白縞子御紐紫

一 外家箱桐白木紫房付

一 折紙一枚

但桐白木箱入

右表

(德川家慶) 慎徳院樣爲御遺物、嘉永六年九月十二日 上使森川出

羽守樣

齊興公被遊御拜領_ハ付、御納戸御讓御道具被仰付_ハ條、

至後年紛敷無之様可記置者也、仍如件、

嘉永七年寅五月廿九日

伊織久成

駿河久仰

石見久浮

筑後久封

御納戸奉行

217 白木御文書拾番箱中 六十二番

追啓誓詞宛所、阿部伊勢守殿初内藤紀伊守殿迄可被

相返り、以上、

(01) 明十一日、於松平伊賀守殿宅

御代替誓詞有之之間、朝六半時不遅様御出席可有之、
若御斷之儀表出來りハ、伊賀守殿に御届之儀老勿論、
自分儀出席候間、其趣早く可被申聞り、尤當朝俄御斷り
ハ、自分方に伊賀守殿宅迄可被申聞り、右之趣被得
其意、廻状早々順達從留可被相返り、以上、

五月十日

柳生播磨守

松平薩摩守殿

松平内藏頭殿

右留守居

(02)

松平薩摩守

明朝六半時私宅に被相越可有誓詞り、

一罰文迄調可有持参り事、

一宛所老中六人座並之通可被相認り事、

一判形八手前なる被致、血判ハ此方なる可被致り事、

五月十日

松平薩摩守に

(03) 御書附一通

但明十一日六半時伊賀守様御宅に

太守様御出被遊御誓詞り様と之儀に付、

御老中

松平伊賀守様

御用人

波多與太夫

右方御達被成り儀御座り間、今日中壹人罷出り様、御用
人中方之切紙致到來、罷出り處、右御書附御用人を以被
成御渡り付、可申上旨申述置り御書附差上申り、
右之通今夕私相勤此段申上り、以上、

寅五月十日

西筑右衛門

豊後様

追り申上り、御書附之趣

(04)

一奉對

起請文前書

太守様被遊 御承知上、表方以御使者御請可被仰
 達儀と奉存上、且又 御誓詞之御書附等、明曉七時
 迄半田嘉藤次方に被相下り様被仰度奉存上、將又
 明日御同席様ニ考、殿誰様御誓詞御座上哉、私心得迄
(宗純)
 ニ相尋申上處、松平内藏頭様・伊達遠江守様之由、
 右御用人方承申上間、爲御見合此段表申上上、

公方様忠勤之志專一奉存知不可有表裡事、
 一御一門方・公家衆并親類縁者其外挾野心族於有之考、
 早速可致言上上、勿論一味同心仕間敷事、
 一就于

御代替、弥重

公義御仕置等疎略不奉存可相守上、

附琉球國之儀背仕置雖企邪儀上、荷擔仕間敷事、

右條々於致違背考、

梵天帝釋四大大天王惣而日本國中六十餘州大小神祇殊伊
 豆箱根兩所權現三島大明神八幡大菩薩天滿大自在天神
 部類眷屬神罰冥罰各可能蒙者也、仍起請文如件、

(05)

右一冊トス

嘉永七年五月十一日

松平薩摩守判

阿部伊勢守殿 (正弘)
 牧野備前守殿 (忠雅)
 松平伊賀守殿 (乘全)
 松平伊賀守殿 (忠徳)
 松平伊賀守殿 (伝周)
 久世大和守殿 (信想)
 内藤紀伊守殿

去年就

御代替

太守様御誓詞御伺之儀、先月十一日御用番内藤紀伊守
 様に被差出置上處、去ル拾日松平伊賀守様より御留守
 居被召呼、明朝六半時被相越可有誓詞旨、別紙之通被
 仰渡、則日表方御使者を以御請被仰上、御誓詞御前
 書等御先例を以認方被仰付、前以御書判被成置、翌十
 一日伊賀守様御宅に御出、御誓詞之儀考御刻限前以
 御留守居持參、御用人に相渡置、御誓詞無御滞被爲
 濟、被遊 御退去上、

一御誓詞御宛所、御老中様御六人御座並之通御認方有之

外處、御掛大御目付衆御名前、御先例ニ御連名之次

ニ一字相下、柳生播磨守殿御名前認込相成り、

一御誓詞案文貳通之内、壹通者御老中様江、壹通者大御

目付柳生播磨守殿江差出り、

一御用心之 御誓詞者御留守居持歸差出り付、御右筆江

相渡り、

一御誓詞被爲濟り付、伊賀守様江御挨拶且紀伊守様江御

案内之御使者、御留守居相勤り、

右之通無御滞被爲濟り付、此段申越り條、可承向江可

被申聞置り、別紙御書附并 御誓詞案文・御留守居首

尾書等九通相添差越り、以上、

寅五月廿九日

鳴津豊後

川上筑後殿

鳴津石見殿

新納駿河殿

樺山伊織殿

右外包紙ニ

六十二番

嘉永七年寅六月晦日、筑後殿より小森新之丞へ被成御渡、御記

録所ニ格護被仰付り旨致承知、白木御文書拾番箱へ納置り事

218 白木御文書拾番箱中 六十四番

嘉永七年九月廿五日付武家諸法度、天保九年二月廿一日付同文故

略ス

(01)

包紙ニ

口上之覚

口上之覺

一御條目御寫一通

一御別紙一通

右今廿六日於牧野備前守殿宅家來之者江御渡被成、大

廣間四品以上御方江順達可致旨被仰渡り間、右御寫一

通、御別紙一通以使者差進り、御承知之御届御銘々よ

り備前守殿江御達可被成と存り、御順達相濟次第、右

御寫御別紙共此方江御返可被成り、御順之御先く、別

紙相添申り、

右同様松平加賀守殿江及御渡申合、順達可致旨被仰

渡り付、御同席殘御方江若則加賀守殿より御通達有

之筈ニ御座り、

九月廿六日

(津山藩主、齊民)
松平越後守
使者

(02)

今度御法令ニ大船製造可言上之旨被 仰出り、然處荷船

(03)

老前より御許し有之事ニ付、有來通製造之儀是迄之
通可相心得り、尤荷船たりとも、製造方其外有來と致相
違ひハ、此度被 仰出外通相心得可申事、

九月

次第不同

引札略ス

〔福井藩主、慶永〕
松平越前守様

引札略ス

〔徳島藩主、蜂須賀齊裕〕
松平阿波守様

引札
有馬中務大輔様より十月
朔日被差越、松平陸奥守
様致順違ひ

松平薩摩守様

引札略ス

〔仙台藩主、伊達慶邦〕
松平陸奥守様

引札略ス

〔広島藩主、淺野齊興〕
松平安藝守様

引札略ス

〔熊本藩主、斉藤〕
細川越中守様

引札略ス

〔佐賀藩主、鍋島齊正〕
松平肥前守様

引札略ス

〔山口藩主、毛利慶親〕
松平大膳大夫様

引札略ス

〔福岡藩主、黒田斉徳〕
松平美濃守様

引札略ス

〔岡山藩主、池田慶政〕
松平内藏頭様

引札略ス

〔鳥取藩主、池田慶徳〕
松平相摸守様

(04)

引札略ス

〔広島藩世子、淺野齊胤〕
松平上總介様

引札略ス

〔米沢藩主、斉應〕
上杉彈正大弼様

松平十郎磨様は十月朔日
被差越、松平薩摩守様
致順違ひ

〔久留米藩主、慶頼〕
有馬中務大輔様

引札略ス

〔熊本藩世子、慶順〕
細川右京大夫様

引札略ス

〔盛岡藩主、利剛〕
南部信濃守様

引札略ス

〔高知藩主、山内豊信〕
松平土佐守様

引札略ス

〔福岡藩世子、黒田長知〕
松平下野守様

引札略ス

〔富山前藩主、前田利保〕
松平長門守様

引札略ス

〔川越藩世子、貞伏〕
松平八郎磨様

引札略ス

〔石見前藩主、武徳〕
松平十郎磨様

以上一包トス

包紙ニ

松平薩摩守殿

阿部伊勢守
牧野備前守

松平和泉守

松平伊賀守

久世大和守

内藤紀伊守

御用之儀ハ間、明後廿五日五半時可有登
城ハ、尤熨斗目半袴可爲着用ハ、以上、

九月廿三日

内藤紀伊守

久世大和守

松平伊賀守

牧野備前守

阿部伊勢守

松平薩摩守殿

右一包トス

(05)

包紙ニ御名

私儀疳積氣有之、明廿五日登

城御斷申達ハ、以上、

九月廿四日

御名

右一包トフ

(06)

太守様御用之儀御座ハ間、今日五半時

御登 城被遊ハ様、御老中様御連名之御奉書御到來被遊

ハ處、御疳積氣被遊御座、今日

御登 城御斷被仰上ハ付、

御本丸於蘇鐵之間、右之趣申述、御坊主組頭宇佐美俊陸
を以 御病名札差出ハ處、御目付遠山金四郎殿被致承知
ハ旨、右俊陸を以被申聞ハ、

右之通今朝私相勤此段申上ハ、以上、

寅九月廿五日

西筑右衛門

(島津久徳)
伯耆様

(07) 御書附一通

但太守様御疳積氣被遊御座、明廿五日

御登 城御斷之儀付、

御用番

内藤紀伊守様

御取次

松橋廉平

右ハ持參仕、演説之上差出ハ處、被成御落手ハ旨、右御
取次を以被仰聞ハ、

右之通今夕私相勤此段申上ハ、以上、

寅九月廿四日

西筑右衛門

伯耆様

追ハ申上ハ、大御目付衆ハ御届之儀者、御留守居付

役名前之書付を以、御用頼堀伊豆守殿に申出爲置り、
此段も申上り、以上、

右一通也

(08)

御法令被 仰出り儀付、牧野備前守様被仰渡り御書付御
寫一通、大御目付衆御添書一通、只今別紙之通松平安藝
守様・細川越中守様衆より到來仕り間、本書ハ致返却、
寫相添差上申り、以上、

寅九月廿三日

半田嘉藤次

伯耆様

右一通

(09)

御用之儀り間、明後廿五日五半時登
城可仕り、尤熨斗目半袴可致着用旨被仰下、奉得其意り、
以上、

九月廿三日

御名

阿部伊勢守様

牧野備前守様

松平和泉守様

松平伊賀守様

久世大和守様
内藤紀伊守様

右一通也

(010)

御老中

阿部伊勢守様

御取次 小林兼五郎

牧野備前守様

御取次 稻垣茂一郎

松平和泉守様

御取次 鈴木彦右衛門

松平伊賀守様

御取次 山田官兵衛

久世大和守様

御取次 鈴木仲右衛門

内藤紀伊守様

御取次 渡邊平五郎

右に參上仕、今日 御法令被 仰出り旨、大御目付衆よ
り御觸達御座り處、

太守様御疝積氣被遊御座、

御登 城御斷被仰上付、御祝儀御使者を以被仰達付旨、

御口上御相應申述付處、留置追可申上付旨、御銘々様

右御取次承申付、

右之通今日私相勤此段申上付、以上、

寅九月廿五日

西筑右衛門

伯耆様

追の申上付、

(音懸)

宰相様より奉御勤向之儀、大御目付衆御觸達之通何

も無之筋ハ、先例にも相見得申付、此段も申上付、

以上、

右一通也

(の11)

一御條目寫一通

一御別紙一通

一右ニ付書附五通

一御廻狀寫一通

但御留守居首尾書相添

右者 御代替初る御法令被 仰出付、右之通江戸よ

り到來付間、先例之通御記録所に可相納付、

十二月

筑後

(の12)

三通之一銚り有之左之通

猶以

御嫡子様被成御座付 御方様者、御附衆迄御通達可

被下付、以上、

以廻狀致啓上付、只今大御目付様より、御廻狀并御書付

寫壹通被差越付付、右寫各様迄致通達付様、安藝守・越

中守被申付、廻狀數通相認持廻申付付、以上、

九月廿三日

細川越中守内

清田新兵衛

田中八郎兵衛

福田源兵衛

松平安守内

福永小太夫

梶川銀次郎

中野富三郎

福永助左衛門

御次第不同

松平薩摩守様

御留守居中様

松平陸奥守様

御留守居中様

南部美濃守様

御留守居中様

右一通也

(の13)

牧野備前守殿御渡り御書付寫壹通相達り之間、被得其意、御同列中并御嫡子方に及不殘様無遲滞早可有通達候、答之儀先く從銘く不及挨拶、各より堀伊豆守方に可被申聞り、以上、

九月廿三日

大目付

松平安藝守殿

細川越中守殿

右留守居

右一通也

(の14)

御法令被仰出りニ付、病氣・幼少ニ由出仕無之面々者、老中宅に使者可差越り、在國在邑之面々者承次第使札可差越り、

但隱居之面々者不及此儀ニ付、

右之通可被相觸り、

九月

右一通也

右敷通之外包紙ニ

(米)六十四番一

御條目寫等九通 御留守居首尾書添

右嘉永七年寅十二月十六日、筑後殿を當座に可致格護置旨、黒

田嘉右衛門致承知、白木御文書拾番箱江納置之外事

白木御文書拾番箱中 五拾七番

(の1) 219

御記録奉行江

篤姫様

御歳拾九

天保六年未十二月十九日御誕生、

御母伊集院中二娘御側女中壽満、

嘉永六年丑三月十一日

御前様御養、

右之通ニ候條、此旨帳可記置り、

十月

豊後

(の2)

嘉永七年寅十一月十八日、豎山武兵衛より就御用、江田

五郎左衛門罷出り處、

篤姫様御父母之儀、先般申渡有之り得共、

公邊其外者右通ニ由、御内實之御譯御記録奉行迄ハ承知

仕、帳面ニも記置り様、御沙汰被爲 在り段相達り付、

右御形行老頭豊後殿被仰渡置付、同人に老 御沙汰之

趣届置付の老何様可有之哉之旨申入り、其通可致承付

ニ付、御家老座に罷出、豊後守殿に 御沙汰之趣申上、

被聞召置付、白木御文書御同人様御父母付一緒ニ御封、

後年虫干等之節、奉行迄拜見之期御首尾被成可給り、此

段御内用を以申越り、已上、

但別紙御内意之趣書差越り、

十二月廿九日

江田五郎左衛門

上村休兵衛殿

汾陽彦次郎殿

別紙ニテ

篤姫様

御實父島津安藝剛殿 御實母島津助之丞丙久娘

外封

上村休兵衛殿

汾陽彦次郎殿

江田五郎左衛門

齊興公御譜中

嘉永七年甲寅冬十一月二十三日改三元安政一、

221 齊興公御譜中

安政二年乙卯春

天皇賜ニ齊興 齊彬

御歌宸筆一、近衛右大臣忠熙公副以ニ書并歌ニ載ニ于左、

222

舊御番所御文書卷番箱中

目録ニ安政二年春
主上ヨリ齊興公 齊彬公被遊御拜戴候トアリ

詠寄國祝

和歌

武士もころあはして秋つすの國はうかすともにおさ

めむ

右一箱ニ入、御掛物也

箱著一

宸翰所被添進之

近衛忠熙公御文章

齊興朝臣 齊彬朝臣か國政にあつきさしを 叙感淺か

らす、つねく 仰こともありしに、こたひ武士も心あ

はしての、 御製を御懷紙に 宸筆備られて傳へよと、

あつき 仰ありしをかしてみ、武士の心も君かめくも

て、けにいやよしに國やをさめむと、つたなき筆、こと

はも、後のしるしにもならむと、かき添て傳へ侍るもの

雜抄

嘉永七年寅十一月、山川沖に亞米利幹船到來一件ニ

付御願書

也、

安政二とせの春

右大臣忠熙

さつま

宰相との

中將とのへ

右御掛物一箱ニ入

齊彬公御系図中

安政二年乙卯春、近衛忠熙公遺ニ書齊彬曰、卿盡ニ心國政ニ

淑感不レ尠、

帝恒賞レ之不レ已、因今賜下所ニ手書ニ

御歌ニ既出音興之、上今不録謹押ニ

御咏之意ニ武臣當下戮レ力共來ニ輔

王室ニ、海内得安、増耀中

皇化上、嗚呼武臣之榮何可レ不ニ感激奮勵ニ乎哉、

安政二 乙卯 二月廿六日

御名内

西筑右衛門

本文海防御掛御用番松平和泉守様正御差出相成り

先達の薩摩守領内薩摩國之内山川村沖に、北亞米利幹船壹艘渡來、滯舟中任望薪水等相與り處、無事致出帆、其段ハ御届申上置通御座り、然處北亞米利幹之儀、船中闕乏之品被下り儀御聞置之節、場所御取極無之りへハ、何國之浦方にも勝手ニ渡來不取締付、下田并箱館ニおひて被下り段承知仕、右外場所ハ一切不致渡來儀と相心得申り處、此節漂流にも無之舟渡來、數日滯船、着場近邊致測量等り付、重る類船催來り及難計、假令此末あめりか船ニ不限、何方之船渡來りも、追々被仰、依之御趣意通御國威を不失様、折角平穩ニ會釋可仕ハ勿論之事り得共、萬々一上陸等いたしり時宜成立りハ、領内之儀土地邊鄙にて人氣も相替り付、逆及横濱等ニある吳人共御取扱同様之振合ニ程能致會釋り儀、甚無心元旁心配仕り付、何卒あめりか其外ハ入港御取扱相成り外場所へハ、一切渡不致様、御約諾之國々ハ御達被成下り様奉願旨、薩摩守申付り間、此段御内意を以申上り、以上、

一衣服沙汰之義ニ付る者、去ル子年分被仰出置、當正月より(美丸)着服相用ハ義屹と不相成、袖・西洋布・木綿類成丈庵服相用ハ様との趣も被 仰出、其段ハ人々承知通ニハ、然處此度地震ニ付る者質素節儉を相用、衣服之義も庵服可相用旨、從 公義被 仰渡ハ趣有ニハ付、詰中之面々、子年被 仰出ハ 御趣意屹と奉汲受、萬端質素節儉を心掛、庵服相用、御制禁之品々紛敷古物迎も相用ハ義一切不相成、左ハハ供等之節も木綿類相用ハハ不苦ハ、肩絹・袴等之儀も、時節ニ不相拘麻・木綿單物等相用ハハ是又ハ不苦、乍此上不守之者於有之者、屹と可及沙汰旨、於江戸申渡相成ハ段申來ハ、此旨向々江不洩様可致通達ハ、

安政二年 二月
乙卯

御系函 久光公御子

男女十四人

忠濟

初久濟 眞之助

安政二年乙卯三月九日生於重富第、母櫻井氏妹、

文久元年四月隨父久光入於本室、

白木御文書拾蕃箱中 六十五番

敬白 天罰靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、去歲三司官役被 仰付、冥加不淺難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相 勤候事、

一乍恐奉對

齊彬様 齊興様毛頭不可奉存疎意候事、

外ヶ条先例同文略

神文略

安政二年乙卯三月廿二日

幸地親方

朝憲判

雜抄

安政二年卯六月廿六日、御老中阿部伊勢守殿方御留

守居御呼出ニハ

此度當地に被差廻ハ大船、至極出來宜敷堅牢辨理ニ相見得、右ハ 公邊御用ニ可相立品柄ニ付、据付砲器類共獻上被致ハ事如何可有之哉、併其許ニハ手敷を掛製造被致ハ船砲、無據獻上被致ハ様にてハ不宜ハ間、一應勘辨

之上被申聞度存外事、

右ニ付翌廿七日

此度御當地に差廻り大船、至極出來も宜敷堅牢便利ニ相見得、差當り、公邊御用ニ相成り品柄ニ付、据付砲器類迄も献上仕り様、併手数も相應相掛製造仕り間、勘考之上申上り様、御書取之趣承知仕り、素より右船製造之儀者、乍不及、皇國之御爲製造仕り事ニ有、御用途相成りハ、誠以本望之至難有奉存り、一體御注文被仰付置り大船二艘之内、一艘者成就之上献上仕度内存も御座り折柄、別有難有奉存り間、此節之大船献上被仰付り様奉願り、以上、

七月廿七日

松平薩摩守

右大船之儀者、大隅國大隅郡櫻島郷瀬戸村にて製造、嘉永七年寅十二月十三日鹿兒嶋前之濱に廻船、翌安政二年卯二月十三日御船奉行石原龍助乗付ニ有江戸之様廻船相成り、是則昇平丸なり、

齊興公御譜中

安政二年秋九月二十二日齊興賜告發江府、十一月十日

着鹿兒島玉里邸^一、

○十二月十一日自玉里邸入中村別荘、十五日發別荘往指宿、爲是浴温泉療舊痾也、

230

齊彬公御系図中

安政二年十一月二十五日應^レ教登^レ城、見^ニ

大樹家定公於御座之間、乃下^ニ懇命親賜^ニ御刀^{備州一腰}、

御脇差^{備州一腰}、嘗獻^ニ大艦及巨礮等^ニ故有^ニ此實^一、

231

雜抄

一近年吳國船手當者勿論、萬端及入價り折柄、又り今度稀成地震ニ有、芝屋敷を始諸屋敷大凡及大破、修覆其外莫大之入價差見得當感之至、右ニ付る者出銀等不申付りる者難相成時節ニ有得共、近年一同及困窮り折柄故、出銀等之義一切不申付り間、弥節儉を相守土道嚴重ニ心得り様、分る可相達り、

一江戸長屋向近年者自然と廣大ニ相成、各を始手廣住居り儀、第一節儉之爲不可然り間、以後何役ハ何間、何人賦ハ何程と申儀、長屋間數相極り様吟味第一ニ存り、定府之儀者家内之者有之り間、一樣ニ者難相成儀可有之り得共、是又大概之定相立り様吟味第一ニ有、

一家老・用人以上交代之節之爲、西向屋敷に長屋有之
得共、以來上屋敷内に取建、西向屋敷に老家老・用人
長屋不捨様可取計り、

一近年老殊之外物入打續り上、此上如何様之臨時之儀到
來難計り間、弥無用之費無之様可心掛、當時迎も格外
之儉約相用り事ながら、他家に競り得る十分とも難申
譯も有之哉に存り間、膳所向入用を始萬端心附り儀老
其向くを爲申出りぬ、節儉之道行届り様吟味第一に存
り、右に付存寄有之者老無遠慮存寄書差出り様、能く
可申渡り、

安政二年卯十二月

白木御文書拾番箱中 六十六番

包紙・書附寫

一犬追物聞書壹册

一左手をイテハ左手ヘカヘシ、ト書出り壹册

一射手の馬場に打入りハ、と書出り壹册

一犬追物日記壹册

一犬追物ハかていよりはしまりて、と書出り壹册

一犬追物書小笠原光清在判壹册

一凡右大將家御時ハ弓箭の中、と書出り壹册

一射手方聞書壹册

一犬追物之稽古之日記壹册

一騎射之聞書壹册

一檢見聞書壹册

一犬追物雜聞書壹册

一犬追物聞書壹册

一犬條く可心得事、と書出り壹册

一頓露書秘抄問答壹册

一此日記努く不可有他家に見事、と書出り壹册

一犬追物日記壹册

一聞書壹册

一聞書壹册

一犬追物書壹册

一騎射秘抄小笠原宗中在判壹册

一犬追物日記壹册

一檢見之しんたいの事き、書に仕置分と、書出り壹册

一犬追物ハかていより、と書出り壹册

一矢ところハ繩にてハ、と書出り壹册

一檢見故實可覺悟條く、と書出り壹册

一 右同書出外壹册

一 遠笠懸事、と書出外壹册

一 八廻口傳聞書壹册

一 檢見之條々壹册

合三拾册

一 馬道具日記壹卷

一 山内以上六拾六ヶ條矢形、と書出外壹卷

一 犬追物檢見之事、と書出外壹卷

一 犬追物譜肩：小笠原宗中、と有之壹卷

一 犬追物矢形履裏履二三之書壹卷

一 犬追物檢見次第壹卷

一 六拾七ヶ條矢形壹卷

一 犬追物射手方之事壹卷

一 犬追物手組之事、と書出外壹卷

一 此矢遠近之や、と書出外壹卷

一 犬追物日記壹卷

一 右同口傳日記壹卷

一 右同日記壹卷

一 同日記壹卷

合拾四卷

233

白木御文書拾番箱中 六十七番

御記録奉行に

右鎌倉流犬追物 御傳書等從古來 御傳來、御記録所
御格護被仰付置外處、

太守齊彬公思召之御譯被爲 在、於御記録所臨寫被仰
付被預置外旨被 仰出候條、至後年龜抹之儀共無之様、

可有秘藏者也、依る如件、

鳴 豐後

安政二年卯十二月廿八日

川上千郎左衛門殿

總印判
久寶判

御八代

久豐公御事、應永三十二年正月廿一日被遊 御逝去、

義天存忠大禪定門と奉號外處、御遺骸御葬埋之地不被遊

御知、安永三年穆佐悟性寺境内

義天様御塚と申傳之場所より、髑骨相藏居外大甕堀出、

燒物之香爐一器・唐金之鈴一入付有之、至極疑敷、細密

相糺外得共、證據可相成廉無之、御遺骸と難見定外付、

本之通致理方、其節石碑被建置、其後天保十二年丑年相

良甚太夫穆佐に被差越外節、悟性寺境内より義天之二字

彫刻有之ハ石塔并右之笠石堀出、舊文書等者勿論、古老之者共申傳等迄も巨細相糺、萬端及勘考、

義天様御廟所無相違旨吟味申出、然處

義天様御事於鹿兒嶋御逝去、御葬式於福昌寺被爲遂、四

拾九日より拾三回御忌迄、御法事御執行於福昌寺有之

ハ、御祭文等髓ニ有之、殊ニ義天之二字彫刻之御石塔者

諸所に及有之、旁以堀出、御廟所之石塔ニ有之

間敷、福昌寺西之卵塔、

完心 怨翁様御相廟ニ有之ハ御石塔、御靈骨又者 御遺髮被

納置ハ儀者不相知、

義天様御石塔之儀者無別條、御廟所者福昌寺ニ相違無

之哉ニ相見得、御記録奉行申出、御決着調兼、是迄

夫形被召置、右甚太夫堀出

御石塔片付方之儀、去ル丑年所役、得差圖付、尚又爲

糺方上村休兵衛・榎本新兵衛被差越、古代之墳墓と

相見得、多年埋居諸所蝕損、文字疋と分兼、儀共

有之、今更決着難致、安永之度堀出、鬮骨之儀、舊記等

相糺、得共不相知、右枯骨者全躰相備居、頭骨大振りニ

相見得、土葬之取置ニ有之、

感心 御元祖様より

完心 寛陽院様迄 御代々御火葬被爲執行、御事ハ處、右通土葬之取置付、者旁以

義天様御遺骸ニ有之、尤葬埋之場所宜、土中取

置之仕置入念、平人之取置共不相見得、穆佐之儀積

年伊東家より及領地いたし居、時代有之、大檀那駿河守

祐滿を初幾人敷埋葬いたし居、是以彼是今更

御治定難被成趣共申出、是迄數十年御糺方有之上之事

ニ、最早此末御證據等髓ニ可相顯譯、無覺束、無是

非御次第、いつれ福昌寺

怨翁様御相廟無相違被遊御治定、前條堀出、石塔者、此

節發遺之上文字摺消、後年紛敷無之様寺内ハ堀埋、様被

仰付、左、右、多年穆佐、御在城、悟性寺之儀者、爲

御菩提所御再興、寺領迄も被召附置、被遊 御崇敬、御

譯合、且又御灰塚招魂墓等之譯者不相知、寛文十

年比迄、現在 御石塔有之候儀者無相違、此節別段

御石塔一基御建立被仰付、穆佐中者勿論、一統奉尊

信、御祭式等是迄之通入念執行いたし候様被仰付、左

ハ、右ハ、枯骨之儀者、前條通髓成證據無之付、右之所ハ瘞

骨塔と銘文彫刻之石被建置、左ハ、是迄被召建置、石

碑之儀者、故障之儀者有之、問取除被仰付、碑文之形行

若別段書付を以寺家に屹と被渡置、後年紛敷無之様被仰付、

右之通被仰付、御石塔恰合并場所之儀若追申渡、

寺家に被相渡り書付若追可被相渡旨、寺社奉行并穆

佐地頭に申渡り間、御石塔恰合并場所之儀致吟味、寺

家に被渡置り書附表取しらへ可申出、

正月

豊後

六十七番

右外包ニ安政三年辰正月廿一日上村休兵衛江被成御渡、白木御

文書拾番箱へ納置之り事

234

齊興公御譜中

安政三年丙辰二月十四日自_二指宿_一歸抵_二中村別莊_一、十七

日入_二玉里邸_一、

235

雜抄

一 近年從

公邊及學問武藝第一心掛、質素節儉相守り様にとの趣

ハ追々被仰出り付、諸士一同文武之修行猶又厚心掛り

様可申渡り、

一 當春方諸役人ハ勿論、馬廻・新番・横目・中小姓・諸

座書役惣の諸士・郷士・與力等、追々名さしこる呼出、

舊冬調置り武藝者勿論、學問手跡等迄相試り義も可有

之り間、其段兼る不洩様可申渡置り、尤當日不意ニ相

達り義も可有之り條、至其節外勤又ハ遊歩等之外出申

立、不參及毎度りハ、急度吟味可申付り間、兼る其段

も申達置り様可致り、且又士已下之者之内平常心掛宜

敷、文武練達之者も可有之り間、兼る支配頭致吟味、

名前等相尋早々可申聞り、以上、

一 學問武藝等之義ニ付、御別紙之通御書取を以被 仰出

り付、諸御役人者勿論諸士・郷士・與力等、文武之修

行厚心掛り様被仰付り、左り追々武藝者勿論、手跡等

被遊御試御事も可被爲在り間、御趣意之程深奉汲受、

一向致修行り様可申渡旨被 仰出り、

右之通被 仰出、誠ニ以難有次第り條、一統謹の奉

承知、質素節儉相守、文武之修行無怠可相勵旨、於

江戸申渡相成り段申來り條、此旨向々不洩様可致

通達り、

安政三
丙辰年 二月

鳴津
下總

末川

近江 昔時の國老也

新納

駿河
樺山
伊織

領國中政務ニ付る者、

宰相様御家督中多年被遊御配慮、殊ニ改革且海岸手當向等、譯る御規定被遊置、諸役場及差はまり致精勤、追々質素之向ニハ處、兎角程過リ得者緩急相成、花美驕奢ニ者赴安く、段々不行儀之事も有之、無益之酒會者勿論、賄賂等敷進物等も有之、且士道取失ハ所業も有之哉ニ相聞得、甚夕歎かしき事ニハ、當時者吳國船も諸所ニ渡來、從

公邊も譯る文武之 御沙汰も有之、士風御振興之事ニハ得者、一統奉得其意、末々迄及質素節儉相用、其程ニシたかひ身分勵ハ様との趣者、毎度申渡置ハ處、今以段々心得違之義も有之、甚不可然事ニハ間、各初役場末々迄誠實ニ心掛屹と致精勤、就中勝手方其外町人等致支配ハ向者、譯る廉直□可相嗜、且又大目付始目付役之儀者、無親疎善惡之事實令見聞、筋々遂吟味、賞罰明白ニ不行

届ハる者、不叶儀ニハ得者、至る重キ役職ニ付、銘々身

分令謹慎、脇々誹謗不受様可心掛、其外諸役場職分を盡し、支配之面々にも應身分正道ニ相はけミハ様申論、就

中町家之者共賣利に迷ハ、不相當之願意も有之哉ニハ間、支配之向々屹と等閑之儀無之様可心掛旨、譯る可申渡ハ、

右之趣意、各始諸役場深く汲受、聊無等閑申談、來春下國之上、急度其詮相見得ハ様可心掛ハ、以上、

異本ノ写ニ

安政三年 七月 トアリ
丙辰

右外包紙ニ
〔朱〕六十八番
御筆仰出卷通

右安政三年辰八月四日駿河殿より可致格護置旨、青山弥兵衛致承知、白木御文書拾番箱正納置ハ事

白木御文書拾番箱中 六十九番

一包ノ折紙ニ

篤君

一包ノ折紙ニ

敬子

包紙ニ

御書取之写トアリ

伊勢守に

(音形文)

(音形正寄、徳山氏)

篤君御方生母之儀、向後恒姫と相定り様被仰出り旨、難有奉承知り、右に付る者表向御届替仕り方なるも御座りや、又者直に其事に心得、御届不申上りるも宜敷や、御内々相伺申り、以上、

右之趣なる伺可申、尤以壯右衛門差出り間、文言吟味之上清書いたし、此方に可差出り、

右一通

新御殿 富印に考、年寄迄側役方申上りる宜敷り事、

一新御殿方右に付御禮女使可差出りと伺有之、可然と存

り、

一平常文通有之向に考、奥方鳥渡爲知可申遣り事、

其外御祝儀等なる考不及事、

右一通

松平薩摩守娘篤姫産母之儀考、向後薩摩守妻女恒姫を生

母と相定候様、御噂も有之り間此旨相達置り事、

右一通

屋敷中に考

別紙之通阿部方達に相成り間、致承知り様相達可然り事、

右一通

此度生母之儀被仰出り儀考、深き御譯合も有之り間、一橋初兩敬之分に爲知有之方可然旨、辰之口方内々申來り間、其通可取計り、左方の國元にも其段申遣り方可然、系圖之儀も其譯相記し置り様可申達り、

篤君様御事國元出生にり處、此度産母之儀以 思召恒姫を生母と相定り様

公邊方被仰出り付、御吹聴申達り、

右之趣なる可然存り、右者全く内實之處、後年吳論無之様ことの事なる被仰出りよしゆへ、其心得なる取計可然り事、

右一通

合五通一封トナル

篤君御方御生母之儀、向後恒姫に相定り様被 仰出趣、

難有承知仕り、就右者表向御届替仕り方なる表御座り哉、

又者直其筋相心得、別段御届不申上りる考可然哉、此段相伺り、以上、

七月廿五日 松平薩摩守

右一通

書面之趣老被 仰出外儀ニ付、分_レ届書被差_レ外(由脱カ)不及外

右一通

右二通ノ上包ニ

篤君様御生母之儀ニ付御書取六通トアリ

又包紙アリ左ノ如シ

篤君様 五

右府様御口状

今般御養女被成進_レニ付、君號并 御名字等幾久敷目出度と進申_レ、

御使

七月

北小路刑部權少輔

右一通

御記錄奉行_ニ

篤君様御事、

近衛右府様御養女御願之通被 仰出候付、北小路刑部權

少輔御使を以 君號并御諱御折紙を以被進、 御本書老

篤君様被遊御所持、寫被差越_レ付、格護可致置_レ、

八月

伯耆(島津久福)

右一通

右ノ數通白木箱ニ入付袋ニ入有之

右外袋ニ

六十九番

安政三年辰八月廿八日、伯耆殿より可致格護置旨、青山弥兵

衛致承知、白木御文書拾番箱_五納置_外事

238 齊興公御譜中

三年冬十月十六日、又往_ニ指宿_一浴温泉、十二月三日發_ニ指宿_一、抵_ニ中村別莊_一、八日歸_ニ玉里邸_一、

239 御系圖 久光公御子

一 男女十五人

一 女子

於佳

安政四年丁巳正月十九日生於重富第、母櫻井氏妹、

五年戊午五月二十九日夭亡、法名貞顔心涼、

240 齊興公御譜中

安政四年丁巳春正月二十八日、齊興發_ニ鹿兒島玉里邸_一、

三月十八日着江府、二十八日

大家以 上使堀田備中守、問齊興參府傳懇命、四月朔日齊興欲述參府之禮、而有疾不能登城、以使者獻物如例格、

241 御系図 齊彬公

安政四年丁巳二月十五日

大家下 命曰、爾後比月朔望等、須入大廊下左側第二房而後進見、若歲首及令節・八朔、姑隨先蹤可也、

242 白木御文書拾番箱中 七十番

口裏 大目付江トアリ

松平薩摩守

朔望其外登 城之節、向後大廊下下之休息所罷在様可被達、尤年始五節句等先是迄之通可被心得、此段も可被達置、

御記録奉行

先月十五日大御目付伊澤美作守殿より御留守居御呼出

る、

太守様御扣席之儀、別紙之通御書取を以被仰渡、左

太守様御登 城被遊り得者、阿部伊勢守様より御直達之筈、御不参付、御留守居御呼出る被成御達、旨被仰渡り段申上、御書取致格護帳面を可記置、

三月 下總

行包紙 朱 七十番

安政四年巳三月十五日、下総殿方橋口与一郎江被成仰渡、白木御文書拾番箱へ納置之事

243 白木御文書拾番箱中 七十一番

太守様御子様

(言形女) 典姫様

御實母 すま

右之親

亡伊集院中二 兼珍

右者御實母并右之親可申出旨被仰渡趣承知仕、右之通御年寄被申上、此段申上、以上、

巳五月廿日 御廣敷御用人

右包紙 朱 七十一番

太守様御女子 典姫様御母附并右親姓名實名、御廣敷御用人より申上横切書付壹通、安政四年巳五月廿三日トアリ

島津齊彬
順聖院様御家督涯、岡部與兵衛山田將監家説身分立身之申出外

節、御家老衆に御渡之御書取

一名不正者政務第一之大害之旨、經書等も相見得、

通鑑書も、第一周室の各名分を亂りたるを歎き記始

めたる哉に相見得、名分之儀者不容易事なり、過去外

儀者無致方外得共、以來士・商之差別ハ格別ニ有度、

其上當時從

公邊士道之儀、分る被仰出外御時節ニ外間、是迄之仕

來相改め名分を正し度事と存、右ニ付此度町人兩人、(岡部與兵衛・魚住嘉藏)

身分沙汰吟味申出外趣尤ニ外得共、年數格別も無之、

其上前文之趣意も有之外間、町年寄格申付、米錢等品

物褒美遣し、勤功賞美いたし外者如何可有之哉、左

外の以來急度名分を正し度外間、勤功有之外節、是亦

格式上りの伺者相止、褒美亦ハ三町年寄上席迄之格式

ニ階級を立、伺之方可然哉ト存外、右之儀新規之事ニ

あり得共、

公邊におひても、如何様勤功外とも、町年寄上席より

上に町人之身分御引直被仰付外例も無之、且者名與器

不可以假人旨、聖語も有之外間、右様名分を正しく、

在鹿_島島新聞 日七年九月三十日

島津齊彬公の諭旨

前項に記せる鹿兒島縣人懇親會に於て、蒲生仙氏か朗讀せし渡唐船碇泊場を臺灣に開くべし、との密諭書の一節は左の如し、

安政四年八月十九日、二の丸御茶屋に於て、臺灣の内に

渡唐船碇泊場御取設の御趣意被爲在外御旨、拜承仕外、

其御言に、「琉球の内先嶋・與那國島より、天氣好き時は

山影も見へると言ふ、地圖を考ふるに、天度も僅の間なれ

は、果して其通りなるへし、島津登琉球在番の節、先嶋(久備)

の漂流人を殺したる趣届出したる事ありたり、近地に其

様暴惡なる所ありてハ甚だ妨なり、兎角人道を教へ其害

を除くの法を設くへし、就てハ先づ初に渡唐の汐掛り場

を定め、往來毎に汐掛りし、後々は家をも建させ、在番

人を置き土人を懷け、人道を教ふるの手順にすべし、西

洋人が牛皮大の地を買い、漸次一國と押し弘めたる例もあり、夫に習ひ碇泊(碇脱カ)の近地に上陸休息場の家を拵へ、追々取弘る時ハ、ハ遂ニハ手廣ノ地ヲ得ルニ至ルベシ、然ルトキハ、先島人共など後々難に遭ふの憂もなく、中山王は土地も弘まり、且産物多く、殊に砂糖の名産あれば琉球の益少からざるへし、今通りにてハ、清國より全島の支配ハ逆も手の及ぶ處にあらず、遂には外國人の領地となり、琉球又は日本の妨となるへし、速く此方より手を付け、外人より取占められざる様にするを肝要とす、着琉の上ハ琉人を諭すには、漂流人暴害に遭はざる取締の爲め、渡唐船碇泊場を設け上陸休息所等を取立よ、との一事を以て内諭し、清國政府へも其旨を届出る手順に取計ふべし、初めより手弘めの見込ある趣申し聞けて、琉人の弊驚いて苦情申立つるは相違なし、其邊の心得肝要なり、臺灣ハ熱國にて、南方は清國人より役人も出張り開けたる由、多くは明末の人なりと聞く、西北の一方は未だ開けず暴惡の野人のミなりと、島津登能く存じたり、碇泊場は港の良惡次第なれとも、成へく先嶋に對する地を見合第一なり」との 御沙汰被爲在候、

246

御系圖 齊彬公御子

一 男女十二人

一 哲丸

安政四年丁巳九月九日生於鹿兒島、母同典姫、

五年戊午三月二十三日立爲世子、

十二月依齊彬之遺命、爲茂久之世子、

六年己未正月二日夭亡(以十月廿一日爲忌日)、法名哲惠院殿玉容靈

明大禪童子、

247

在釋抄中

齊彬公御筆

造士館 演武館考、

大信公御代厚き尊慮を以て御造立之處、其後何となく

致衰微り付、此節改る掛申付り條、是迄之悲弊を改め、

造士之文字に相叶り様可取計り、

一 演武館之儀と同様ニ相心得、修練之精粗且平常之心懸

等、微細ニ檢察無油斷可令沙汰り、

一 學問之標的者、修身齊家治國平天下之道理を研究、本

末先後を致知別、然る當時之政務奉行りる能き任

堪り様ニ心掛專要之事ニり、文章詩作及儒者學問中一

端之科業にて稽古尤ニ得共、專造士之法相立、正學之風奮起様ニ、學術厚吟味可然事ニ存リ、

一第一三綱五常之本領を守り、義理を明にし名分を正し、

各祖宗を敬尊ひ、生國之爲に道を開リ儀、天理自然之

本意ニハ處、當時儒者と唱リ中ニ者、我皇國を及夷狄

同様ニ心得違、古典者勿論律令格式又者六國史以下ニ

至リハ及不辨別之者も有之ハ半歟、然者孔子之道等

及不協、第一

天照皇大神之御明慮を可畏儀ニ有、右等之處一同深く

分別、學風令振起、追々國用ニ相立リ様、宜有工夫儀

專要ニハ、

一古昔聖賢之言行を以て一身を正し、扱今日の世上に引

鏡へ、時勢相應之政務を執行ハ基本を修行にてこそ誠

の學問と存リ、いかほと博學多才ニハとも、今日の行

ハ士道に背キハ者修行之註及無之ハ間、館中之役者

能ク心を潜め深致勘者、和漢之經史ニ涉リ名義を明辨

いたし、興廢治亂之本原を研究し造士之道相立、國家

之良臣追々出來ハ様致教導ハ事緊要と存リ條、教授已

下諸役に及厚可申含リ、且又讀書ハ者意味取違ハ得

者雲泥之相違たるへきなれば、經書は勿論小學・近思

錄・大學・中庸之或問または論孟精義・語類文集・二

程全書・淵源錄等ニいたる迄、熟談之上今日の實行に

相應するの處修行第一と存リ、

一儒官相勤ハものは格別、其外之面ハは詩文章不得手ニ

ハ共、今日政事之一助ニ相成リ様ニ心懸爲致修行ハ儀

肝要と存リ、當時之學者と唱リものハ今日之世事ニ疎

く、經濟之道をも捨置、沙門同様制外之様ニ相成、其

行ハ正しからず、外々よりもまた制外之様ニ心得ハも

間々有之ハ、全く學問之趣意取違ハ故と被存リ、古今

之賢相、智將イツれも明に

皇國の大道を辨得、漢土經傳之旨趣まで貫通いたし、

國家に力を盡ハ事蹟は典籍に歴然たり、然れば名分に

暗ク道理に明かならずハは何事も難整事ニハ、忽ハ

時務を考ハ事第一ニ有、井田之法は西土三代之良法な

れとも、宋朝ニ有者難行、朱子も時と位を考得社會之

良法も發明有之ハ如く、時勢當然之位を量リハ儀、學

問無之ハ者道理相應之所置者難叶事と存リ、假令和

漢之經傳を誦讀詩文に通達ハ共、道義ニ暗ク時勢に達

せずハ者、實ニ無用之腐儒たる之間、右様之處上下

一同厚く心得ハ様可申達ハ、

一古今家國之政務に致関係りものは、須臾も致捨置學問難歎

こゝ處、士分以上不致學問者多くゆゆへ、義理に昏く

正心修身之實行無之、利欲不當之行ひも有之故、家政

向衰亂れ士風も正しからず、役職相勤り者共にも夫々

仕向之修理条歎に昏く、緩急輕重之時務に疎く、名分義理

之筋合をも不辨様子も相見得り、是等之儀者各格式に

も可恥事こゝ間、一同公務之隙を考へ修行有之り様可

申達り、

一正學を致講明物理を明しめり儀者、惣る人倫に基き日

用實行△▽爲にて、假令數萬卷を記誦し詩文章達者こゝ共、

實行なくては其誼も無之、日新公いろは御詠歌の御意

味にも相違奉恐入次第こゝ、其書を讀たる迄こゝ實行

薄く、郷里に居て子弟之師と可仰德行も無之、役義申

付りる泰利録(マ)に心を配り、當座之利得を考へ萬代不朽

之良法に暗く、更に仁義を本として時勢務歎を施りもの者

少く、甚私嘆敷事こゝ存り、早竟全く無學のうへ、たま

く讀書之者有之りても、道義之學問致さず、徒に讀

過ちり故と存り間、已來學術致一新、義理之取捨を決

し、俗學儒歎之舊弊を致改正度事と存り、

一天下に學校之設け有之りハ、全く人道を修治する間為歎

て不可闕者勿論之事こゝ、然者五常之本原に由て五倫

之定分を踐ミ、文徳を修め武備を治る事こゝ、經義を

明らめ心術を研き兵法武術の藝事を勉強して、治亂之

政事こゝ通達する事等、惣る是人道中之要務と存り、孫

子こゝも、彼を知り己を知るもの百戰して不殆と相見得

り、左り得者と漢之書籍のミならず、外夷防禦第一之

時節こゝへハ、夷狄之情態を致識別彼の長を取て我の

短を補ひ、上下一同心を合、本朝の威武を擴充四夷制

御之事聖歎、當時武夫之急務と存り間、餘力には西洋和解

之諸書を熟覽し、外夷之風俗器械をも致辨別我羽翼と

なして、益

皇化萬國に行亘りり様心掛肝要こゝ存り、中こゝ大身之

面々ハ、成童入學之期こゝ至り適造士館に出席り共、學

局之賞飭は自然之理こゝ、切磋之功十分こゝ調兼り道

理、且は國中而已之學友こゝ者井中之蛙こゝひとしくり、

往々重職をも授け公私之大事可委任もの共こゝ處、切

瑣之功乏敷りては、臨機應變之所置等者申に及はず、

公界向之禮式より始め、國々の形勢人情世態に疎く井

蛙之見識こゝ者、心得違之儀表可有之歟、既こ公邊拜

禮等之節不都合之振舞も有之、他國之者に對し頑愚之

應答など、當國ニ限らず他藩重役之内間々及見聞外表有之り、然者文武之修行を專要として、物毎疎からぬ様心懸度存り、隣境肥後・肥前等者、一門支族之家嫡等家來兩三人召運、平士巡歷の姿あり、隨意ニ文武修行之由ニ外、是等者輕々敷様ニ得共、國家を大事と考り得者至極之良法ニ外、大身之面々ハ父母之姑息を離れ、家中諸士阿諛をまぬかれ、卑賤之辛苦を識り得て各國之事情に達しり良法と存り間、已來志有之人々者、家嫡にても無役之内、他國修行兩三年願出り様申付度事と存り、殊ニ昨年

宰相様よりも、寄合以上之面々ハ別る學問第一と被仰出り事故、家柄之面々一涯志ヲ勵し、各父祖之令名を穢さる様、普く文武を練習し、又者諸士之龜鑑ニ及相成、

宰相様尊慮を奉安り様、心懸專要之事と存り、

右之條々、以書面改め急度申付り間、後年ニ至る迄

心得違無之様、館中役人者勿論諸士一同に可申渡り、

家語曰、政之不申君之患也、令之不行臣之罪也と相

見得り條、能く可申付り、

造士館 演武館之儀、

大信院様厚以

思召被召建置り得共、何分心掛薄處方御用立り人物相少り付厚可心掛、右ニ付學問之大躰且武道心得之儀共御別紙之通細々、御筆御書取を以被 仰出、誠ニ以恐入難有 御趣意り條、被 仰出之通學問武道相勵、往々屹と御用立り様心掛、可奉安

尊慮候、

右之通可奉承知り、

島津

下總久松

〃

伯耆久松

〃

登久松

新納

駿河久松

樺山

伊織久松

右者安政四年丁巳十月七日仰出

白木御文書拾番箱中 七十三番

御記録奉行に

町人之儀、商家之勤功を以身分品能被仰付來り得共、

以來身分格式被引上り儀屹と不被仰付、爲御褒美米錢頂戴被仰付、是迄一代郷士格被仰付り勤功之者三町年寄格、代々郷士之場三町惣年寄格、其こ又り格別勤功有之、御取譯被成下り者惣年寄上席と、階級を立御取扱可被仰付り、

一家來身分之者、商家之勤功を以御褒美被仰付り節者、米錢等之御品被成下り迄こゝ、町方役格者不被仰付り、

一金山町人、苗代川人之内、勤功之御取譯を以郷士格被仰付置り者有之候得共、是以以來者其通こ者不被仰付、米錢等之御褒美又者相當之勤方等可被仰付り、

一道之嶋人之儀者、掛離り場所こゝる武士者少く、近來吳船度々渡來之事り間、武藝等心掛り志之者者、是迄之通郷士格等可被仰付り、

一是迄格式品能被 召出置り者之儀者、過去候事故不被爲及

御沙汰り間、居住職分等是迄之通被仰付り、

一武藝學問又者以職業被召出り儀者、是迄之通工商之差別可有之り、

右者名分不正者政務第一之大害こり旨、經書等こ者相見得、通鑑書出しも、第一周室こり名分を亂りたるを、

歎き記始めたる哉こ相見得、名分之儀者不容易事こり、過去之儀者無致方り得共、以來士商之差別者格別こ有之度、其上當時從

公邊士道之儀分る被 仰出り時節こり間、是迄之任來相改名分を正し度候間、以來町人共勤功有之り節、是迄之格式上り者相止り、褒美又者三町惣年寄上席迄之格式こ階級を立り可然、右者新規之事こり得共、公邊こおひて者、如何様之勤功りとも、町年寄上席より上り町人之身分御引上り被 仰付り例者無之り間、御取扱振之儀以來右之通此節被究置候旨、被

十一月

駿河

右包紙ニ
（卷一七十三番）

安政四年巳十一月十五日、駿河殿を被成御渡、御帳留いたしり様町田孫一郎致承知之、御格式帳書裁り上、白木御文書拾番箱江納置り事

249

齊興公御譜中

安政四年冬十二月五日敍從三位一、

安政四年十二月五日

大家賜_レ御鞍鐙及時服三十_一、先_レ是齊彬遣_レ使獻_下世所_二愛

藏_二刀三腰_一刀備前信房、脇差藤中、國次、短刀備前長義、謝_二

大家成_レ婚故有_二此賜_一、

正四位上源朝臣齊興

右可從三位

中務、武肅邊海、文安黎氓、守職藩服、聯姻柳營、誠是將門、楨幹實爲、邦家干城、宜授崇位、或示寵榮、可依前件、主者施行、

安政四年十二月十五日

ネイン 二品行 中務 卿熾仁親王宣

正四位下行中務大輔臣卜部朝臣久隆奉

正五位下行中務少輔臣藤原朝臣資生行

正二位 行 權 大納言 臣 建通

正二位 行 權 大納言 臣 忠香

正二位 行 權 大納言 臣 齊敬

正二位 行 權 大納言 臣 幸經

正二位 行 權 大納言 臣 公純

正二位 行 權 大納言 臣 忠能

正二位 行 權 大納言 臣 正房

正二位 行 權 大納言 臣 家信

正二位 行 權 大納言 臣

正二位 行 權 大納言 臣

正二位 行 權 中大納言 臣

薩摩宰相

上卿 久我大納言(建通)

安政四年十二月十五日 宣旨

正四位上源齊興朝臣

宜筱從三位

藏人頭左大辨藤原胤保奉

口裏_二

口 宣案

右一通

上卿 久我大納言

職事 廣橋頭左大辨

右一通

正二位行權中納言臣 光政

正二位行權中納言臣 實愛

從二位行權中納言臣 實德

從二位行權中納言臣 愛長

從二位行權中納言臣 俊克

從二位行權中納言兼左近衛權中將臣 實良

從三位行權中納言臣 忠順

權中納言從三位兼行左衛門督臣道孝等言

制書如右、請奉

制、附外施行、謹言、

安政四年十二月十五日

朱イ

制可

月日辰時正四位下行大外記兼掃部頭造酒正

中原朝臣師身

左中辨顯彰

關白從一位朝臣

太政大臣關

從一位行左大臣朝臣

從一位行右大臣朝臣

內大臣正二位兼行右近衛大將朝臣

式部卿闕

正三位行式部大輔以長

正四位上行左大辨胤保

告從三位源齊興奉

制書如右、符到奉行、

正四位下行式部少輔兼備前守義脩

大錄

(天皇御應) 少錄友也

少錄

安政四年十二月十五日

朱イ

白木御文書拾番箱中 七十四番

口裏

(不)

「宰相様御位階御昇進付、以後之御家格_ニ者御心得被遊間敷旨

被仰渡_外付_而之事

正月朔日夜到來

極、急飛脚使」

宰相様御事、御官位共格別結構被 仰付_外事_ニ付、此上

御昇進之御沙汰_ニ難被爲及_外得共、御在職中年來之御勤

25201

勞、其上

廣大院様御續柄と申、且者當時之御縁邊旁出格之 思召を以、從三位 御昇進被 仰付外事ニ付、以後之御家格ニ者御心得被遊間敷旨、

御名代鳥津淡路守殿御承知有之候ニ付、奉承知様御役人中に申渡り、此段申越り條、被達 貴聞、其許御役人中に被申渡り儀共、何分及可被取計り、別紙御書取寫相添差越り、以上、

但御記録奉行に者別段相達り、此段者爲御心得ニ付、且御書取本書者今日迄者高輪方不被相下り、

巳十二月十六日 鳥津豊後

鳴津下總殿

嶋津伯耆殿

島津 登殿

新納駿河殿

樺山伊織殿

松平大隅守

其方儀官位共格別結構被 仰付外事ニ付、此上昇進之儀

者御沙汰ニ難被及び得共、在職中年來之勤勞、其上

廣大院様御續柄と申、且者當時之御縁邊旁出格之 思召を以、從三位昇進被 仰付外事ニ付條、以後之家格ニ者被心得間敷り、此段可申聞旨
御沙汰ニ付、

253 白木御文書拾番箱中 七十五番

吉書

- 一 神社佛閣修造興行事、
- 一 可專勸農事、
- 一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

安政五年正月十一日 齋彬(花押 Na1)

254

舊御番所御文書四番箱中 兼ニ齊興公御三位御叙階
女房奉書トアリ

さつまの宰相より、今度位階の御禮として、黄金百兩・御きぬ三十疋しん上おハしまし、ひろう申てりへ者、おもしろく思しめしりよし、よく心へりて申せとてり、御ころへりてつたえさせまいらせりへくり、かしく、

御いまの御局へ

者申給へ

仰 女政五
二期

口達覺

公義御用蒸氣船爲傳習、役々并蘭人乗組、山川より城下に乘廻し上陸有之り處、見物甚敷、中にも諸士之面々役向之制止をも不聞人、無禮不法之所行有之よし、兼る士風之沙汰申達り奉、加様之節之爲にり處、如何に相心得り哉甚た不可然、第一公邊役人に對し不相濟、殊に此度傳習乘廻之儀兼る觸達り奉有之、蘭人にも爲傳習之公邊より御呼寄に相成、御扶持をも被下罷在者共にて、蘭人ながら公邊役人同様之譯にり、且又蘭人者萬國へ致通船り間、當國之諸士禮儀をも不辨、無禮至極と申觸りへ奉、第一日本之御恥辱、我等にも命令不行届姿にて面目を失ひ申り事にて、京都・關東に對し恐入り事にり、先日山川番所に休息致り處、前之濱通行之下輩之蘭人迄も冠りものを取り、敬て罷通りり様子、禮節を守り行届たる事と存り、左様之事辨へりこそ誠の士にて、先日のおき所行ハ、大小帶しり計にて、凡下之族同然之事にり、兼る郷中申合等如何相心得り也、不審千萬に存り、殊に荷付馬等追放ち、又者年少之もの共は惡事申進めり族者有之、且又通船之節、石なと打りものも有之段相聞得申

り、一躰士之面々者凡下之混雜可致制止身分にり處、却る右様之所行絶言語り事にて、左程不勘辨之者多とハ不存り處、誠ニ沙汰之限りにて、第一武士道之所行にはづれたる事と存り、先比奉申達り通り、士道と申者仁義禮智信の五常を守り、禮儀を重し忠孝を可心掛處、不法之振舞等いたし、又は申進め候面々之心中如なる所存にり哉、第一國之恥辱我等之恥辱にも相成り處、夫等を辨へざる段五常之道に者相叶申問敷り、公邊にては此節者海防第一御心配之御時節ゆへ、傳習を名として手當之様子、又者政事の善惡見聞之爲、不時之乘廻し被仰付りも難計、たとへ無左りても、歸府之上現事見聞之成行言上者差知れたる事にり處、右様不行儀之事申上りり奉、公邊之御都合世上之聞得如何と相心得り哉、扱蘭人に城下之要地爲致見聞り事、不可然存りものも定て可有之り得共、兼る堀田備中守差圖に乘廻しり段奉行より通達有之、罷越りを差留めり譯無之、たとへ差留りとも、公邊役人承知有之ましく、其上押隠しり様にてハ、第一嫌疑之所も難計りゆへ、心能承知之返答も申達り、且又蘭人にも御扶持迄被下りもの共にて差支無之故、公邊役人附添乘廻しり筈にて、左程可忠譯にては無之と存り、

か様之所勸辨も無之、無禮不法之振舞を勇氣と相考り哉、孔子之、南方之強か北方之強か君子之強かと、被仰り所等能く勘辨可有之り、若又此節申達り内、我等の心得不宣と存り面々も有之りハ、其譯早く以書面可申出、様子に寄り直に可及論判り、扱又此後御目付乗組、又々可乘廻様子にも相聞得申り、就て先日之恥辱をも雪ぎ度り間、萬一乘廻りり者、諸士一同前文之旨相守り、見物に罷越りとも、役人・蘭人上陸通行之節者別り行儀正敷、先日之無禮引替格別に存り様無之り者、國之恥辱我等之恥辱致方無之り、併し國之爲を不存、我等之爲をも不顧所存之者者勝手次第たるへくり、昔より敵國之使節等差越り節ハ、猶更禮義を崇ひし信義を専らに心掛り事第一と承及び、旁以後心得違無之様、早々支配組下之面々可申達り、以後如何之所行有之りハ、當人者勿論親子兄弟迄も急度可爲曲事り、以上、

安政五年午四月十五日

右之通御書取を以 仰出、誠以奉恐入事に故、付る者以來心得違之向者有之間敷り得共、萬一取違之者も有之り者、第一我々共無申譯次第り條、一統謹り奉承知、

御趣意之旨屹と可相守り、此旨向々に不洩様早く可致通達り、

安政五年
四月
戊午

下總

登

駿河

伊織

256

白木御文書拾番箱中 九十四番

敬白 天爵靈社起請文之事

一先國王跡職我等に被 仰付候、誠以筋目不相替、此邦相續候儀難有仕合辱奉存候、此 御厚恩生涯忘却仕間敷事、

外ヶ条略ス

神文略

中山王

尚泰判

安政五年戊午五月九日

進上 中將様

257の1

白木御文書拾番箱中 七十六番

敬白 天爵靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、三司官役被 仰付、冥加不
淺難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相動候
事、

外ヶ條并神文略

安政五年戊午五月十三日

小祿親方

良忠判

敬白 天爵靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、三司官役被 仰付、云、以下

同斷略

外ヶ條略ス

神文略ス

安政五年戊午五月十三日

譜久山親方

朝典判

雜抄

安政五年五月廿八日再度假條約調印許容ノ建議ヲ爲ス、

其文ニ曰、

墨夷之儀

神州之大患不容易御時節ニ付、猶又諸大名存寄被聞

召度、并永世安全奉安

勅慮、皇國一同後患無之方略可及言上旨

勅答之趣、并御添書謹る奉拜見外、先達る後再度申上
外更ニ所存無御座外得共、左ニ申上外、

勅答之趣にて者、下田條約之外難被遊御許容御事と奉存
外、全躰萬國ニ致卓絶赫々たる

神州、若夷狄之輕蔑毫髮も有之候ハ、弘安之御嘉例、彼

か非望之邪典(曲カ)を御糺、尊王攘夷義理之大本ニ被爲基、

鎖國之御良法弥堅固ニ被遊 御用、萬一襲來仕外とも、

神武擴充御誅伐當然と奉存外、乍併方今之時節能々相考

外に、二百年來御治世打續き自然奢侈之風相競、萬民怠

惰之志を生し、上下一同今日之事務に逐れ、武備忽に相

成外段誠に恐入奉存、當時外寇攻守之具者、第一大砲礮

臺或ハ堅牢之軍艦等十分に無之外る者、夷狄と者申な

ら當時戰鬪に取馴、戎器を巧制いたし、航海等にも熟練

之者共御座外得者、御必勝之算如何可有之哉、右ニ付外者

勅諭之趣を以御取扱相成外ハ、いつれ兵端相開可申哉、

勿論

勅諭 台命御座外得者、人心激勵爲報國、盡忠戦外者必

定之事御座外得共、本文通武備相弛、大砲礮臺軍艦等御

手薄く外る者、人心如何ほと奮發仕外とも、忠魂難相逐

^イ都合表可有之奉存^イ、殊に彼等者數ヶ國合體にて、若四

方邊海に出没いたし^イハ、終に^イ御國力及疲弊、内亂表計らひかたく、甚掛念仕^イ、國之大事在祀與戎と、古傳にも相見得申^イ通、實以億兆民命之所寄にて

皇國之御浮沈相抱^イり大機會と奉存^イ間、能^イ、御思慮被

爲^イ、在度、天時不如地利、地利不如人和、未有志之設施

等、御國險之時用大矣哉等之古言、御省察尤^イ御時節に

て、第一人和繼^イ、諸御手當情實^イ殘る所なく御行届無^イ之外^イ、

皇國之御守護 御奉職難被爲整世態^イ御座^イ、尤舊典に

も別段外夷を不近付と之事も無^イ之、慕

皇猷歸化する者^イは^イ若^イ姓氏田宅迄も賜、東照宮より英夷

に交易免許之御朱印頂戴被仰付^イり處、寛永以來彼之邪宗

を御一洗被爲^イ在、御打拂ひ之御建法此節 御變革之儀、

彼に被壓^イり様相見得、千載之御遺憾とも可申奉存^イり得共、

とくと天下之形勢を相考^イり、一旦忍小成大之 御主意

を御根本に相居^イられ、假に約定通

御許容被爲 在^イり外有之間敷奉存^イり、尤約條之内^イ、天主堂

取建之儀^イ者今一度御談判有^イ之度、尤和好之儀^イ者古より多

く偷安之策に出、遂^イは^イ是^イより敗衄を取り事往^イ、其例も不

少^イり得^イ者、時と位に應^イし^イ儀肝要と奉存^イり、併前文假條

約通御許容にも相成、自然苟安之風押移儀も夷狄之邪誘

に陥^イり^イやう罷成^イりて^イ者、御興復迎^イモ^イ六ヶ敷、天下之御

大事災害無^イ此^イ上御儀と奉存^イり間、何卒假に約條御取結^イひ

之上^イ者、

御興業之 御主意を寸陰も無^イ御油斷、非常之 御英斷被

爲^イ立、御武威海外に致^イ光被^イり様御成徳を被^イ爲^イ修、萬事舊

染之汚習、奢侈怠惰之風俗御一變、諸藩之究迫を御取延、

富國強兵ノ基^イヲ被^イ爲^イ植、上下一同當膽之愷を成^イし、外寇

制御之役十分^イニ被^イ爲^イ整度、左^イり^イる^イ彼等^イ弥^イ邪謀^イ相^イ馳^イり^イハ、

不被^イ爲^イ差置、罪御征伐有^イ御座度、左^イり^イ得^イ者^イ御必勝無疑、

自然又彼より 皇化^イニ服^イり様可相成奉存、猶又衆議御參

考之上御決定被^イ爲^イ在度奉存^イり、勿論

勅諭 台命之上和戰兩條如何様共可奉畏^イり、以上、

安政五年 月 日 御名

右順聖院公御逝去前之御建白

白木御文書拾番箱中 七十七番

一海有之御鞅一口

但伊勢駿河守貞雅作

一 菊地蒔繪鏤李目梨地扇面散之内ニ略二十四孝蒔繪

一 淺黃絹袷服紗包

一 外家箱桐白木崩黃絹眞田緒付鴉目黒ニ銅座四部一色

付

一 兩咲之御鏡一掛

但右同作

一 塗蒔繪右同斷

一 淺黃絹袷袋入

一 外家箱右同斷

御鞍鏡

一 辻山城極折紙二通

但外家箱桐白木崩黃絹眞田緒付鴉目黒ニ銅座四部一

色付

右考

御臺様御入 城、御婚姻迄委被爲整外爲御禮、御傳來

之御腰物被遊御獻上外處、御滿悦被 思召上、御時

服并御鞍鏡被遊 御拜領外付、御鞍鏡之儀者御既御讓

御道具に被入置、御格護被仰付外條、到後年紛敷無之

様可記置者也、仍如件、

安政五年午六月廿五日

伊織 久成

駿河久仰

登久包

伯耆久福

左衛門久徵

御馬預

260 齊興公御譜中

安政五年戊午七月十六日齊彬薨、遺命使^(忠義)島津忠徳爲^レ後、齊興依降^レ令如左、

261 御系図 齊彬公

安政五年戊午七月十六日逝于薩府^{以七月二十日爲忌日}、享年五十、法號英徳良雄大居士順聖院殿、葬于福昌寺、九月五日大家遣^ニ加納遠江守久徵^一、賜^ニ香奠銀五十枚^一、

262 御歴中

一 安政五年七月父齊彬病歿、本年十二月二十八日茂久繼^ニ家統^一、初齊彬存日、亞墨利加使節船渡^ニ來於江戶近海^一有^レ所^レ請、措置之際公武御指旨聞^レ多^ニ違忤^一、因^レ此慮^レ有^ニ世步艱難之兆^一、欲^レ盡^ニ皇國守護之任^一、深勞^ニ心

思_レ所_レ詭_レ勉_レ區_レ處_レ未_レ成、速_レ其_レ歿_レ乎、久光・忠義繼_レ承遺志_レ、俱憂_レ念_レ國事_レ忘_レ寢與食_レ、先是昇平已久、眼下我百寮法規例則禮秩過重人困_レ煩冗_レ、有司亦泥_レ區々格例_レ、商議在_レ再_レ且_レ曰百事遲滯、是故採_レ國論于衆_レ、改_レ革舊染之百弊_レ、百般着_レ意物理_レ、明_レ辨本末前後_レ、選_レ擇方今之宜_レ、勉_レ以_レ易簡_レ敷_レ國典_レ、然則方今時務之要莫_レ如_レ脩_レ武撥_レ亂維_レ持_レ 皇國_レ參_レ、抑又守護之專(実カ)務而武門之要途也、是以沙汰百執事_レ、而廢_レ棄冗官_レ或令_レ兼務_レ、浩_レ拓軍務局_レ設_レ多數之官_レ授_レ其職事_レ、戒_レ城下數千之兵士_レ、自_レ三_レ年十六_レ以至_レ四十一_レ爲_レ度_レ、其他健疆堪_レ事者、不_レ拘_レ三_レ年齒_レ、式日必出_レ局令_レ調練_レ砲銃之技_レ、然後除_レ式日_レ每日講_レ之、雖_レ治務之諸尹屬吏_レ皆_レ同_レ焉、屢列_レ陣於廣野_レ習_レ慣隊伍之進止_レ、發_レ擊砲銃_レ以視_レ其成業_レ、置_レ標的於野外洋上_レ以試_レ發彈中否_レ、或遠町商_レ量鹽硝_レ、科_レ知藥度_レ等審密定_レ制度_レ、更啓_レ開海軍局及器械製造場_レ、簡_レ撰其人_レ令_レ採_レ其業_レ、于_レ時數々久光・忠義親自臨_レ教場_レ、令_レ講_レ其業_レ試_レ其精蘊_レ、察_レ其巧拙_レ褒_レ之呵_レ之、薩隅二州及日州一郡百二十餘處之外城原來有_レ兵士_レ、擁_レ故城墟_レ比屋家居、各處分_レ遣地頭_レ令_レ都_レ督圍邑_レ、且_レ下_レ教條_レ令_レ士_レ研_レ究(具カ)

武道_レ、式日調練等之處置率等_レ于城下_レ、令_レ民_レ努力農事_レ、内外一切抱_レ忠節之心_レ、而令_レ識_レ有_レ所_レ守所_レ、恥_レ、勉激_レ昂士心_レ、又出_レ府庫儲蓄之金貨_レ令_レ充備_レ軍儲_レ、購_レ求若_レ十多數之砲銃_レ盈_レ滿其要具_レ、抑忠義素封之國土在_レ大邦之僻遠_レ、雖_レ人愚陋_レ昔者戰國之餘韻未_レ竭_レ、土俗好_レ武加筋、始祖從五位下豐後守島津忠久文治二年始封_レ此土_レ、以來地無_レ變遷_レ至今始七百載、中間累世之祖先撫_レ綏藩士_レ、視_レ之如_レ子_レ丁寧告戒、勉_レ令_レ蹈_レ善道_レ時、主_レ信義_レ而令_レ解_レ悟士道_レ、垂統倡_レ業綿延_レ今、藩士亦淹久懷_レ撫育之恩_レ、上下和協、景_レ嚮依賴某之家_レ以_レ忠順_レ爲_レ心、方今武教成就、異日盛_レ揚久光・忠義勤_レ王之志業_レ者自_レ根據_レ、於是乎近結_レ齊彬之遺志_レ、且提_レ久光・忠義積年履歷之大綱_レ、竣_レ後文之節目_レ矣、

263

白木御文書拾番箱中 七十八番

包紙

宰相樣御沙汰書二通トアリ

太守樣此節無遣方就御仕合米、

御跡目樣御儀未御若年之御事_レ外處、御國務之儀暫_レ及難被捨置御譯合_レ外故、萬端

(齊興)
宰相様被 聞召届、此涯御介助被成進_レ條可申渡旨、
宰相様御沙汰被爲 在候、

八月 御取次 得能彦左衛門

右一通

包紙・豊後

筑後

伯耆_{エト}アリ

(齊興)
薩摩守殿此度之形行不及是非仕合_ニ候、跡目之儀末年若

ニ候故、國務被致沙汰候次第致安堵兼、此涯可致介助段
者先達_ル相達置_レ、就_ル者領國中并當所屋敷中、取締向
其外致規定置_レ儀共、聊不致忘却様、家老初向_ク誠實_ニ
心掛、猶是迄より_及一涯相勵可致精勤候、就中勝手向掛
置_レ面_ク者、無益之失費無之様鎖細_ニ可遂吟味_レ、殊更
風俗之儀政務之基本第一之事候條、兼_テ申渡置_レ通文武
忠孝基、行跡律儀相嗜、古國之士風不取失様可心掛_レ、
右者家督年若之折柄、萬一一統心掛等閑_ニ、家法相弛
ミ不行届之儀共有之候_ル者、不可然時節_ニ候條、深令心
配屹と此段達置候事、

右一通也

右外包_ニ
(朱・七十八番)
宰相様、御沙汰書式通

右安政五年午九月九日左衛門殿_ノ何之通可致格謹附旨、青山彌
兵衛致承知之、白木御文書拾番箱_{正納置}外事

264

齊興公御譜中

安政五年八月二十六日齊興發江府、十月十一日着_ニ鹿兒島

玉里邸_一、

265

白木御文書拾番箱中 八拾番

忠昌公御肖像

一御懸物 一幅

一一文字風帶紫地牡丹唐跣

一大一文字茶地桐雲紋唐華

一上下丸龍金入

一軸并卷口金滅金金物紫啄木

一縮緬服紗包

一黒塗箱入金粉銘書

一金滅金鍍金糸入安田打紐付

一縮緬服紗包

一春慶塗箱入黒漆銘書絹眞田付

持明様御肖像

一御懸物 一幅

一 一文字風帶白地龍紋金入

一 大一文字紫地牡丹唐艸

一 上下茶地桐雲紋唐華

一 軸并卷口金滅金金物紫啄木

一 縮緬服紗包

一 黒塗箱入金粉銘書

一 金滅金鍍金糸入安田打紐付

一 縮緬服紗包

一 春慶塗箱入黒漆銘書絹眞田付

右老興國寺江 御安置被遊置外

御二靈様、

忠昌公御肖像老格別被遊御古外付、臨寫之上御表粧御取

仕立被仰付、

持明様御肖像之儀老御修復ニ、御表粧御取替都

御手許計ニ御成就相成外付、本之通被遊 御安置外條、

至後年無鹿抹致格護外様可被申渡外、左外是迄 御安

置之

忠昌公御肖像老寺社方格護被仰付外付、是又後年無鹿抹

可被致格護者也、仍如件、

安政五年九月十九日

新納駿河 久仰判

寺社奉行

右包紙

書附寫トアリ

〔右外包〕
〔朱〕八十番

御兩靈様御肖像御懸物云々御書付之寫卷通、御記録所格設被仰付外、安政五年午九月廿日駿河殿より伊藤彦介致承知、白木

御文書拾番箱へ納置外事

266

齊興公御譜中

安政五年九月二十七日 上使安藤對馬守信睦來ニ于高輪

邸一、賜二

温恭廟遺物短刀美濃國兼衫 一腰一、

267

白木御文書拾番箱中 八十一番

箱蓋ニ

御臺様御印章之寫

上包

御筆トアリ

又内ノ紙包ニ

御臺様御持越ニ相成外

(の2)

御印章之寫留置

記錄所_レ可相下事トアリ

御印章_ニ

朱印數多シ寫方略ス

右外袋_ニ

八十一番

安政五年午十月四日登殿_ル上村休之進_江被成御渡、白木御文書

拾番箱_江納置_外事

白木御文書拾番箱中 八十二番

包紙_ニ

宰相様御沙汰書

順聖院様御忌服被爲受、御出付_外様從

公義被仰渡御承知被爲 在_外付_外考、

二丸之格を以

御本丸櫻之間邊_江御住居被成_外様、

宰相様御沙汰被爲 在候事、

上包_ニ

御達書

口裏_ニ

大久保右衛門_トアリ

松平薩摩守_切

(の1) 268

(の3)

嶋津又次郎(忠義)

松平薩摩守卒去_ニ付、五十日・十三日之忌服請_外様可被達_外、尤忌服之書付差出_外様可被致_外、又次郎儀當地_江呼寄到着次第可被申聞_外、

上包_ニ

覺_トアリ

覺

一又次郎様御忌服御請之御達書壹通

一御同人様櫻之間邊御住居被成_外様

宰相様御沙汰書壹通

右考御記錄所_江被相下置_外條、入念格護可有_外、以上、

午十月十五日

豎山武兵衛_印

御記錄奉行

右外包_ニモ年間ナン安政五年午十月ナルヘン

269

御系圖 久光公御子

一男子十六人

一女子

於後

安政五年戊午十二月五日生於重富第、母櫻井氏妹、
文久元年辛酉四月隨父久光入於本室、

明治八年十月二十七日卒、神號瑞心俊幸姬命、

270 齊興公御譜中 十五年十二月

曩

(孝明天皇)
今上内勅近衛左大臣忠照公傳旨齊興、而使橋口勘之

承行安谷山波平殿工中

玉體所帶之御劍、而自齊興進獻之於

闕、因忠照公奏請為受領、於是

勅許行安大和介、行安兄橋口助之丞安利助行安

殿、故特賞之、舉兄弟共為二代城下士、

271 白木御文書拾番箱中 八十三番

橋口助之丞

安利

橋口勘之丞

行安

右者此節

禁裏御所御太刀、行安為御打被 帶度

緞慮候間、從

宰相樣御調進被為成候樣御賴被進候旨、

近衛左大臣忠照公より御傳へ相成、御劍打方被 仰付

候、依之受領御願被下候處、大和介と

勅許被為 在、旁無類之事柄候故、別段之以 思召身

分被引上、一代御小姓與被召出候、且又安利儀表右御用

後見相勤付、為御褒美一代御小姓與為被 仰付事候條、

其段兄弟之者共為申聞置付樣

宰相樣御内沙汰被為 在、重疊冥加之至候條、難有可奉

承知候、以上、

但御刀袋錦地に行安と紋柄織出付樣御注文付、其通

為御織御調進被為成善候、

午十二月

永江休之丞

右之通於玉里 御殿、橋口助之丞・橋口勘之丞兄弟之者

共相達付樣被仰付、右書付相渡置付、依之其段御記錄

所御帳表記置付樣可相達旨、

宰相樣御沙汰候間、其通可被致取扱候、以上、

宰相樣御附
御側後

安政五年午十二月

永江休之丞

御記錄奉行

(の1)272

白木御文書拾番箱中 八十四番

口裏^ニ
松平薩摩守江

松平薩摩守

傳來秘藏之腰物差上、御滿悅被 思召外、依之時服并御鞍鎧被下之、

右一通也

(の2)

口裏^ニ
松平薩摩守家來江

御用之儀外間、明五日四時松平薩摩守名代一類中一人登城外様可仕外、

十二月四日

右一通也

(の3)

薩摩守一類之内依 召、今日嶋津淡路守致登 城外處、

(佐土原藩主、忠寛)

此度傳來秘藏之腰物獻上仕、御滿悅被 思召外、依之薩摩守に拜領物被 仰付外付、於國許承知之上御禮勤如何相心得可申哉、此段奉伺外、以上、

御付紙

老中江名代差出候様可仕候

十二月五日

松平薩摩守内

半田嘉藤次

右一通也

(の4)

例書

松平大隅守家督中、天保九戌年西丸御普請に付上納金仕外處、同十亥年十二月拜領物被 仰付外節、在國中に付於國許承知之上御禮勤之儀奉伺外處、掃部頭様・御老中様方・伯耆守様・備中守様に名代差出外様可仕旨被仰渡外付、名代を以御禮申上外事、

右一通也

(の5)

御献上之御大小并御小サ刀御拵等出來上り、御手當宜外付、去月下旬志賀金八殿に伺書并御傳來書草稿持參、古來外御持傳之御品に付折紙等も無之外、新規に折紙取外る差上外方にも可有之哉、旁得と及示談外處、伺書并御傳來書共草稿通る存寄無之外、尤古來外御持傳之御品素外其時分折紙等可有之譯及無之、新規に折紙等被相添外る者、却る繕品に相成姿に外間、其儀に及間敷、御傳來書に御舊家之處も相顯、感心被仕外趣承外間、左外ハ、昨年及來月 御入城に、旁目出度月柄に及御座外間、十一月に罷成外る伺書差出御献上取計可申外間、猶又御含置給外様申出置外、左外る兼る被仰付越置外通、堀田様にも岩元太右衛門罷出、前段之趣に御内慮相伺

ハ處、何表書面通ニ有宜、御傳來書迄ニ有折紙ハ被相添
 付ニ者及間敷段も被仰聞付由承付、右ニ付別紙之通去ル
 七日、半田嘉藤次伺書并御傳來書最初堀田様御勝手ニ持
 參、入御内見、思召寄も無之付ハ、御表も可差上哉、又
 者御用番様に可差上哉、相伺ハ處、御存寄不被成御座付
 間、備中守様御方ニ有可被成御受取り付、表も差上付様
 と之事ニ有、直ニ御表ハ相廻り差出外處御落手、追有可
 被成御挨拶旨被仰聞付由ニ付、猶又志賀殿ハ者御都合向
 厚く頼入置付間、いつれ近く御差圖可有之付、先年
 宰相様御茶入御拜領之爲御禮、御掛物被遊御献上付御振
 合を以、御献上之前夕猶又別紙之通相伺、御當日御番頭
 御使者ニ有御献上相成付積ニ付間、御家老方并仙波市左
 衛門にも引合向も御都合能取計可仕付、御献上相濟付上
 ニ、おのつから御家老方も可被仰上越付得共、是迄之形
 行御献上之御手續等、就辛使御方御含迄ニ申越付間、達
 御内聽付儀共者御都合次第被取計度、別紙相添此段申越
 付、以上、

十一月十日

早川五郎兵衛

山田壯右衛門殿

(06)

以下四枚ノ一摺リトス

巳十一月七日御用御頼御老中堀田備中守様に差出付
 伺書并御傳來之趣書取左之通

御臺様御事舊冬被遊 御入城御婚姻迄迄被爲整付付、御
 禮旁冥加之爲、傳來腰之物御大小并拵付御小サ刀献上仕
 度段、薩摩守も奉願趣御座付處、願之通追有献上付様可
 致旨被仰渡付、依之右御品此節國元も相達付間、御差圖
 次第鮮鯛一折相添献上仕度、此段奉伺付様申付越付、以
 上、

十一月七日

御名内

半田嘉藤次

一御刀 備前國信房作 一腰
 長式尺六寸式分半

右者應永十七年六月、二十二代之祖陸奥守元久上洛之

節、從

將軍義持卿拜領ニ有候、

一御脇指 越中國國次作 一腰
 長九寸四分

右者慶長年鑑以前より當家傳來ニ候、

一御小サ刀 備前國長義作 一腰
 長壹尺七寸八分半

右者十一代之祖中納言家久朝鮮に持越秘藏之指料ニ有
 候、

右一枚トス

(07)

御差圖相濟ハ上御献上前日伺并御傳來書左之通

献上 御名

一御刀 備前國信房作 長式尺六寸二分半 一腰

一御脇指 越中國國次作 長九寸四分 一腰

一御拵付御小サ刀 備前國長義作 長壹尺七寸八分半 一腰

一鯛 一折

十一月

献上御腰物傳來書

一御刀 備前國信房作 長式尺六寸二分半 一腰

右者應永十七年六月、二十二代之祖陸奥守元久上洛之

節、從

將軍義持卿拜領ニ候、

一御脇指 越中國國次作 長九寸四分 一腰

右者慶長年鑑以前より當家傳來ニ候、

一御小サ刀 備前國長義作 長壹尺七寸八分半 一腰

右者十一代之祖中納言家久朝鮮ニ持越秘藏之指料ニ候、

安政四年十月

御名

右一枚トス

(08)

外箱之儀者中途疵付等無之様爲用心入付差越、御献上之節者内箱之分受臺ニ載セ付、外箱者相下ケテ積ニ外、箱銘書并請臺、下ケ札左之通

外箱 御刀 御脇指

内箱 進上 御刀 備前國信房作 一腰 御脇指 越中國國次 一腰 御名

外箱 御小サ刀

内箱 進上 御小サ刀 備前國長義 一腰 御名

御刀箱受台 御下ケ札式枚 御名

御看受合 御下ケ札 進上 御名

右一枚トス

(09)

御献上當日御目錄并御拵書左之通

進上

御刀 備前國信房 長式尺六寸式分半 一腰

御脇指 越中國國次 長九寸四分 一腰

御拵付御小サ刀 備前國長義 長壹尺七寸八分半 一腰

鯛 一折

以上

御名 御名乘

覺

御小サ刀 一腰 備前國長義 長壹尺七寸八分半

一御三所物金紋俱利伽羅龍裏哺 作光乘

一御柄鮫白

一御龜金

一御切羽金

一御頭角黒塗

一御縁赤銅七子色繪紋桐

一御鏝赤銅七子紋薄 作廉乘

一御柄糸煮紺

一御鞆黒塗

一御鷗目金

一御小刀 薩州住元平

一御下緒煮紺

一御袋萌黄緞子裏黒縹子緒紫

以上

御名

右一枚トス

右外包紙*

(采色)八十四番

安政五年午十二月

去巳十一月 御傳來之御刀大小并御小サ刀御献上相成り諸首

尾書留九通、白木御文書拾番箱^五納置外事

273

白木御文書拾番箱中 八十五番

知行目錄

高五拾斛

串木野下名村之内

鹿兒嶋小山田村之内

蒲生漆村之内

名寄帳在別冊

右考今般

宰相様從三位御昇進付、御用掛相勤分る致出精外付、別段之 思召を以、當三月五日於江戸右之通拜領被 仰付外條、全可有務候、仍如件、

樺 伊織

安政五年十二月廿八日

久成判

新 駿河 久仰判

嶋 登 久包判

嶋 伯耆 久福判

嶋 左衛門 兼印判

久徴判

永江休之丞殿

白木御文書拾番箱中 八十七番

包紙

御袖判トアリ

(花押 No.3)

今度我等江家督無相違被 仰出、領國之輩專重

公義之御政道萬端可相愼之、國家之仕置 御先代之通申

付、不致忘却堅固可相守之者也、

安政五年十二月廿八日

包紙
太田備後守

包紙
松平大隅守殿

松平和泉守

内藤紀伊守

脇坂中務大輔

今度同氏薩摩守願之通、遺領無相違養子又次郎被 仰付

外、然處又次郎事依爲年若、領分并琉球國仕置等之儀諸
事先格相違無之様、其方當分之内心を附取計、様可仕旨
上意外、可被存其趣、恐、謹言、

十二月廿八日

脇坂中務大輔 安宅判

内藤紀伊守 信親判

松平和泉守 乘全判

太田備後守 資始判

松平大隅守殿

右外包
八十七番

安政六年未二月八日、登殿より被成御渡、可致格護旨川上四郎

左衛門致承知、白木御文書拾番箱并納置之、事

白木御文書拾番箱中 八十九番

安政五年十二月廿八日付

太守様毎朔御條目ハ、文化六年六月十七日付之御條目ト同文故

忠義

初忠徳 茂久 壯之助 又次郎 從四位下 左近衛

少將 修理大夫 從三位 從二位 勲二等 正二位

勲一等

天保十一年庚子四月二十一日生於重富第、母島津山城

忠公女、

安政五年戊午十二月入襲封、初齊彬病日篤、時世子哲

丸生僅二歳、未能承重故願命大臣、欲使周防忠

教嫡男島津又次郎忠徳爲後、而以女暉姫之妻之、立

哲丸以爲其世子、既而其逝也請諸

幕府、於是老中召忠徳於國、乃持忌服十一月四

日發鹿兒島、十二月二十五日抵江府、二十八日應

教奧平大膳大夫昌服代忠徳登城、老中内藤紀伊守

信親傳命、許使忠徳爲齊彬養子領薩隅二州、

諸縣郡及琉球國皆如所請、昌服代拜焉、

二十九代忠義初メ忠徳 又次郎ト稱ス、天保十一年庚子

四月二十一日薩摩國鹿兒島ニ生ル、父ハ贈從一位權中納

言齊彬、母ハ徳川宰相齊敦ノ女、實ハ齊彬ノ弟從二位島

津久光ノ嫡子、母ハ島津忠公ノ女、初齊彬病ヒ革スルヤ、

大臣ヲ召シテ後嗣ヲ遺囑シ、世子哲丸生テ僅ニ二歳未タ

重キヲ承ル能ハス、故ニ國ヲ忠徳ニ傳ヘ、其女暉ヲ以テ

之ニ妻ハシ、哲丸ヲ立テ世子トセシム、大臣遺命ヲ奉テ

之ヲ幕府ニ請フ、安政五年戊午十二月忠徳江戶ニ抵ル、

幕府命シテ其ノ請ヲ許ス、封土故ノ如シ、

安政五年冬十二月

幕府許齊彬遺請、使忠徳爲齊彬後、領薩隅二州・日

州諸縣郡及琉球國如故、而以忠徳年若、故

台命使齊興姑注意國務、於是降令、

(表紙)

齊 彬 公 自 安政六年 正月
 忠 義 公 至 文久元年十二月

追 舊 記 雜 錄 卷百六十六

279 白木御文書拾番箱中 八十六番

嶋津又次郎儀、(忠義)薩摩守願置(島津齊彬)外通養子被 仰付、遺領無相違被下之、諸事薩摩守代之通可相心得、然處又次郎事依爲年若、領國中并琉球國仕置等之儀、諸事先格相違無之樣當分之内我等心を附取計外様可仕旨

上意候由、此節從

公義被 仰出、先以家統相續累代之領國無相違被下置外儀、安堵此事ニ外、就る者先達而相達置外通、領國中并江戸屋敷中取締向、其外追々致規定置外儀共不致忘却様、家老初向々誠實ニ心掛令精勤、且風俗之儀、文武忠孝ニ

280

白木御文書拾一番箱中 二番

包紙ニ 松平又次郎殿

基キ深遂吟味、行跡律儀相嗜、古國之士風不取失様可心掛との趣者、當家代々之家法ニ舊來致沙汰目出度致永續來、於領國表格別賞美之事柄ニ外故、此度從公義表分の御沙汰被爲 在、猶一往我等心を附先格無相違様可取計との御趣意蒙

仰、年老之我等深令心配候、乍然國家之爲難捨置事外故、殊更相勵國務萬端可致沙汰之條、家老初於向々我等心底相察、先般申渡置外趣意相貫キ、猶更無緩疎相守可拙忠節儀此時外條、屹と此段達置外事、

右外包紙ニ 仰出志通

右安政六年未正月廿八日駿河殿可致格護旨、平田九十郎致承知、白木御文書十番箱へ納置外事

貴殿事、故薩摩守殿遺跡相續首尾能被 仰出、別々悦入外、因茲先年故薩摩守殿に讓渡置外先祖代々相傳之家珍・別錄之表堅固被致所持、于子孫萬々歲可被讓渡之狀如

件、

安政六年正月廿一日 大隅守齊興御判

松平又次郎殿

右外包^二

文久二年壬戌閏八月廿七日黒田嘉右衛門宰領^三而從江戸持下、

御家老衆御拜見之上、毎之通格護可致旨、式部殿^四致承知、白

木御文書拾壹番箱^五納置^六事

三番^一

包紙^二

太守様江 宰相様より御護之

御重物御目錄志通

上包^三 重物目錄

重物目錄

一系圖

一文書五帖

一同卷物數十軸

一家康公御墨印一通

一秀忠公御感狀一通

一御判物十通附領知目錄九通

一記錄七百五拾六册

一源氏重代膝丸之御太刀一腰

改小十文字
光世作

一頼朝公御太刀一腰 号大十文字
無銘

一頼朝公御守脇指一腰 鳩作
無銘

頼朝公御本尊 弘法大師一
刀

一五指量愛染明王像一體 弘法大師
三拜之作

多田彌仲御守本尊

一摩利支天像一體

一忠久公御鎧一領

一右御鎧うつし一領

網切

一太刀一腰 兼永作

一旗二流 一流者時雨之旗
一流者白旗

八幡十 一太刀一腰 青江恒元作

△宗久公御袖刀▽ 一般若之劍一振 波平行安作

一太刀一腰 宗近作

血吸之劍

一劍一振 弘法大師作之由

一手鎗一本 城州長吉作

一一本杉馬驗一本

一太刀一腰 眞利作

一琴一面 遠鷹

一衛府太刀一腰 貞真作

一鞍一口 鏡一掛 梨子地蝶之高時繪紫大形
総虎皮泥障野沓四方手添

一旗一流 八幡大菩薩之文字有之

一太刀一腰 康次作

一腰物一腰 包平作

鷹之巢

一脇指一腰 宗近作

八景 一釜一口

小泉 一青一頭

平野肩衝 一茶入一箇

朱衣肩衝 一茶入一箇

一腰物一腰 長光作

一脇指一腰 弥正宗

一脇指一腰 堀尾正宗

一太刀一腰 正恒作

一腰物一腰 來國光作

一太刀一腰 備前長光作

一腰物一腰 正宗作

一腰物一腰 吉家作(音興譜ニヨル)

一腰物一腰 來國行作

一脇指一腰 筑州住左文字作

一太刀一腰 備前守家作

一腰物一腰 無銘左文字(作脱カ)

一脇指一腰 貞宗作

一腰物一腰 國行作

一腰物一腰 則光作

一脇指一腰 備前兼光作

一腰物一腰 則宗作

一腰物一腰 備前吉房作

一腰物一腰 備前助真作

一腰物一腰 一文字作

一腰物一腰 備前長光作

一腰物一腰 三條吉家作

一腰物一腰 越中國則重作

一腰物一腰 來國光作

一脇指一腰 來國光作

一腰物一腰 備前則宗作

一腰物一腰 貞宗作

一腰物一腰 正宗作

- 一脇指一腰 來國行作
- 一腰物一腰 延壽作
- 一脇指一腰 尻掛則長作
- 一腰物一腰 備前助守作
- 一腰物一腰 包永作
- 一脇指一腰 延壽國重作
- 一腰物一腰 大和志津作
- 一腰物一腰 和州則長作
- 一腰物一腰 信國作
- 一腰物一腰 備前國弘利作
- 一腰物一腰 來國眞作
- 一脇指一腰 信國作
- 一腰物一腰 信國作
- 一腰物一腰 阿州氏吉作
- 一脇指一腰 備前國清真作
- 一腰物一腰 一文字作
- 一腰物一腰 備前國師景作
- 一腰物一腰 青江貞次作
- 一腰物一腰 美濃國兼重作
- 一腰物一腰 三原正近作

- 一腰物一腰 豊後國長盛作
- 一腰物一腰 備前國清光作
- 一脇指一腰 相州綱光作
- 一腰物一腰 美濃國兼明作
- 一腰物一腰 兼則作
- 一脇指一腰 美濃國兼定作
- 一腰物一腰 備州長船住景光作
- 一脇指一腰 備州長船住景光作
- 一鞍一口 鐙一掛 (數脱カ)
龜甲高蒔繪金具四方手添
- 一鞍一口 鐙一掛 菊之御紋高蒔繪梨子地桐之地紋蒔繪有鍍黒塗
- 一鞍一口 鐙一掛 伊勢伊勢守貞宗作葱梨子地鷹并唐團扇高蒔繪鍍紋拔之透燕
- 一鞍一口 鐙一掛 伊勢駿河守貞雅作菊地蒔繪鏹李目梨子地扇面散之内略二十四孝蒔繪
- 一旗一流
- 一腰物一腰 吉房作
- 一短刀一腰 右馬尉源國賴作
- 一鞍一口 紋猿金具
- 一鞍一口 鐙一掛 黒塗紋金具
- 一轡一間 正宗作

以上

安政六年正月廿一日

島津氏家譜

六年己未二月七日從四位下ニ敍シ左近衛少將ニ任セラル、

家茂公召ニ忠德於 城ニ、親加ニ元服ニ敍ニ從四位下ニ任ニ左近衛少將ニ、賜ニ御諱字ニ、更ニ名茂久久、稱ニ修理大夫ニ、賜ニ御刀美濃國兼定一腰、茂久獻ニ御太刀一腰、御刀美濃國兼永一腰、縮緬二十卷・銀三十枚・御馬一匹ニ謝レ之、

○三月十三日 上使賜レ告賽品如レ例、十八日登レ城見ニ大家ニ謝レ之、乃賜ニ御刀相模國綱廣一腰・御馬一匹ニ、爲ニ嗣位初如レ國故也、

285の1

舊御番所御文書四番箱中

從四位下源朝臣茂久

正二位行權大納言藤原朝臣忠能宣、奉

敕、件人宜令任侍從者、

安政六年二月七日大外記兼掃部頭造酒正

右外包ニ

文久二年壬戌閏八月廿七日黒田嘉右衛門宰領ニ而從江戸持下、御家老衆御拜見之上毎之通格護可致旨、式部殿ヲ致承知、白木御文書拾卷番箱ニ納置外事

御系図 忠義公

安政六年己未正月二十一日受ニ譜乘重器ニ如レ例、

○二十八日登レ城見ニ於

大樹家茂公ニ、獻ニ御太刀一腰・御刀美濃國兼春一腰・縮緬二十卷・銀百枚・御馬二匹ニ、謝ニ襲封恩ニ、家臣九人亦見如レ例、二月七日

284

舊御番所御文書四番箱中

茂

安政六未

二月七日

家茂(花押 No.4)

松平修理大夫殿

名ヲ茂久ト改メ修理大夫ト稱ス、三月國ニ歸ル、初メ齊彬外患日ニ逼リ、國家漸ク多事ナルヲ憂ヒ、天下勤王ノ唱主トナリ、藩屏ノ任ヲ盡サント欲シ、弊政ヲ革メ冗費ヲ省キ國力ヲ軍備ニ傾ケ、軍務局ヲ開テ以テ陸兵ヲ練リ、海軍局ヲ設テ以テ海軍ヲ習ヒ、器械製造場ヲ建テ、以テ器用ヲ足シ務テ心ヲ海防ニ用ユ、而シテ其經營設施スル所未タ中道ニ至ラスシテ卒ス、是ニ於テ茂久遺志ヲ紹述シ益之ヲ盛大ニシ、時ニ親シク諸局ニ臨テ之ヲ督責ス、

右一通

中原朝臣師身奉

285の2

從四位下

薩摩侍從

上卿

中山大納言

同

職事

廣橋頭左大辨

侍從

上卿

中山大納言

同

職事

萬里小路左少辨

右一通

285の3

從五位下源朝臣茂久

正二位行權大納言藤原朝臣忠能宣、奉

敕、件人宣令任修理大夫者、

安政六年二月七日大外記兼掃部頭造酒正

中原朝臣師身奉

右一通

285の4

松平修理大夫

從五位下

上卿

中山大納言

同

職事

廣橋頭左大辨

修理大夫

上卿

中山大納言

同

職事

萬里小路左少辨

右一通

285の5

侍從源朝臣茂久

正二位行權大納言兼右近衛大將源朝臣建通宣、奉

敕、件人宣令任左近衛權少將者、

安政六年二月七日大外記兼掃部頭造酒正

中原朝臣師身奉

右一通

285の6

源朝臣茂久

右可從五位下

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宣授

榮爵、用旌寵章、可依前件、主者施行、

安政六年二月七日

朱イ

二品行 中務卿 幟仁親王宣

正五位下守中務大輔臣藤原朝臣敬直奉

正五位下行中務少輔臣藤原朝臣資生行

正二位行權大納言兼右近衛大將臣 建通

正二位行權大納言臣 齊敬

正二位行權大納言臣 幸經

正二位行權大納言臣 忠能

正二位行權大納言臣 家信

正二位行權大納言臣 忠禮

正二位行權大納言臣 光政

正二位行權大納言臣 忠房

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣 公績

正二位行權中納言臣 實愛

正二位行權中納言臣 實德

正二位行權中納言臣 愛長

正二位行權中納言臣 俊克

從二位行權中納言臣 季知

從二位行權中納言臣 忠順

從二位行權中納言兼右衛門督臣 資宗

正三位行權中納言兼左近衛權中將臣 道孝

權中納言從三位兼行左衛門督臣等言

制書如右、請奉

制、附外施行、謹言、

安政六年二月七日

制可

朱イ

月日辰時正四位下行大外記兼掃部頭造酒正

中原朝臣師身

右中辨經之

關白從一位朝臣

太政大臣闕

從一位行左大臣朝臣

從一位行右大臣

內大臣正二位兼行左近衛大將朝臣

三品行兵部卿貞教親王

從四位上行兵部大輔紀季

正四位上行右大辨長順

告從五位下源朝臣茂久奉

制書如右、符到奉行

從四位下行兵部少輔兼出雲守長教

大錄氏裕

少錄

少錄



朱印

安政六年二月七日

右一通

285の7

上卿 中山大納言

安政六年二月七日 宣旨

從五位下源茂久

宣敍從四位下

藏人頭左大辨藤原胤保奉

口裏^一

口 宣案

右一通

285の8

上卿 久我右大將

安政六年二月七日 宣旨

侍從源茂久朝臣

宣任左近衛權少將

藏人頭左大辨藤原胤保奉

口裏^二
口 宣案

右一通

285の9

上卿 中山大納言

安政六年二月七日 宣旨

從五位下源茂久

宣任修理大夫

藏人左少辨兼右衛門權佐藤原博房奉

口裏^二

口 宣案

右一通

285の10

上卿 中山大納言

安政六年二月七日 宣旨

從四位下源茂久朝臣

宣任侍從

藏人左少辨兼右衛門權佐藤原博房奉

口裏^二

口 宣案

中務、表節兵欄、宣勤羽衛、精誠無懈、夙夜在公、宣申

從五位下源朝臣茂久
右可從四位下

正二位行權中納言臣 俊克

正二位行權中納言臣 愛長

正二位行權中納言臣 實德

正二位行權中納言臣 實愛

正二位行權中納言臣 公績

正二位行權大納言臣 忠房

正二位行權大納言臣 忠禮

正二位行權大納言臣 光政

正二位行權大納言臣 家信

正二位行權大納言臣 忠能

正二位行權大納言臣 幸經

正二位行權大納言臣 齊敬

正二位行權大納言臣 建通

正五位下行中務少輔臣藤原資生行

正五位下行中務少輔臣藤原直奉

正五位下行中務少輔臣藤原資生行

左近衛權少將

薩摩少將

上卿

久我右大將

同

職事

廣橋頭左大辨

右一通

上卿 中山大納言

安政六年二月七日 宣旨

源茂久

宜敍從五位下

藏人頭左大辨藤原胤保奉

口裏

口 宣案

右一通

右一通

榮級、用旌寵章、可依前件、主者施行、

安政六年二月七日

朱イン

二品 行中務卿 職仁親王 宣

正五位下守中務大輔臣藤原朝臣敬直奉

正五位下行中務少輔臣藤原資生行

從二位行權中納言臣 季知

從二位行權中納言臣 忠順

從二位行權中納言兼右衛門督臣 資宗

正三位行權中納言兼左兵衛權中將臣 道孝

權中納言從三位兼行左衛門督臣等言

制書如右、請奉

制、附外施行、謹言、

安政六年二月七日

制可

朱イ

月日辰時正四位下行大外記兼掃部頭造酒正

中原朝臣師身

右中辨經之

關白從一位朝臣

太政大臣闕

從一位行左大臣朝臣

從一位行右大臣

內大臣正二位兼行左近衛大將朝臣

三品行兵部卿貞教親王

從四位上行兵部大輔紀季

正四位上行右大辨長順

告從四位下源朝臣茂久奉

制書如右、符到奉行

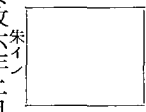
從四位下行兵部少輔兼出雲守長教

大錄氏裕

少錄

少錄

安政六年二月七日



白木御文書拾番箱中 八十八番

包紙ニ
太守様御明細書壹枚卜アリ

養父故薩摩守齊彬

實父同人弟島津周防

薩摩國一圓 本國薩摩

高六拾萬五千石餘 大隅國一圓 松平又次郎 午十八歳

日向國之内 生國薩摩

居城薩州鹿兒嶋

右包紙ニ
(朱)八十八番

安政六年未二月十八日駿河殿方春山弥兵衛江被成御渡、可致格

護旨致承知、白木御文書拾番箱へ納置外事

白木御文書拾番箱中 九十番

鳴津周防殿 (久光)

右者相應之年輩ニ及被罷成、殊ニ

太守様格別之 御續ニ付、以來年頭・八朔其外御禮等之

節々、表向御禮席出仕之儀御宥捨被仰付、時宜次第於奥

御對顔被爲 在外様、左外之奥に被罷通リ節々、櫻之間

に被相扣候様被 仰付、

(宮之威家、久光)
鳴津圖書

右者

太守様無御據御續合付、別段之以 思召、以來年頭・八

朔・五節句・月次等於御座之間、御一門方引續鳴津左衛門上ニ御禮被仰付、御留守年者於竊之間謁御家老、

御祝儀等申上り様被仰付、左外之扣席之儀者休息所次

之間に罷在、年頭・八朔者御一門方御禮早之獨禮着座被

仰付候、

右之通被仰付、間帳面可記置、

三月

(新納久仰)
駿河

(右包紙ニ)
安政六年未三月十五日駿河殿

御文書拾番箱江納置之件事

白木御文書拾番箱中 九十一番

包紙ニ
太守様御明細書トアリ

薩摩國一圓 本國薩摩

安政六年未二月七日 實父同人弟島津周防

高六拾萬五千石餘 大隅國一圓 從四位下少將

松平修理大夫茂久

日向國之内

生國薩摩

未十九歲

外
拾貳萬三千七百石 琉球國

居城 薩州鹿兒嶋

包紙^二
〔朱〕九十一番
安政六年未四月朔日伯耆殿を被成御渡、白木御文書拾番箱へ納
置之外事

(の1) 289
白木御文書拾番箱中 九十三番
去年就

御代替致誓詞差上度外、此段相伺外、以上、

二月十一日 御名

右一通

〔島津茂久〕
松平修理大夫

明朝六半時私宅に被相越、可有誓詞外、

一罰文迄調可有持参外事、

一充所掃部頭・老中五人、座並之通可被相認外事、

一判形者手前への被致、血判者此方への可被致外事、

三月十日

右一通

(の3) 起請文前書

一奉對

公方様忠勤之志專一奉存知不可有表裡事、

一御一門方公家衆并親類縁者其外挾野心族於有之者、早
速可致言上外、勿論一味同心仕間敷事、
一就于

御代替弥重

公義、御仕置等疎略不奉存可相守外、

附琉球國之儀、背仕置雖企邪儀外荷擔仕間敷事、

右條く於致違背者、

梵天帝釋四天王惣而日本國中六十餘州大小神祇殊伊豆
箱根兩所權現三島大明神八幡大菩薩天滿自在天神部類
眷屬神罰冥罰各可罷蒙者也、仍起請文如件、

安政六年三月十一日

松平修理大夫御判

井伊掃部頭殿

太田備後守殿

間部下總守殿

松平和泉守殿

内藤紀伊守殿

脇坂中務大輔殿

〔裏〕
松平修理大夫様
御留守居中様

伊沢美作守内
大津源藏
小林盛衛
福住省三

(の4)

(06)

御書附一通

但去年就 御代替

以手紙啓上仕り、然者來ル十一日頃

御代替御誓詞御座り、其節何之御故障等不被成御座被成

御出席り哉、美作守被致承知度り、否貴報被仰知可被下

り、此段各様迄自私共宜得貴意旨被申付、如斯御座り、以上、

三月八日

猶以差向り儀ニ付、否今日中被仰聞可被下り、以上、

右一通

(05)

來ル十一日比

御代替御誓詞御座り付、

御出席被遊り哉被致承知度、大御日付伊澤美作守殿用人

中より別紙之通致到來り間、何分早々被仰渡度奉存り、

左りハ、其趣を以返答可仕り、來書相添此段申上り、以上、

未三月八日

早川 務

(喜入久島) 主水様

右一通也

御誓詞被差上度御伺之儀

御用番

脇坂中務大輔様

御用人

金田 蔭

右に持參仕演説之上差出り處、被成御落手り旨、右以御用人被仰聞り、

右之通今夕私相勤此段申上り、以上、

未三月十一日

半田嘉藤次

(山久封) 筑後様

追り申上り、大御日付衆に御届之儀者、毎之通御留

守居附役名前之書附を以、御用御頼遠山隼人正殿に

申出爲置り、此段表申上り、以上、

右一通也

(07)

御書附一通

但明十一日六半時和泉守様御宅に

太守様御出、被遊

御誓詞り様との儀

御老中

松平和泉守様

御用人

南八右衛門

右方御達被成り儀御座り間、今日中壹人罷出り様御用人

中よりの切紙致到來罷出外處、御書附右御用人を以被成
御渡り間、可申上旨申述置り御書附差上申り、

右之通今夕私相勤此段申上り、以上、

未三月十一日

早川 務

主水様

追申上り、御書附之趣被遊

御承知上、今日中表方御使者を以 御受可被仰達

儀と奉存り、且又

御誓詞之御書附等明曉七時迄私方に被相下り様被仰

渡奉存り、將又明日御同席様ニ老殿方様御誓詞御

座外哉、私心得迄ニ相尋申り處、御同席様方ニ老御

壹人及無御座由、右御用人方承申り、此段及申上り、

以上、

右一通也

三月十一日

太守様

太田備中守様 (實 忠)

鍋嶋熊次郎様 (直 忠)

井上筑後守様 (正 和)

(藤坂安宅)
中務大輔様御養子

(松平親良)
脇坂淡路守様 (安 斐)

市正様御嫡子 (親 貴)

松平但馬守様 (德 一)

伊豆守様御嫡子 (松前崇広)

松平志摩守様 (德 一)

交代寄合 松平兵部様

高家衆

京極内後守様 (丹 乙) (高 徳)

戸田日向守様 (氏 親)

由良信濃守様 (貞 時)

大澤右京大夫様 (基 忠)

宮原内藏頭様 (信 愛)

織田對馬守様 (信 愛)

日野若狹守様

前田上總介様

武田安藝守様

横瀬左兵衛佐様

表高家衆 前田愿十郎様

織田主計様

右御方々様今朝御誓詞御座り由、

右一通也

(の9)
今般

御代替ニ付、松平和泉守様御宅に

太守様今朝六半時

御出被遊 御誓詞り様、昨夕和泉守様方御書付を以被

仰渡り付、今朝六ツ時御供揃ニ被遊 御出外、依之

御誓詞御紋付御挾箱に入付、中小姓并御挾箱付御納戸

與力才領ニ私一緒ニ御同人様御宅に前以罷越居、

御誓詞箱共御用人杉戸助右衛門に相渡、追付

太守様被爲 入り段申達置り、左り外

御出之節御玄關薄縁に罷出

御誓詞御用人に相渡り段申上、扣所に罷在、

御誓詞之御方々様御揃之上 御誓詞無御滞被爲濟り由

ニ 御退出被遊り、

一御誓詞御宛所掃部頭様・御老中様御五人御座並之通御

認有之り處、御掛大御目付衆御名前御先例ニ御書入

相成事之由、依之公用人に認込之儀頼入り處、右御連

名之次ニ一字相下り、伊澤美濃守殿御名前認込相成

外段承申り、

一御誓詞案貳通之内壹通老御老中様に、壹通老大御日付

前條御同人に差上申り、

一爲御用心御本書御同様認方被仰付置り、御誓詞持參

仕候段御用人に申達り處、不及差出私方に扣置り様承

申り間持歸り、宰領之中小姓を以御右筆方に相納置申

り、

一今朝御供半田嘉藤次相勤申り間、於御門前奉伺、和泉

守様に御挨拶之御使者直ニ相勤申り付、別段嘉藤次方

首尾申上り、

一今日御誓詞之御方々様御名前別紙を以申上り、

右之通今朝私相勤此段申上り、以上、

未三月十一日 早川 務

主水様

右一通也

(の10)

御老中

松平和泉守様

御取次

里村又十郎

右者今朝和泉守様於御宅

太守様被遊 御誓詞り付私御供相勤申り、依之無御滞被

爲濟_レ御挨拶考、御使者御門前_ニ直_ニ相勤、御口上御相應申述_レ處、追_ル可申上旨右御取次_ヲ承申_レ、

右_ニ罷出

二月御用番
脇坂中務大輔様
御取次
角田留平

太守様御誓詞御伺書先月中務大輔様_ニ御差出被置_レ處、今朝松平和泉守様於御宅 御誓詞無御滞被爲濟_レ付、右御案内旁御使者を以被 仰逢_レ段 御口上御相應申述_レ處、追_ル可申上旨右御取次_ヲ承申_レ、

右之通今朝私相勤此段申上_レ、以上、

未三月十一日

半田嘉藤次

主水様

右外包紙

(朱)九十三番

太守様御誓詞云、書付都合拾壹通、安政六年未五月三日駿河殿

森喜藤太江被成御渡、白木御文書拾番箱へ納置之_レ事

白木御文書拾番箱中 九十二番

新納駿河(次郎)

右先祖武藏忠元事、天文・慶長之間凡五十餘ヶ年戰國之

砌柄、自他國諸所之合戰毎度拔群之武功を顯し、殊_ニ大口之儀敵地之境目_ニる警衛至_ル危難之場所柄_ニ候故、御人撰を以、忠元事大口地頭職被仰付彼地_ニ引越、年齢八十五歳迄數十年之間晝夜安堵之暇無之、苦戰艱難種_ニ之御奉公相勤、敵徒之兵勢取押へ、昇平之今_ニ到_リ境目鎮護之仕向嚴密致治定置、土民迄も遺徳を慕_ヒ候_ニ相及、且又

御先代様方朝鮮 御在陣中_ニ考、依 仰鹿兒嶋_ニ致勤番、諸士懦弱之風俗等致改正_レ儀共、旁

宰相様別_ル御感_ニ被 思召上、先年大口_ニ忠元靈社御創建被仰付置_レ處、當駿河儀_ニ當職心頭掛何篇精密吟味行届、別_ル御用立候次第、早竟忠元精忠之遺志を受繼、家訓不空儀と 御感之御事_ニ被爲 在、此度猶又格別之以思召、忠元靈社神階加級之儀、京都吉田家_ニ被

仰進候趣有之、忠元明神并忠元大明神と順く不日_ニ神階加級相成、別_ル御満足_ニ被 思召上、右考別段誼方社惣大官司本田三位藤原親徳大口_ニ被差越、式法を以社殿_ニ致勸納候様被仰付_レ、右次第厚 思召之程往_ク駿河御奉公方之心得_ニ及可相成事_レ條、篤と爲致承知置_レ様

宰相様御沙汰御座候、

四月

御取次
永江休之丞

左一通添書也

別紙書付、昨日玉里御休息所

宰相様御前に駿河殿被召呼、拙者御取次を以相渡候、就

右後年爲見合御記録所に書留置り様可相達旨 御沙汰候

條宜被取計り、以上、

安政六年未四月十六日

永江休之丞

御記録奉行

右包紙

(米九十二番)

安政六年未四月十六日右休之丞佐多徳八郎江相渡り付、白木

御文書十番箱へ納置り事

旧御番所御文書四番箱中

口裏
安政
四廿九

さつまの少將より今度位階の御禮として、黄金百兩・御
きぬ三十疋しん上おハしまし、ひろう申てりへ者おもし
ろく思しめしりよし、よく心へりて申せとてり、御心え
りてつたへさせられりへくり、かしく、

292

白木御文書拾番箱中 九十五番

敬白 天罰靈社起請文之事

一先國王跡職我等に被 仰付候、誠以筋目不相替此邦相

續候儀、難有仕合辱奉存候、此御厚恩生涯忘却仕間

敷事、

外ヶ條略

右條々今度

御家督就

御相續、諸事御先規之通弥以相守可申候、若於相背者、

神文略

安政六年己未五月六日

中山王

尚泰判

進上 少將様

293

全 九十六番

靈社神文前書之事

一私儀攝政役被 仰付、誠以外聞實儀難有仕合奉存候事、

外ヶ條略

右條々今度

御家督就

御相續、諸事御先規之通弥以相守可申候、若於相背者、

神文略

安政六年己未五月九日

大里王子
朝教判

全 九十七番

敬白 天爵靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、三司官役被 仰付、冥加不

淺云々、以下略

外ヶ條略

右條々今度

御家督云々、略

神文略

安政六年己未五月九日

譜久山親方
朝典判

敬白 天爵靈社起請文前書之事

一私儀云々、三司官役被 仰付云々、略

外ヶ條略 神文略

安政六年己未五月九日

池城親方
安邑判

(01) 296 白木御文書拾番箱中 九十八番
順聖院様御事、於御國許被遊

御逝去外付、大圓寺に老御石塔御建立不被爲 在御先例

二外處、從

(篤姫、家定夫人)
天璋院様御厚キ 御内沙汰之御旨被爲 在、此度老別段

之御譯合を以爲被遊 御建立御事外條、此旨大圓寺に申

渡可承向に及可申渡外、

七月 (川上久世)
筑後

右ノ張紙左ノ通

御本文之通大圓寺に申渡、與表御役人に致通達、高輪御

側役に及申越外、

七月十六日 取次(佐司家、久厚)
嶋津王生

右ノ通也

(02) 順聖院様御石塔大圓寺に 御建立之儀、從

天璋院様御厚キ 御内沙汰之御旨被爲 在、別段之御譯

合を以被遊 御建立外付、御取立方等之儀共夫々申渡相

成居外處、此節 御石塔者勿論、御玉垣等迄及都る御出來

相成外付、拙者并御役々々及致拜見外處、御石柄及宜、何

及無御申分御成就相成、御點眼御供養及被爲 在、其段者

天璋院様御方の大奥傳を以御届申上り處、被遊 御満足
由、御つほね様より申來り旨小野嶋申出り段御側御用
人申出り、將又

御同人様より御手親御寫之御梵經、御石塔下御石櫃之内
に御納メ可被遊之御事ニ被相下り付、一箱に御入付、
(齊彬女)
暉姫様より奉御同斷之御梵經并

順聖院様御幼年之御時分御翫物等御殘有之り付、是又一
箱に御入付、都合二箱右御石櫃に御納被遊り、左り右
蓋裏に御形行之御石誌被記置り方可宜と御記錄奉行に相
しらへ、別紙之通彫刻被仰付り、右付の老奉伺答候得共、

差掛之事故申談、直様右通取計仕り、且又
順聖院様御事於其許 御逝去之御事り得共、此度老從
天璋院様御厚キ 御内沙汰之御旨被爲 在、別段之御譯
合を以被遊 御建立り段、別紙之通大圓寺等に申渡り、

此段申越り條
御兩殿様被達 貴聞、其許御記錄奉行に被達置り儀老、
何分奉可被取計り、以上、
未七月廿九日 川上筑後

鳴津豐後殿 (久宝)
鳴津伯耆殿 (久通)

嶋津登殿 (久也)
新納駿河殿 (久四)
樺山伊織殿 (久成)

(03)

石櫃之内藏匣、又其中有二匣、其一
大樹 (徳川家定) 御臺所 天璋院君手親爲

順聖公騰梵經一部以納之、
暉姫君亦納親寫梵經一部及
先考生前所愛玩之物、凡

公薨於國則納牌位於大圓寺、別不建靈塔、而今建
順聖公之石塔於茲寺者、以有

天璋院君之特旨也、於戲是孝思追慕之情蓋所以不得已也、
安政六己未六月穀旦謹誌、

右敷通包紙
嶋津豐後殿
樺山伊織殿
川上筑後

297

齊興公御譜中

安政六年己未九月十二日 以九月十七日爲忌日 齊興病薨于本府玉里
館、享年六十九、法號明覺亮忍大居士金剛定院殿、二

十七日葬于福昌寺、

謹按

公之寢病也、禱禳醫藥莫弗盡之、其薨也殯殮祭
祀之禮悉莫弗如

先公之例也、而今也欲記其詳、莫文獻以徵之、

夫

(為律所宜)

大慈公以來國之大故大禮於其事實、闕略如斯矣、

△正始▽

宗高每操筆到于茲、不以不歎息也、

○大樹家茂公聞齊興公疾大漸也、十月十五日使老中

下宜厚療養之、命且問病賜魚尋聞其薨也、

十七日使松平攝津守忠恕賜香燭銀五十枚、

○近衛大納言忠房卿納所親寫心經一卷於金剛定公靈

前、因令福昌寺永保存之云、

298 齊興公御譜中

凡吾

公之薨于鹿兒島也、江府菩提所大圓寺則唯置位牌耳、

不別建墓表于此也、

金剛定公之薨也、

前大樹家定公御臺所天璋院君、以孝思欲建墓於大圓

寺而招魂于茲以永述追遠之情、猶

順聖公例也、於是石工事成、今茲萬延元年庚申秋九月

十五日行點眼供養之式焉、其墓底石櫃中納

天璋院君所親寫梵經、又附之以

暉姬君

勝姬君其餘他家所在男女公族各自親筆物云、

299

白木御文書拾番箱中 九拾九番

一筆令啓達、

公方樣益御機嫌能被成御座外間、可御心易、將又家督

以後歸國弥無吳在之哉、爲御尋御看一種被下、依之

如此、恐謹言、

九月十九日

脇坂中務大輔
安宅判

内藤紀伊守
信親判

松平和泉守
乘全判

間部下總守
註勝判

(鳥津茂久)
松平修理大夫殿

右色紙
安政六年未十月十九日以宿次御到来付、致格護様駿河殿

森宮藤太致承知事

300の1 白木御文書拾番箱中 百番

其方病氣之段及

上聞_レ處、無油斷可致養生旨

上意_レ、依之如此_レ、恐_レ謹言、

十月十五日

脇坂中務大輔
安宅判

内藤紀伊守
信親判

松平和泉守
乘全判

間部下總守
詮勝判

(高津宮興)
松平大隅守殿

300の2 其方病氣不相勝段及

上聞_レ處、猶又爲

御尋、生干鯨被下_レ之_レ、依之如此_レ、恐_レ謹言、

十月十六日

脇坂中務大輔
安宅判

内藤紀伊守
信親判

松平大隅守殿

松平和泉守
乘全判

間部下總守
詮勝判

300の3

同氏大隅守卒去之段及

高聞_レ處、可爲愁傷と被 思召_レ、此由可相達旨依
上意如此_レ、恐_レ謹言、

十月十七日

脇坂中務大輔
安宅判

内藤紀伊守
信親判

松平和泉守
乘全判

間部下總守
詮勝判

松平修理大夫殿

右三通共ニ上包ニ宛書四名之名前有之、三箱ニ入付、宛書并四名
之名前有之

301

白木御文書拾番箱中 百一番
包紙ニ

御筆仰出

家老中

安政六年未十二月十二日

我等儀身雖不肖、

御本丸炎上ニ付、

(鳥津言彬)
順聖院様依

御明細書新規御差出被成り様、從

御遺言御跡目相續蒙

公義之仰渡并御家老衆御問合書等留

仰難有儀ニ付、就る者

御記錄所

御先代様不奉汚

右一冊之蓋紙ニアリ
〔采〕朱書

御積徳様こと日夜令心痛事ニ付、尤我等事何篇不取馴之事

御本丸炎上付、御明細書被差出り様 公義仰渡

事之間、心付り儀者不差置可申聞り、且又各始諸役人未

十一月廿八日晝到來 式日中急便

くこいたり、

(の1) 此度

御先代より被定置り規格之通聊々無寛疎相守、政事向一

御本丸炎上ニ付、御明細書新規早々可被差出旨別紙寫之

涯入念可取計り、殊更士者一々禮義廉恥を存、深く文武

通、從

之道を學び、耳目之欲陷、四支之安佚を不願、古來之國

公義被仰渡り付、向々申渡り、左り御明細御記錄奉

十月廿八日

行に吟味之上御右筆に認方申渡、大御目付平賀駿河守殿

右外包ニ左ノ如ク
〔采〕百一番

に差出り處被成御落手り旨、別紙首尾書之通御留守居申

御筆仰出查通

出り、此段申越り條被達 貴聞、其許仰渡且御記錄奉行

右安政六年未十二月朔日伯耆殿々春山弥兵衛江被成御渡、毎之

に被相達り儀共何分表可被成御取計り、以上、

通可致格護置旨致承知之、白木御文書箱拾番江納置り事

未十月廿九日 川上龍衛(公卿)

鳴津豊後殿

川上筑後殿

島津伯耆殿

新納駿河殿

樺山伊織殿

(の2)

以廻狀致啓上り、大御目付平賀駿河守様方御呼出ニ付、木幡松三郎罷出外處、別紙御書取一通御用人を以被相渡外、右者貳通ツ、被差出外様御同席中様ニ及可御通達旨被仰聞外間、右寫各様迄致通達候様陸奥守被申付外、尤御明細書者御銘々様方駿河守様ニ早々御差出可被成と奉存外、依之廻狀數通相認持廻り申付外、以上、

十月十九日

松平陸奥守内

秋保清潔

橋本九八郎

御次第不同

松平修理太夫様

御留守居中様

有馬中務大輔様

御留守居中様

南部美濃守様

御留守居中様

(の3)

寫

此度

御本丸炎上ニ付、明細書新規早々駿河守方ニ可被差出外、尤寸法等者兼而相達置外通可被心得外、

十月

(の4)

御明細書二枚

大御目付

平賀駿河守殿

右は昨夜致持參、用人土肥惣輔に出會、此度御本丸炎上ニ付、御明細書早々被差出外様御達之由ニ、松平陸奥守様衆より之廻狀到來ニ付、被差出外段申達差出外處、駿河守殿被致落手外旨、右同人を以被申聞外間此段申出外、以上、

未十月廿日

御留守居附役

脇田仁兵衛

西筑右衛門殿

右之通相勤申出外間此段申上り、以上、

西筑右衛門

龍衛様

(の5)

此度

御本丸炎上ニ付、御明細書被差出リ様ト之義ニ付、松平

陸奥守様衆方之廻狀別紙之通致到來リ付、本書差返寫

差上申外、右ニ付御明細書之儀者早々被相下度奉存外、

此段申上外、以上、

未十月十九日

西筑右衛門

龍衛様

右 則トス

包紙ニ
朱ニ白式番一

安政六年未十二月二日筑後殿方春山弥兵衛被成御度、於当座

致写方、白木御文書十番箱へ納置外事

辨抄

一方今世上・統動搖不容易時節、萬一之時

順聖院様貫御深意、御國家奉守護

天朝可拙忠勤心得ニ付條、有志之面々我等之輔不肖、

何卒盡誠忠具リ様頼存外、依る如件、

安政七年未十一月 日 御名乗御判

右七年中、六年未ノ誤故、追而御正文可糺事

執事方帳留^現七年未ト誤レルヨリノコト也

白木御文書拾番箱中 百一番

御記録奉行江

鳴津周防様

右者

御前向江表脇差被帶リ様被仰付外、

一 此後文字

御前御用たり共相用外様被仰付外、

但他所向之儀者是迄之通、

一年頭其外屹と立り節供廻六七人、平日及三四人相増被

召列外様被仰付外、

一 虎皮鞍蓋金紋先箱御當地迄被相用外様被仰付外、

一 登

城之節

御樓門者是迄之通ニ有、北御門通融之節者中之口御玄

喚前迄、大奥江者通番所前迄、御臺所御門者士番所御

門漕迄乘與外様被仰付外、左り有諸御屋敷并神社寺院

者右ニ準被乘通外様被仰付外、

一 登

城之節者櫻之間脇二階江被相扣、御家老座江御用之節

者時々勝手ニ被成御通外様被仰付外、

一 御高五千石御一世被召附置外、

右老格別之

御倫次付、別段深

思召之譯被爲

在、御一世右之通御會釋被相替、虎皮鞍蓋金紋先箱之

儀老家格ニ被相用々様、御家老以御使御達可申旨被

仰出外、此旨帳面可記置外、

十二月

筑後

右外付ニ
(宋)二百三番

安政六年未十二月十五日筑後殿ヲ被仰渡リ御書附一通、春山弥

兵衛へ御渡、白木御文書拾番箱へ納置外事

305

白木御文書拾番箱中 百四番

福昌寺に

近衛大納言様

御書寫之心經一卷

右老

(島津氏組)
金剛定院様御儀、不外格別ニ

思召、官家ニ有老御養方御忌服老無之由外得共、別段之以

思召御定式御忌服被爲請、尚又右之通御靈前ニ被遊御備

外、就有老

禁中并

公邊外老右躰之御儀無之御事外得共、前文通厚

思召ニ有被遊御備外段々被仰進外條、屹と御靈前ニ可相

備外、左外有到後年鹿抹之取扱無之様可致格護置旨被仰

付外、

右可被申渡外、

十二月

筑後

右包紙ニ
(宋)二百四番

安政六年未十二月廿八日御用人より春山弥兵衛ニ被成御渡、白

木御文書拾番箱ニ納置外事

306

在執事方帳留

一音信贈答之儀ニ付有老、

順聖院様御在世中厚被 仰出置外趣老、一統承知之通

ニ外處、程過外得老兎角緩せ之向ニ成立、内意事等申

込外進、贈答いたし外向も有之哉ニ相聞得、賄賂之筋

ニ相當、別有如何之到ニ外、向後右躰之致贈品外共、

一切不致受用急度可差返外、願事等致願立外一禮輕き

兩種相贈外義老、禮節之事外問不苦外條、以來聊心得

違無之様分有可申渡事、

安政六年未十二月

(の1) 307

白木御文書拾番箱中 百五番

安政六年九月廿五日付武家諸法度、天保九年二月廿一日付ト同文

ナルヲ以テ略ス

(の2)

寫

覺

一御法令御條目御寫一通

(益勝)

右今廿六日間部下總守様より御家來之者に被成御渡、

御國持四品以上之御方様に御順達可仕旨被 仰渡り付

差上申り、御承知之上者御銘々様より下總守様に御使

者御差出被成り様奉存り、且別紙 御名面書之通御順

達被爲濟次第、此方様に被成御返脚度奉存り、此段申

上り様御重役共申付り、以上、

(の3)

寫

松平陸奥守様 (伊達慶村)

松平三河守様 (慶倫)

細川越中守様 (齊藤)

(の4)

寫

松平相摸守様 (池田慶徳)

松平大膳大夫様 (上利慶烈)

松平越前守様 (茂昭)

松平肥前守様 (鍋島齊正)

松平美濃守様 (黒田齊傳)

松平内藏頭様 (池田慶政)

上杉彈正大弼様 (齊憲)

松平修理大夫様 (龜澤茂久)

有馬中務大輔様 (慶頼)

細川左京大夫様 (石丸(慶頼)

南部美濃守様 (利剛)

松平下野守様 (魚田長知)

松平長門守様 (毛利元徳)

松平大和守様 (直徳)

松平右近將監様 (武昭)

松平安藝守様 (我野慶徳)

南部遠江守様 (信順)

松平鹿次郎様 (山内豊徳)

御條目御寫一通、先月廿六日松平阿波守殿御家來(録須賀養也)に被成御渡り由こゝ、有馬中務大輔殿御方より今日到來仕り、依之修理大夫國許に申越、承知之上御請可申上り、此段申上り、以上、

十月二日

御名内
西筑右衛門

(05)
手扣書一通

但先月廿五日被 仰出り

御法令御寫松平阿波守様御家來に被成御渡り由こゝ、有馬中務大輔様御方も今日被成御順達りに付、太守様御國許に可申上旨御受之儀

御老中
間部下總守様
御取次
田子百人

右に持參仕演説之上差出り處、追り可申聞旨右御取次も承申り、

右之通今夕私相勤此段申上り、以上、

未十月二日

西筑右衛門

龍衛様

追り申上り、御法令御寫今日御到來之段

(06)

太守様於御國許被遊 御承知り上、私共御使者御受可被 仰達儀と奉存り、此段も申上り、以上、

猶以

御嫡子様被成御座り 御方様も、御附衆迄御通達可

被下り、以上、

以廻狀致啓上り、唯今大目付様も御廻狀并御書付寫壹通被差越り付、右寫各様迄致通達り様陸奥守・越中守被申付、廻狀數通相認持廻り申付り、以上、

九月廿三日

細川越中守内
清田新兵衛

松平陸奥守内
秋保清潔
橋本九八郎

御次第不同

松平修理大夫様
御留守居様

有馬中務大輔様
御留守居様

南部美濃守様
御留守居様

(の7)

寫

間部下總守殿御渡り御書付寫壹通相達り間被得其意、御同列中并御嫡子方に及不殘様無遲滯早可有通達り、答之儀者、先く從銘く不及挨拶、各々平賀駿河守方に可被申聞り、以上、

九月廿三日

大目付

松平陸奥守殿

細川越中守殿

右留守居

(の8)

寫

大目付

御法令被 仰出り二付、病氣幼少二面出仕無之面く者、

(并非屬稱)掃部頭・老中水野出羽守宅に使者可差越り、在國在邑之

面く者、承次第使札可差越り、

但隱居之面く者不及其儀り、

右之通可被相觸り、

九月

(の9)

一御條目寫一通

一御別紙一通

一右二付書附四通

一御廻狀寫一通

但御留守居首尾書相添

右者

御代替初る御法令被

仰出り付、右之通江戸より到來り間、先例之通御記錄

所は可相納り、

十二月

筑後

右數通外包

(米二百五番)安政六年未十二月廿九日筑後殿る川上四郎左衛門江被成御渡、

当座江致格護り様致承知、白木御文書拾番箱江納置之外事

308

白木御文書拾番箱中 百六番

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勸農事、

一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

安政七年正月十一日

茂久御判(花押)

No.3

白木御文書拾番箱中 百七番

口裏 筑後殿を被相渡り御書付之寫

御高百五拾石

右

順聖院様に被遊 御寄附、御物計を以年々福昌寺に被相

渡り儀共、都の

(鳥津高宣)

大慈院様御寄附高同前被仰付り、左の近日御判物御書

附大目附御使者の御寺に被相渡、御家老中添書及新番

を以相渡答り條、福昌寺に被申渡り儀共、先例之通可被

致取扱旨寺社奉行に申渡、御記録奉行其外可承向に及可

申渡り、

但日限之儀未追可申渡り、

正月

筑後

右包紙 安政七年申正月廿三日トアリ

白木御文書拾番箱中 百八番

口裏

松平修理大夫江

松平修理大夫

御本丸御普請ニ付

公方様に金五萬兩、

天璋院様に金貳萬兩上納仕度旨内願之趣、達

御聽、尤之儀御機嫌ニ被 思召り、依之内願之通上納被

仰付、右御普請之御用途ニ可被差加旨被

仰出り、

右外包 (米)百八番

御本丸御普請付、金七万兩御上納被為蒙 仰り御書付老通、安

政七年申正月晦日、式部殿上村休之進江被成御渡、白木御文

書拾番箱江納置之候事

白木御文書拾番箱中 百九番

口裏

左衛門殿を被相渡り御書付之寫

一御銀百五拾枚ツ、

右老

(鳥津宗信) 慈徳院様

(鳥津重年) 圓徳院様

御佛餉高百五拾石ツ、被召附置候得共、此節

引替、右之通御銀被召附、為利足御銀壹貫目ツ、年々

可被相渡り、

一御銀三百貳拾四匁壹分貳厘

右老

(重年總意)

智光院様御佛餉米三石被召附置り得共、此節引替、右

之通御銀被召附、利足として御銀貳拾七匁貳分貳厘六

毛ツ、年々可被相渡り、

一 御銀五百四拾目貳分

右者

(童年迄)

正覺院様御佛餉米五石被召附置り得共、此節引替、右

之通御銀被召附、利足として御銀四拾五匁三分七厘六

毛ツ、年々可被相渡り、

右之通被仰付、御判物御書附并御家老添書之儀者、只今之通被召附、

銀子御物に被差置、利足として右之通年々可被相渡り

條、右利足なる御佛餉等差上り様被仰付り、左り得者

御四靈様御佛前廻其外都る之儀、格別減少之筈り得共、

右利足を以相濟り様被仰付り、御掃除等之儀者住持方

無怠慢仕り様被仰付、御高御米之儀者都る表方に被差

出り様被仰付り、右之趣福昌寺に被申渡候儀共可被致

取扱旨寺社奉行に申渡、可承向に及不洩様可申渡り、

三月

(島津久敏)
左衛門

(川上久封)
筑後

(島津久宿)
伯耆

(川上久運)
但馬

(島津久包)
登

右包紙
安政七年申三月トアリ

(川上久美)
式部

白木御文書拾番箱中 百拾番

(島津吉興)
金剛定院様御位牌御成就大圓寺に 御安置付、御列位

之御順御記録奉行に相しらへ左之通被遊 御安置り、

(島津重豪)
一 大信院様御次

(島津吉興幸松平氏)
靈龍院様御頭

金剛定院様御安置、

(島津吉彬)
一 順聖院様御位牌、是迄

大信院様御次ニ 御安置なるり得共、此節

大慈院様御次ニ被遊 御安置り、

右之通被仰付り旨大圓寺其外可承向に申渡、大奥

其外様に及申上り、此段申越り條 典姫様に被申上、

其許申渡之儀者何分も可被取計り、以上、

申二月廿九日 (久高)
喜入攝津

嶋津左衛門殿

川上筑後殿

嶋津伯耆殿

嶋津登殿

新納駿河殿

右外包
〔宋二百拾番〕

安政七年申閏三月九日伯耆殿る春山弥兵衛江被成御渡、致御帳留置ハ様致承知之、寫濟之上白木御文書拾番箱江納置ハ之事

在執事方帳留

家老中江

一昨年申達ハ通聊緩急者無之筈ハ得共、弥文武之道を致精勵、誠忠純孝之徳ニ基キ、禮讓を專として淳和之風俗ニ立復りハ様有之度ハ條、各始此旨を存し、末ク迄も趣意相達ハ様、殊更軍政之義者國家之急務ニハ間、各申談有之度ハ事、

安政七年申三月十二日

314

白木御文書拾番箱中 百十二番

口裏

伯耆殿る被相渡ハ御書付之寫

御高百五拾石

右

金剛定院様江被遊

御寄附、御物計を以年々福昌寺江被相渡ハ儀共、都ハ

大慈院様御寄附高同前被仰付ハ、左ハり近日常判物御書

附、大目附御使者ニ御許江被相渡、御家老中添書及新

番を以相渡筈ハ條、福昌寺江被申渡ハ儀共、先例通可被致取扱旨寺社奉行江申渡、御記録奉行其外可承向ハ及可申渡ハ、

但日限之儀者追ハ可申渡ハ、

十月

伯耆

右包紙
〔宋二百十二番〕

萬延元年申十月三日岩下佐次右衛門る春山弥兵衛へ相渡ハ付、

白木御文書拾番箱へ納置ハ事

白木御文書拾番箱中 百十三番

315

金剛定院様御事、於御國許被遊

御逝去ハ付、大圓寺江老御石塔不被爲 在御先例ニハ處、

從

〔篇姫、家宅夫人、島津氏〕
天璋院様御厚キ

御内沙汰之御旨被爲 在、別段之御譯合を以爲被遊 御建立御事ハ條、此旨大圓寺江申渡、可承向ハ及可申渡ハ、

九月

式部

右一通也

(02)

天璋院様

（齊興女）
暉姫様

（齊真女）
勝姫様

（南部信朝）
遠江守様

（重孝女、孝庭）
柔正院様

（重孝女、戸田氏正室）
親姫様

（重孝女、淑庭）
眞華院様

（重孝女、貞庭）
桃齡院様

（齊真女、德庭）
隨眞院様

（齊真女、勝庭）
聰徳院様

（齊興女、朝姫カ）
紫雲院様

（齊興女、然庭）
智鏡院様

（齊真女、讀庭）
晴雲院様

金剛定院様に御納物、

右者

御筆物、

右一通也

(03)

〔朱〕口裏ニ朱カキ
御石棺蓋銘〕

維是前薩隅日三州太守從三位參議源朝臣齊興公之招魂墓也、凡

公薨於國也、惟納牌位于此寺而已、嚮

齊彬公之薨、因

大樹之太夫人天璋君之孝思、爲建其招魂墓焉、而今建

公之墓于茲亦出

天璋君之追悼不得已、而納其所書之梵經暨其他庶子親戚

之親書數卷云、

右一通也

(04)

〔朱〕口裏ニ朱カキ

金剛定院様御石塔大円寺立御建立御成就付而之事

十月廿二日到來

式日中急便〕

金剛定院様御石塔大圓寺に御建立之儀、從

天璋院様御厚キ 御内沙汰之御旨被爲 在、別段之譯合

を以被遊 御建立付、御取立方等之儀共夫々申渡相成

居付處、此節御石塔者勿論御玉垣等迄表都御出來相成

付、拙者共并御役々々致拜見付處、御石柄表宜無申

分御成就相成、去ル十五日御點眼御供養相濟、其段者

天璋院様御方は大奥傳を以御届申上付處、 御満足思召

付段御つほね様より申來付旨、小の鳴申出付段御側御用

人申出、將亦

御同人様御筆御卷物、御石塔下御石櫃之内に御納メ可被

遊との御事ニ被相下付、一箱に御入付相成、左の
暁姫様 其外様別紙之 御方々様及御同斷付、是亦一
箱に御入付相成り、右付御石櫃蓋裏に、御成行被記置
方可宜と御記録奉行に相しらへ、別紙之通彫刻被仰付、
右付の者奉伺答候得共、差掛之儀殊ニ

順聖院様御例表有之付申談、直様右通取計、且亦
金剛定院様御事、於其許

御逝去被遊り御事候得共、此度者從

天璋院様御厚キ 御内沙汰被爲 在、別段之以御譯合御
建立被遊り段、別紙之通大圓寺等に申渡り、此段申越り
條被達 貴聞、御記録奉行に被達置り儀者何分表可取計
外、以上、

但御石塔御建立ニ付、御入目料別紙通ニ御成就相成
外、且亦拙者共并詰合之御側御用人・御側役・大奥
女中迄御石燈爐獻備被仰付、御石塔脇に建立相成り、
此段者爲御心得ニ外、

申九月廿九日

川上式部

鳴津左衛門殿

川上筑後殿

鳴津伯耆殿

喜入攝津殿

川上但馬殿

鳴津登殿

右外包ニ
萬延元年申十月廿八日云、トアリ

316

御系圖 久光公御子

一 男 女 十七人

一 芳 之 進

萬延元年庚申十月十六日生於重富第、母櫻井氏妹、
文久元年辛酉四月從父久光、入於本室、二年壬戌四
月二十日夭亡、法名篤芳院殿玉雲賢露大禪童子、

317の1

白木御文書拾番箱中 百十五番

包紙

御筆仰出

今度參勤御猶豫之儀、於

公邊御例格表有之、不容易事外得共、格別之譯を以願通
被 仰出難有存り、右付來々年參府迄者暫時間表有之外
間、江戸屋敷中取締向猶更嚴重無之外者不相濟事外付、
第一

公義之御法令を相守、一統致精勤、諸士末々至迄古代

317の2

萬延二年酉二月六日於二之丸 茂久公諸師家被召出、
御視之節御書取被仰出外寫

口達覺

武藝を勵、筋骨をならしめ外事者當世之急務、士之當然に
得共、亦君臣父子之倫理に暗く、禮義廉恥之道に疎く、
義之大小輕重道之正邪曲直を不辨しては、却る忠孝之大
義過り、不思禽獸之域に陥り事古今其例不少、別る遺
憾之至に、自分諸師範之者共は、文武偏廢不致様子弟
に致教育管にハレ得共、猶亦相守、其身之省察者勿論、
精く子弟を教導いたし、文武本體を不失、士道を不汚様
心掛、且各流儀を立外に付る者、自分秘傳秘術銘々有之、
輕く敷難洩儀者當然之事外得共、甚敷者流派になつミ、
己を進め他を退け、寇讎之如く心得違外事、近古以來之
弊風に不可然事外條、國中之士民者互に兄弟骨肉之情
義を存し、禮義を以相交り、私を捨、講習練磨いたし、
國家之實用に相立外様有之度外事、

之國風を不失、質素節儉を用、奢侈放肆之儀無之、正實
を以相交、一涯風儀正敷、文武之道相勤外儀肝要之事外、
就中改革向之儀聊不致廢弛、諸事行届外様出府之上式部
等申談、屹と向くは可申渡外事、

申十二月十四日

右外包
御筆仰出志通

萬延二年酉三月二日登殿森喜藤太ニ被相渡云々アリ

右御筆ノ次ニ左之通 雜集中

御別紙之通 御筆を以被 仰出、誠以難有御趣意之御事
外條、一統謹可奉承知外、右付る者被 仰出之通、當
時御留守中之儀ニ表外間一涯致謹慎、聊不勘辨之儀共無
之様心掛、第一

公義之御法令を相守致精勤、遊惰之習風に不蹈、(筋力)專文武

を相勵、無益之費を省、質素節儉を心掛、御改革向之儀

に付る表聊不相弛様、夫々掛之向ハ勿論、於向く表一統

綿蜜行届外様取計、奉安尊慮外様可致外、此段分申間

置外、

正月

左衛門

式部

318

白木御文書拾番箱中 百十四

吉書

一神社佛閣修造興行事、

一可專勤農事、
一可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

萬延二年正月十一日 茂久御判

雜抄

一寄合以上之義者往々重役をも申付り身柄り得者、學問
第一之儀と、近比

御兩殿様にも毎々被仰出置、各承知之通り處、兎角舊
弊改り兼、別る不可然事り條、以來尚又當職之儀者勿
論、文武之道相勵ミ、平日之言行省察を加へ、禮讓を
以一和いたし、聊たりとも放逸之情態ニ至らす、此涯
弊風一洗いたし、先祖勲功之家名不致失墜、國家之用
ニ相立り様、心掛專要之事ニ、

萬延二年西正月廿五日山吹之間詰人數二ノ丸御茶屋五御呼
出之節被仰出外

在執事方帳留

口上覺

(本文書ハ三一七の三号文書ト同文ユエ略ス)

萬延二年西二月六日諸師範家二ノ丸御茶屋五御呼出之節被仰出
外

321 白木御文書拾番箱中 百十六番

口裏ニ
松平修理大夫立

松平修理大夫

鳴津周防儀、其方家督之節より國政向萬端心添致し、精
勤之趣相聞りニ付、來年其方參府之上者、國許政事向猶
厚く相心得、萬事行届り様可取計旨可被申聞置り、此段
内々可相達との 御沙汰ニ事、

右外包ニ左之通

(朱)百十六番一

鳴津周防様御儀ニ付、公儀也

太守様被遊 御承知り御書付志通

右萬延二年西三月十二日撰津殿を格護可致置旨、千田七郎兵衛
致承知之、白木御文書拾番箱五納置之り事

322 白木御文書拾番箱中 百十七番

一筆令啓達り、

公方様益御機嫌能被成御座り間、可御心易り、將又御鷹
之鶴拜領り條、以宿次差越之り、恐々謹言、

二月十八日

松平豊前守
信義判

本多美濃守
忠民判

安藤對馬守
信行判

内藤紀伊守
信親判

久世大和守
廣周判

松平修理大夫殿

右外包ニ朱一百十七番

文久元年西四月十三日、筑後殿ヲ格護可致置旨、千田伝一郎致

承知之、白木御文書拾番箱江納置之事

在執事方帳留

一今度參勤御猶豫之儀、於

公邊御例格も有之不容易事_レ得共、格別之譯を以願通
被仰出難有奉存_レ、右ニ付、來々年參府迄_ニ者暫時も
有之_レ之間、江戸屋敷中取締向猶又嚴重ニ無之_レの_ニ者不
相濟事_レ付、第一

公邊之御法令を相守り、一統精勤いたし、諸々末々ニ
至迄古代之國風を不失、質素節儉を用、奢侈放肆之儀、
(願アルカ)
正敷文武之道相勵_レ義肝要ニ_レ、就中改革向之儀、聊

不致廢弛、諸事行届_レ様出府之上式部等申談、屹と向
く_レ可申渡_レ事、

右島津左衛門殿出府之節

御筆御渡、出府之上御國許_江被差廻御達相成_レ事

324

白木御文書拾番箱中 百十八番

外包紙

御筆仰出壹通トアリ

當時内外難題之事情別_ル令心配、旁致愚案_レ處、兎角國
家之基本_ニ追々申聞_レ通、何レ禮義廉恥を以風俗を正シ、
上下心を一にして君臣和平シ、古代之國風を振起いたし
外事、今日之急務と存_レ、然る_ニ其本を勘考いたし_レニ、
仲尼之所謂名正言順なる所、第一政事之綱紀治道風化之
本_ニ、乍汗顏拙者之一身と存し、朝夕相勵_レ得共、本來
不肖之身甚致心痛_レ、左_レの重富之實子_ニの

順聖公之御眷顧を蒙り、家督相續被 仰付_レ處、當時_ハ
武鑑_ニも實_ニ島津周防嫡子と有之、天下ニ押出して顯然
之事_ニ付、然る_ニ只今_ニの_ニ所謂名不正言不順と可申哉、
親子之情於孝義難默止次第_ニ付、拙者之内存_ニ者當家
督_ニ又次郎_ニ申付、重富之家を出る國父と云所を以、朝
夕自ら定省いたし、爲子之禮を取_レ孝道を盡し、臣子_ニ

先し度外、左外者名義も相立外事と存外、
右一條以前右之宿意ニ外處、未

順聖院様御三年忌も不被爲立内者、於孝義可奉憚筋も可
有之と存外得共、當時ニ到り外者、一日も難黙止至情
ニ外事、

右包紙ニ

(朱)百十八番

文久元年酉四月廿二日、撰津殿ニ每通可致格護置旨、千田伝一
郎致承知之、白木御文書拾番箱江納置之外事

325 白木御文書拾番箱中 百拾九番

御記録奉行江

周防様御事、重富家ニ被爲入り得共、格別之 御倫次付、
當分通ニ有者御成合不宜、別段深
思召之譯被爲

在候付、以來御實形之 御身柄ニ被爲復、何篇

左近様御同様被

仰付外、左外者重富家之儀者、嶋津又次郎殿江相續被仰

付外旨、御家老以御使被 仰出候、此旨帳面可記置外、

四月

(喜入久寛)
攝津

右外包紙ニ(朱)百十九番

文久元年酉四月廿二日撰津殿ニ千田伝一郎江被成御渡、可致格

護置旨致承知之、白木御文書拾番箱江納置之外事

326 白木御文書拾番箱中 百二十番

靈社神文前書之事

一 今般大里王子跡役私江被 仰付、誠以外聞實儀難有仕
合奉存候事、

外ヶ条并神文略

萬延二年辛酉四月二十四日 與那城王子 朝紀判

327 御系圖 齊興公御子久光公

文久元年辛酉四月辭ニ去重富家、復ニ於本氏ニ改ニ稱和泉
久光、而後移ニ住于四配第一、

○方今内憂外患相踵日迫、海内將ニ動、久光先欲ニ開ニ公武
一和之基ニ張ニ天下之紀綱上、故如ニ京師及江戸ニ周旋拮、
竭ニ力於 王室、是奉ニ齊彬遺託ニ也、

328 在執事方帳留中

口上覺

一 學術之次第者

大信院様以來近比

順聖院様にも以御深慮被仰渡置り得者、聊取違者無之
 咎り得共、第一天理人倫を明にし、孝弟忠信之徳を行
 ひ、正道を守りり者孝者之急務に付處、古來より太平
 久敷時者自ら詞藻に沈り、文武之本體を汚し安佚の日
 を過し、終に人道を失ひ風俗を亂り、或者高遠志し
 放肆に流れ、國憲を犯しり類不少り間、各平日士たる
 之業を練磨し、謙讓を以己を持ち、國家有名之士と相
 成り様、講習有之度外事、

文久元年酉五月七日講堂師員之人數、二丸御茶屋（取カ）御呼出之
 節被 仰出り

在執事方帳留

一 吳國人御取扱之義付る者、從

公邊御手厚御會釋有之儀者各承知之事付處、近比嘆喏
 利國之船長崎・下關に渡來之由に付る者、當國にも不
 日可致渡來も難計り付、其節に到り諸士末々迄も若年
 之面々言語不通之吳人共對し、不禮不法之振舞等有
 之、聊之儀より事起り、

皇國之大事を當國より引出り時宜成立候る者、我等之
 命令不行届、第一京都・關東に對し恐入事付付、此節

330の1

之儀別る令心配り、就る者測量・上陸等依時宜差免り
 儀も難計り付、去ル午年
 順聖院様被仰出置趣も有之り間、其節之御趣意に基キ
 専ら禮讓を相守、只管國家之爲を存し、難題之事共不
 致到來様可相心得旨、父兄等屹と申聞置り様支配下に
 早々可申達り、

文久元年酉六月十四日被仰出り

白木御文書拾番箱中 百二十一番

濃州・勢州・尾州・東海道筋川に御普請御用被仰付り條
 可被存其趣り、且又別紙之面々被仰付り間可被得其意
 外、尤右御用に付る者此節不及參府外、恐々謹言、

七月廿日

松平豊前守

信義判

本田美濃守

忠民判

安藤對馬守

信行判

内藤紀伊守

信忠判

久世大和守

廣周判

松平修理大夫殿

在執事方帳留中

近來武備之儀厚き被仰出も有之_レ付_ルハ、諸家おゐても領海備向を始、何角入費も不少哉_ニ相聞_ル付_テ付、此度川_ニ御普請御手傳上納高之内、當酉年半高相納、殘半高之儀_ニ來_ル戌年來_ル亥年二ヶ年_ニ割合上納_ル様可被致_リ、尤委細之儀_ニ御勘定奉行松平出雲守・同吟味役立田祿助可被談_ル、

右一通トス

藤堂和泉守

松平兵部大輔

松平右近將監

榊原式部大輔

右之通濃州・勢州・尾州・東海道筋川_ニ御普請御用被仰付_ル間、可被得其意_リ、取計方之儀_ニ御勘定奉行松平出雲守・同吟味役立田祿助より可申達_ル條可被承合_ル、

右一通也

(朱)百二十一番_也

文久元年酉九月五日左衛門殿_ニ可致格謄置旨平田九十郎致承

知、白木御文書拾番箱へ納置之_レ外事

家老中_に

一文武修行、質素節儉、禮義廉恥を相嗜_ミ、殊_ニ大身之面_ニ老猶更風俗正敷、各初末_ニ之役人_ニ至迄職掌相勵、萬事_ニ公平_ニ致沙汰、賄賂一切受用不致、無益之酒會遊興等企間敷_ト之趣共

御兩殿様_ニも分_ル被仰出置、近比_ニも申置たる事_ニ付得共、兎角舊來之惡弊改_リ兼_テ義、我等不肖之故_ト別_ル歎息之至_ニ付、近内外之憂患追_テ致增長、此末如何様之時勢_ニ可至も難計_ル付、以來屹_ト古代之正風_ニ不復_ルの老國家之安危_ニ相抱_リ、不可然事_ト存_ル、

一去年參府之途中_ニ不快_ニ引返_ル處、別段之譯を以參府御猶豫被

仰出、難有次第_ニ付、就_ル來春_ニ不致參府_ルの老不相濟事_ニ處、色_ニ吳說申立、且供不申付_ル得_ル、抑_ル可致隨從相考_ル者有_ル之哉_ニ相聞得_ル、不容易時節_ト存_ル、國家之爲を謀_ルり義_ニ尤_ニ之事_ニ老_リ得共、却_ル公邊老勿論諸藩之嫌疑を受、終_ニ老國難を醸出_ルし_ル老案中_ニの、別_ル致心配_リ、實_ニ忠節之志有_ル之_レ老、萬_ニ一吳變致到來_ル共、聊不致動搖、命令_ニ從_テ精力を盡_ルし_ル様有_ル之度事_ト存_ル、右之趣各中厚相心得、諸事不至

緩急の様可取計、若此上不守之者於有之者無遠慮可及沙汰事、

口達之覺

一先祖代より當時に至り存慮之程、追々書取を以申達ひ得共、兎角國家憂患之情意薄故歟、趣意不相貫、甚憂鬱至極之事あり、既先日も趣意相達ひ得共、其後猶又篤と勘考いたしり處、實に國家之安危相迫りり得者、是非趣意貫通爲致度事あり、就る者夫々役職付る者、諸事心肝を碎き、銘々職掌之趣意相立り様無之り者、一同振起之期有之間敷存り、尤言路も相開け、此上蔽塞起無之筈ながら、未役人以上より封書差出り向相少り、左り得者當時より申分無之事と察り得共、時勢之變態に隨る變革之處置も可有之事かと存り、依る諸役場呼出、丁寧反復趣意相論、一同思慮に渡り、三日中向く可否爲申出り様可致り、右者各中迄申達り間、篤と重大之任を相考、下々迄趣意貫通之儀第一之事と存り、

十月四日被仰出り

332

在執事方帳留

家老中江

一軍政治定之儀、國家之大事あり、

金剛定院様

順聖院様御深意被爲 在、

御三代様舊に基き、和・漢・蘭之法を折衷し、此度規格被相居り得共、時世人情に應じ、變革不相叶場及可有之、尤今之世態別る急務と深令心配り間、各中者勿論、役人諸士一同存寄之趣、急々可申出旨可相達り事、
文久元年西十二月被仰出り

333の1

舊御番所御文書一番箱中

近衛忠房公御詠筆

御懸物 大海も

祝

忠房

大海も風おさまりてなミたゝぬ

此君か代そ久しかるへき

333の2

箱蓋ニ
今上天皇宸筆

文久はしめの年季冬、物部の忠魂磐石をもつらぬく利劔

送こせる事、時世にあたり實に憂患をはらふ志と頼もしく思ひつゝよめる、
和歌

世をおもふころのたちとしられけり

さやくもりなき武士のため

御宸筆御製添書

目錄ニ忠義公御添書一冊トアリ

年ころ夷船ともこゝかしこにまるきて、なにとなく天の下穩ならず、

みかともかれこれことはかり給ひて、

おほミこゝろなやまし給ふ事のいとかしこけれハ、まつうちくおもふことのかきりふりはへまをしたてまつらむとて、文久元年十一月九日の日、中山實善俗称尚之介に申へきさまをつふさにいひふくめて、都にそのほせける、さるハ左のおほいまうちきミ忠熙公の御許にとて、父君よりそ御文まいらせらる、同じ月の廿六日といふに、近衛殿にまいりたりければ、大納言殿忠熙公男 忠房卿にも出給ひて御對面たまはる、父君よりの御文まるらせ、

おふせこと承おきし

ミはかしもこたひ奉るへく、またいひやりしことのおち

くつはらかにまをしけれハ、ミなきこしめし入つ、されとゆゑありてこもり給ふ程なれハ、奏し給ふことかなはずとて、議奏正親町三條實愛卿におふせて、御佩たてまつらせまをしあけつる事をも奏させ給ひけれハ、

叔感ましくこと、やかて父君をめさまほしくおほしめせと、幕府のおきていとおこそかなるをりなれハ、とミに召のほせ給ふことも

大御心になはせ給はず、

叔感のあまり、父君とおのれとにミそかに

おほミうたを下し賜らんとて、十二月の十まり一日の夜、實善を召ておと、大納言殿ならひ居給ひてくたし賜けれハ、あくる十二日都を立て、おなし月の廿四日といふ日にくたり着ぬ、いとかたしけなくしこけれハ、やかておかミをさめまつりぬ、さるハ世にありかたきことのかきりなれハ、永くうミのこに傳へんとてひめ置にこそ、あなかしこ、

左近衛少將源朝臣茂久

明治元年戊辰十二月五日

右証書一通アリ 左ノ如シ

一 御宸翰 一箱

但服紗包

一 近衛様御筆 一箱

但御詠歌

忠義公御筆

御宸翰

一 御添書 一册

但服紗包

内桐白木箱

外家箱掛合塗

右之通御文書方に被相下、御格護被仰付候條、至後年格護方行届り様可被致取扱り、以上、

明治元年

戊辰十二月十五日

伊藤彦介  イシ

御文書奉行

334 白木御文書拾番箱中 百二十三番

一筆令啓達り、其方來年四月中可致參府處、居屋敷燒失、外屋敷住居向手狭き、住居差支り趣及

上聞り處、出格之譯を以御用捨被遊、來年秋中可致參府

旨被 仰出り條可被存其趣り、恐々謹言、

十二月廿二日

松平豊前守

信義判

本多美濃守

忠民判

安藤對馬守

信行判

内藤紀伊守

信思判

久世大和守

廣周判

松平修理大夫殿

右外包ニ

文久二年戊二月五日、筑後殿森喜藤大江被成御渡、白木御文

書拾番箱へ納置り事

忠義公 文久二年 正月
至十二月

追 舊 記 雜 錄 卷百六十七

白木御文書拾番箱中 百三十二番

吉書

- 一 神社佛閣修造興行事、
- 一 可專勸農事、
- 一 可徵納國々年貢事、

右任三箇條之旨可有沙汰之狀如件、

文久二年正月十一日 茂久(花押 No.3)

雜集中

御老中

安藤對馬守様

右御自用方御用人川島助之丞宅へ今日差越面會之上、昨年來之御挨拶取繕申述上、昨日者御登城之時分御行列に致亂妨り者有之、悉ク御打留之由風聞仕り、如何之御事あり哉、對馬守様ニ者御怪我也不被爲在り哉、兼る御懇意被申御事故御機嫌之程奉伺、御國許に可申上越旨申述り處、御懇切ニ、早速御尋被下忝、御聞及通亂妨人有之、悉ク打留りと申程も無之、三四人位者相洩り哉とも不相分、六人打留申り、兼る少く者増供も有之り得共、不意之儀なる未熟成者其無面目次第、主人も乗物之外方突りと相見得、腰に幅壹寸程突疵有之、深サ左程ニハ有之間敷、面躰へ些少之疵請り得共、是ハ誠のかすり疵なる小サ成膏藥なる相濟可申、氣分ハ相替儀も無之、昨夜表少く痛有之り得共、致安眠り程之儀なる、御心易思召可被下り、且又鐵炮を打掛り哉とも承申り、如何り哉と相尋り處、右鐵炮ハ供頭之兩股打抜、相倒れり得共、直に起上り兩人打留、其身も詔所に疵受、其内後方頭を切付け疵深ク、何分死生之程難計、其外三人重疵受、數ヶ所薄手請り、右四人之死生何分無覺束存り、尤其外薄手負り者も多人數有之由承申り、勿論對馬守様にも御乗物方御出御手合も被成り由、夫方坂下御番所迄御出相

成り得共、御出血もいたし御儀の御登城不相成、御迎
供御取寄御退散被成り、包置り躰無之、萬事懇々物語仕
御儀に御座り、此段申上り、

正月十六日
(鳥津久包)
登様

西筑右衛門

雜集中

(鳥津久光)

一和泉様御儀に付先度 御書取を以被 仰出、一同奉承
知通の實以奉恐入御儀に、然處今度深 尊慮之譯
被爲 在、再三強る 御直御願被遊趣有之、乍漸二丸
御住居 御許容被爲 在、追々御成就之上 御住居被
遊筈に付、右之趣攝津 御前に被 召出 御直被
仰出り、此旨奉承知り様表方に致通達、奥掛・御勝手
方に表可相達り、

正月

(川上久封) 筑後
(善入久高) 攝津
(川上久運) 但馬

右戌正月十五日被仰渡り事

一此節江戸上御屋敷御焼失に付 御參府御月延御願に相

成り處、出格之以御取譯、當秋中可被遊 御參府旨被
仰渡り付る者、一昨春方御打重之御願の 公邊御都
合同如何と被 思召、此節之御禮且御斷旁として御熟
談之上、當春中 和泉様可被遊 御出府旨被 仰出り、
此旨向々可申渡り、

正月

攝津

一二月廿二日午刻

右 御首途

二月廿五日巳刻

右 御發駕

右 和泉様 御出府に付右之通被 仰出り條、可承向
可申渡り、

正月

攝津

右正月十八日伊集院平治取次被仰渡り也

雜集中

(久光男、忠鑑)
嶋津周防殿

右老重富家之儀、是迄何篇

和泉様にも被遊 御聞候處、此節二丸 御住居被爲在

候あ表、矢張是迄之通萬端御伺相成り様被 仰出候、
此旨向々江可致通達り、

二月二日

攝津

一 勝山悦之助殿 (久光男、久封) 於成殿 (久光女) 勝山眞之助殿 (久光男、久封) 於俊殿 (久光女) 勝山
芳之進殿

右者今般 和泉様二丸御住居被爲 在り付、右 御子
共方御列上り御住居被爲 在り様被 仰出り條、向々
江可致通達り、

二月二日

攝津

(齊官男、忠念)
鳴津樂水殿

右者御老躰之御事候付、御城諸御門御下乘之儀者家格
通る、御臺所口御門之儀者 御乘與る被爲通り儀
御勝手次第被仰付り、左りる 御本丸者大奥通番所前
邊る御下乘被爲在り様被 仰付り條、向々江可致通
達り、

二月二日

攝津

鳴津周防殿

右者御續柄格別成御譯合付、別段之以 思召、以來何
篇 御子様御同様之御會釋被 仰出り、

一

(久光男、久封)
鳴津圖書殿

右者文言同斷、左りる此節者此殿文字相用、其外一世
御一門方同様被仰付、何そ付御上り之節者、北御門又
者御臺所御門方御入、御内玄喚方御上り有之り様被
仰付り、

右之通被仰付り條、向々江可致通達り、

二月五日

(鳥津久徳)
大藏

339

白木御文書拾番箱中 百二十四番

御記録奉行江

鳴津周防殿

右者御續柄格別成御譯合付、別段之以 思召、以來何篇
御子様御同様之 御會釋被 仰出候、

鳴津圖書殿

右者御續柄格別成御譯合付、別段之以 思召、以來何篇
御子様御同様之 御會釋被 仰付り、左りる此節より
此殿文字相用、年頭・八朔其外都る一世御一門方同様被
仰付、何そ付御上り之節者北御門又者御臺所御門より御

入、御内玄喚より御上り有之様被

仰出候、

右之通被 仰出候、帳面可記置り、

二月五日

大藏

包紙ニ
文久二年戊二月六日大藏殿を佐多徳八郎に被成御渡り付、白木御文書拾番箱へ納置之り事

340 雑集中

一 御高三萬石

右者今般 和泉様二丸に御住居被爲 在り付、右之通御高御差分に被進り旨被 仰出り、左り右御高所務迄に老御不足及可有之り付、御續料高者名目、以來年々御産物料之内に金貳萬兩ツ、別紙月割之通、大坂に差續相成り様被仰付り條、可承向に申渡、御勝手方にも可相違り、

二月

攝津

一金貳萬兩内三千五百兩二月届、三千兩四月届、三千五百兩六月届、三千兩八月届、三千五百兩十月届、三千五百兩十一月届、

右戌二月十一日川上正十郎取次被仰渡也

341 雑集中

一 和泉様御事近々二丸に被遊御移徙善り付、來ル十三日御座建被仰付り間、彼御方に相勤り面々其外掛之向、御用透を以繰廻、同日に二丸に致日勤り様被仰付り條、向々に可致通違り、

二月

攝津

右二月十三日伊集院平治取次

(加治木家、久宝)
一 嶋津岩松殿姉於米殿事 思召之譯被爲在 御本丸御住居被仰出り、左り御上り御比合之儀老追り可被仰出り、此表表方に致通違、奥掛御勝手方へも可相違り、

二月

攝津

右戌二月十二日嶋津右門取次

一 勝山悦之助殿 於成殿 勝山眞之助殿 於俊殿 勝山芳之進殿

右者二丸に御上り之上者、以來何篇諸書附等こも此後之字相用り様被仰付り、左り嶋津何某様と相唱、

御女子様ニ老於何様と相唱ひ様被仰付ひ條、向々に可致通達ひ、

二月

攝津

十九日伊院集平治取次

一此節 和泉様御出府ニ付、中小姓御供并守衛方として被差立立勤方有之面々、都る定役助役無構跡御扶持米被成下下條申渡、可承向々にも可申渡ひ、

二月

攝津

一和泉様御事來ル廿四日巳刻二丸に被遊 御移徙管ひ條、向々に可致通達ひ、

二月

攝津

右廿一日被仰渡也

一三月六日午刻 同十六日巳刻

右御首途

右御發駕

右當春 和泉様就御出府、右之通被相替ひ旨被仰出ひ條、此段申達ひ、

二月十九日谷川次兵衛

一喜入攝津殿 右老 和泉様御事明廿四日二丸に御移徙ニ付 太守様より御迎旁として、重富御住居に御使被仰付、御供迄も相勤ひ様被仰付ひ、此旨向々に可致通達ひ、

二月

大藏

別紙之通被仰渡ひ間致通達ひ、

戊二月廿四日取次二階堂源太夫

一和泉様御事二丸に被遊御移徙ひ處、當分通る老御成合不宜被 思召上、殊ニ御家老中方も分る願之趣も有之被遊 御許容ひ付、今日方此様之字相用ひ様被仰出ひ條、諸書附等も其通可相認ひ、此旨表方へ致通達、奥掛御勝手方にも可相達ひ、

二月

攝津

廿六日持上り

一鳴津石見妻

入來院恰妻

喜入多門妻

(久光女)
於治殿

(同上)
於珍殿

(同上)
於寛殿

右老御續柄格別成御譯合ニ付、別段之以 思召、以來御子様御同様之御會釋被仰付ひ、左外此處文字相用、

何そニ付大奥江御上等之節者、何篇松壽院殿御振合(齊宣女、種子島久道室)
被仰出外、此旨向々江可致通達外、

二月廿八日

大藏

取次二階堂源太夫

342

白木御文書拾番箱中 百二十五番

御記録奉行江

嶋津石見
妻

於治殿

入來院恰
妻

於珍殿

喜入多門
妻

於寬殿

右者御續柄格別成御譯合付、別段之以 思召、以來 御
子様方御同様之 御會釋被仰付外、左外此殿文字相用、
何そ付大奥江御上等之節者、何篇松壽院殿御振合ニ被
仰出候條、帳面可記置外、

二月

大藏

右包紙、
文久二年戊二月廿八日大藏殿々春山弥兵衛江被成御渡、此箱江
納置外事

343

白木御文書拾番箱中 百二十六番

御記録奉行江

(久光男、忠致)
嶋津英之進殿

右者御續柄格別成御譯合付、別段之以 思召、以來 御
子様方御同様之 御會釋被 仰出候、

右之通被仰付外條、帳面可記置外、

三月八日

攝津

右包紙、
文久二年戊三月八日筑後殿々佐多徳八郎江被成御渡外付、白木
御文書拾番箱へ納置之外事

344

雜集中

和泉様御儀何篇御國政向御内談被仰進、且先度 公儀方
御内沙汰之趣も被爲 在、御幸ニ被 思召上外、就而者
此度表向御介助之儀 御賴被 仰進置外間、以來 仰出
等弥嚴重相守外様可取計旨、 御別紙之通 御筆を以被
仰出、誠以難有御事外條、此旨謹而奉承知、 仰出之趣
聊無緩疎誠實ニ相守、支配下下役等にも可申合外、

三月

筑後

大藏

攝津

雜集中

一外夷通商御免許以來、天下之人心致紛亂、各國有志と相唱り者共四方ニ交を結び、不容易企をいたしり哉ニ被聞召上、御當國ニも右之者共と私ニ相交り、書翰往復等いたしり者有之哉ニ付、以御滞留中右躰之者共致推參り共私ニ面會不致、無據譯に依り致應接り共、其筋之者に談判いたしり様返答可致、乍此上不勘辨之族有之り者、無遠慮罪科可被仰付旨、御別紙之通委曲和泉様御筆を以被 仰出、何共奉恐入事ニり、右付る者誠ニ以不容易事り付、被 仰出り趣誠實ニ相貫、聊吳心有之間敷り、乍此上萬々一心得違之者も有之り者不差置御取扱可被仰付、此旨謹る奉承知、支配下下役等には及可申合り、

三月

筑後

大藏

攝津

但馬

但馬
式部

雜集中

當時之情態 和泉様被遊 御熟考、御筆を以御別紙之通被 仰出、乍恐御尤御事ニり、右ニ付る者別る御厚配被爲 在候趣、何とも恐懼之至ニり、依之弥以 仰出之趣謹る奉承知、以來夫々之分を相守、士風廉直ニ相行れ、一統一和いたし奉安 尊慮り様誠實ニ可相勵り、就中郷士以下末々之者共分限ニ隨ひ謹慎第一之事り條、聊超過之儀共會る有之間敷り、
右之通謹る奉承知、支配下下役等にも屹と可被申合候、

三月

筑後

大藏

攝津

但馬

式部

式部

白木御文書十一番箱中 七番

(01) 去ル午年外夷通商御免許以來、天下之人心致紛亂、各國有志と相唱り者共、尊 王攘夷を名とし、慷慨激烈之説

を以四方ニ交を結び、不容易企をいたしり哉ニ相聞得り、當國ニも右之者共と私ニ相交り、書翰往復等致り者有之哉ニ、早竟勤王之志ニ感激いたしり處より右次第ニ及び筈ニ者得共、浪人輕率之所業ニ致同意りる者、當國之禍害者勿論皇國一統之騷亂を醸出し、終ニ者群雄割據之形勢ニ至り、却り外夷之術中に陥り、不忠不孝無此上義ニる別る不輕事と存り、拙者ニも公武之御爲聊所存之趣有之りニ付、以來當國之面々右様之者共と一切不相交、命令に従ひ周旋有之度事ニ、若又私之儀を重んじ絶交いたし難き者者、有筋に申出りハ、其譯に應し、何様共可致所置り、尤此節之道中筋且江戸留滞中、右躰之者共致推参り共、私ニ面會致問敷、乍然無據譯ニ依り致應接り共敢て不致議論、其筋之者に談判いたしり様返答可致り、乍此上不勘辨之族於有之者、天下國家之爲、實以不可然事り條、無遠慮罪科可申付り事、

戊三月

久光御判

右一通

(の2)

和泉様御儀何篇是迄國政向御内談申上、且先度家老中に

公義より御内沙汰之趣表有之、我等實ニ多辛之に至りニ、

就る者此度二丸に御住居被遊り間、猶又表向

御介助奉願置り間、以來仰出等弥嚴重相守候様可取計

事、

戊三月

右一通

(の3)

寫

浪士共蜂起不穩企有之候處、鳴津和泉取押置候旨、先以寂感思召候、別る於御膝元不容易儀於發起者、實ニ被惱宸衷候事ニ、間、和泉當地滞在、鎮靜有之り様思召候事、

上包ニ

御筆

御寫トアリ

右一通

(の4)

久光公仰出

拙者より書取を以申渡り事遠慮ニ相考り得共、當時世上之情態何敷不穩之趣ニ相聞得候ニ付、不得已事先日爲相達事ニ、其後猶又致熟考り處、早竟上威之輕キ處より

群下類を引こ至り外儀こゝ、當主者勿論於拙者も心痛至極之事こゝ、士風沙汰之儀者此前者追々被仰出置、近比こゝも再往申渡爲相成事外得共、方今之模様こゝ者非常之變事到來之節、致一和外處無覺束存外、皇國こ生れ外者誰とても

王朝を尊ひ夷狄を惡み候情意も有之筈こゝ、若其志操無之者ハ禽獸同然之事こゝ、別こ勤王家之誠忠派之と可申様更こ無之事こゝ、然るに右通之名目相唱外由、別外不可然事こゝ、殊こ二年若之面々容貌異様にして、放恣之者共有之哉こゝ、是以先年より追々爲被仰渡事外處、近比者其節と者相變り外風儀と相成、愈以不宜次第こゝ、士者行跡律儀こ廉潔を專としてこそ本意之事と存外、何程武文研究いたし外共、言行不正異様異風こゝ者武士と者被申間敷外、且郷士以下家來末々こ至り外も、右様之者共有之哉こゝ、猶以不可然事外條、右之趣奉行頭人能く相心得、支配下江丁寧こ申諭、父兄又者同郷年長之者共よりも心得違無之様、屹と教誡有之度存外事、

文久三年戊三月

久光（花押 No.5）

右包紙ニ

戊三月十二日

御筆トアリ

(05)

和泉様御事、御別紙之通被爲蒙

勅命御滯京之段不容易御儀、於我等も冥加之至難有奉存候、依之一統拜見申付外條、謹る可奉承知外事、

戊四月

右包紙ニ

御筆

御添書トアリ

右數通五包アリ、外包左ノ通

一三郎様浪人御取押之儀

一 御感被爲 在、尚亦御鎮靜被遊外様於京都被仰渡外御書付御寫
一 但本行ニ付御筆御添書宅通
一 一 宅通

一 御同人様去戌三月仰出

一 御家老中可 三郎様御國政向御内談之趣、從

一 公義御内沙汰有之、二丸江御住被遊外ニ付、以來仰出等敵重相
守外様被仰渡外御書付宅通

一 右五通文久三年亥三月五日大藏殿被被成御渡、格段可致置旨森
喜藤太致承知、白木御文書拾宅番箱江納置之外事

348の1

雜集中

口上

此節私儀關東江出府仕外趣意通ハ、去々年（戊久）已來修理參府

兩度迄御猶豫、且亦屋敷燒失後下知不仕_レ由不相叶向有之筋_ニ御座_レ得共、内實ハ 公武御合體

皇威御振興幕政御變革被爲_レ在様、建白仕度所存_ニ御座_レ外、尤此儀ハ一朝一夕之事_ニ無之、去ル午年已來幕役其勅諭を遵奉不仕、外夷通商免許仕、剩正義之 親王公卿を奉始、一橋・尾張・水戸・越前其外有志之大名禁錮仕、

庶人老死流之刑_ニ取行_レ處方、乍恐被爲惱

宸襟_外由傳承仕、諸國之人心致紛亂、浪人共尊 王攘夷を致主張、慷慨激烈之説を以交りを四方_ニ結ひ、或老犬老を刺し或老夷人ヲ戮し_レ方、幕役共取靜之嚴令ヲ下_レ處弥奮發仕、近比_ニ相成_レる老殊_ニ致増長、終_ニハ不容易企_ニ及_レり哉_ニ傳聞仕_レ、右通_レる老

皇國一統騷亂之基と相成、勤王之趣意_ニも不相叶、却_レ外夷之術中_ニ陥_レ儀にて、實以不可然事_ニ御座_レ、私儀家督之者_ニも無_レ之_外得共、三百年來 徳川家之御鴻恩を蒙_リ、殊_ニ亡兄薩摩守臨終之節、國政之儀ハ勿論

天朝幕府之御爲宿意致繼述精_ク盡力仕_レ様、分_レ遺託之趣承居_レ付_レる老、右次第傍觀猶豫仕_レる老不忠不孝之罪難遁存詰、修理太夫申談是非關東_ニ出府、所存十分_ニ言上仕_レ含_レる、去月十六日國許發足、播州姫路に着仕

34802

_外處、諸浪人共追々上坂仕通狀相待、事を起_レ趣_ニ相聞得_レ付、道中差急義も出來兼、漸々去ル廿日大坂_ニ着仕_外處、浪人多人數滯坂仕居紛々之次第御座_外間、迎も無事通行難仕_外付、家臣之内内々差出、其方共實_ニ勤王之志有_レ之_外ハ、此方致上京

叡慮可奉伺_外間暫時潛居可仕旨、精々理解爲_レ仕_外處、乍漸承服仕_外付、去ル十三日伏見_ニ着仕、今日 參殿仕

叡慮奉伺所存建白仕_外、更々龜暴_ニ事ヲ破_レり義_ニ無御座_外付、天下之人心安堵仕_外様御所置被爲_レ在度所存_ニ御座_外間、不惡御聞取、委細奏聞ヲ被成_下様、伏_レ希_外、誠恐謹言、

四月十六日

別紙趣意書

(朝彦親王) (二条斉歌) (政通・輔熙)
一粟田口宮・左府公・鷹司公御父子御慎被爲解、且於關

東、一橋・尾張・越前等御慎解有_レ之_外様被仰出度_外事、

一右御慎解之上左府公關白職被仰出、於關東ハ越前前中將殿大老職_ニ被任度、此儀ハ家格_ニる先例老無_レ之_外御座_外へ共、非常之時節非常之處置有_レ之_外様被仰度

_外事、

一 田安後見名有る實なき事ニ御座外付、致免許外様被仰
渡度外事、

一 安藤對馬守手疵平愈出勤仕外由、是ハ第一天下之人心

ニ關係仕不可然事御座外間、速ニ退職仕外様被仰渡
度外事、

一 久世大和守早々上洛仕外様被仰渡、前件之義速ニ取行
外様屹と被仰渡度事、

一 朝廷御威光不被爲立外ハ、幕役共遵奉仕外義懸念ニ
奉存外間、大名二三家ニ御内勅被相下、若幕役共違勅

之趣も有之外者、速ニ辨責仕外様被仰渡度事、
此条御差支之義有之御取用無之

一 此以後者

一 叙慮之義浪人等ハ不相洩様、御取締嚴重ニ被爲相届度
奉存外事、

一 浪人共之説妄ニ御信用不被爲在外様、乍恐奉存外事、
一 越前在職之上ハ、上洛被仰出、將軍未若年之事ニ付、

非常之時節御懸念被思召外間、一橋ハ後見被仰付、
朝廷御尊崇之道於關東精々奉盡、邪正之辨明ニ相立、

外夷御處置天下之公論を以永世不朽之明判被爲宣、
皇威海外ニ被爲振外様被成度、乍恐奉存外事、

(01) 349

雜集中

年四拾五

深手

鈴木勇右衛門

年三拾

森岡善助

年式拾八

道嶋五郎兵衛

年三拾式

江夏仲左衛門

右八人ハ銘々御切米左之通被成下外、

今日於伏見抛身命無比類働誠忠之程令感悦外、仍而切米
拾石宛行候條、可抽精勤者也、

文久二年四月廿三日

御名乘御判

右之條々至愚之身を不顧申上外間、厚御評儀被爲盡、
若御取用ニ被爲成外御事ニ御座外ハ、一日も早く
勅命被爲在度御事と偏ニ日願ニ御座外、敬白、
四月十六日 源久光拜

上

年式拾

鈴木昌之助

年式拾九

奈良原喜八郎

年三拾六

大山格之助

年式拾八

山口金之進

一永田佐一郎事仕長ニ有リ處、同組都ル浪人ニ組しかけ
出外處、爲御斷自殺いたし付、左之通

諸浪人令鎮撫外儀厚令沙汰趣有之ニ處、抛身命申諭誠
忠之程令感悅、仍有切米八石宛行外條、可抽精勤者也、

文久二年四月廿三日

御名乗御判

右永田佐一郎江

年三拾八九
有馬新七

年式拾八七
弟子丸龍助

年三拾式
田中謙助

年三拾式三
橋口傳藏

年式拾三
橋口壯助

年式拾式三
西田直五郎

年式拾四五
柴山愛次郎

年式拾
森山新五右衛門

右八人大坂方伏見迄拔掛ケいたし、浪人共ニ組し、申
諭方不聞入、前件鈴木勇右衛門一列ニ討手被仰付、文

久二年戊四月廿三日曉伏見高道儀兵衛宅ニおひて無異
儀討留、皆共即死之由也、

雜集中

浪士共蜂起不穩企有之ニ處、島津和泉取押置外旨、先以
叙感 思召候、別有於 御膝元不容易儀於發起者、實
々被惱 宸衷候事ニ有間、和泉當地滞在鎮靜有之ニ様

思召候事、

一修理太夫實父島津和泉事、先達有御届申上置外通、江

口表ニ用向有之致出外途中、大坂表ニ諸國浪人共寄
集リ相待居、不勘辨之儀共申立付、程能申諭外得共
不致承伏付、不致散亂様家來之者共ニ手當申付置、

伏見迄相越、兼有 近衛殿ニ縁談之致内約置外付、酒
井若狹守様ニ御届之上、上京致參 殿外序、右浪人共

事情御内話申上外趣御座外處、其段達
叡聞、議奏衆方別紙之通

叡慮之趣御書取を以被仰渡外間、去ル十七日京都屋敷
ニ相越滞在罷在外段申越、此段御届申上外、以上、

四月廿七日

御名内
西筑右衛門

本文戊四月廿八日御書付之写、江戸御長屋詰人数江者打見被仰付
外由、同五月御国許互相達外

雜集中

戊四月廿五日

一浮浪之徒蠻夷之儀より彼是蜂起之趣、去ル十六日内々

言上、被惱

宸襟外處鎮靜之儀御受有之、被安

叡慮_レ外處、亦々一昨夜已來猛暴之形勢被 聞召_レ、元

來右之徒、爲 皇國赤心報國之志を以投身命_レ段考

御感之御事_レ得共、攘夷一件_ニ付_ル考、實々自先年深

被惱

宸衷_レ外處、何分國中一致之儀第一と被 思召_レ付、尚

厚被廻

叡慮_レ御事_ニ外、然處方今血氣之壯士等不用理解暴論

を爲主、奉

勅命を待_レして猥々亂妨ケ間敷儀_ニ及_レ段考、忠憤却_レ

違 勅之筋_ニ相當不埒之至_レ外、右等違背之輩考早嚴可

加制止儀_ニ被 思召_レ外事、

戊五月十八日

一方今之時勢不堪傍觀、島津家一同舉三國拋身命勤 王

攘夷之旨趣言上、不斜 御満足 思召_レ外、今般關東_レ

勅使被差向、偏々君臣御合體國內一致、攘夷之 成功

可有之、以深重之 思召被仰下_レ付、勅使_ニ引續

三郎出附可周旋、去ル十二日以書取被 仰出_レ外處、越

前前中將國政關係之儀於關東取計_レ段、

叡慮符合 御安心 思召_レ外、右_ニ付猶又別紙之通 御

沙汰候間、

叡慮之旨徹底_レ外様盡力可有之深御依頼 思召候、右之
段内々御沙汰_レ外事、

中山大 正親町三条大納言 飛鳥井中 久世三位 野宮左中將
忠能 實愛 雅典 通熙 定功

一 (徳川慶喜)
橋刑部卿・越前前中將等之儀御箇條書之通被 仰出

外處、去ル十八日 大樹年頭_ニ付、田安大納言後見願之

通差許、越前前中將國政可關係被申付_レ由言上有之、

就_ル考後見之儀強_ル考被 仰出兼_レ得共、何分内外不

容易形勢_ニ外間、深被遊 御案痛、以一橋被登用_レ外

可然、思召候、但名目之處可爲補弼歟、且越前大老職

外事可差支_レ得共、先件非常之所置を以可被申付 思

召_レ外、但是以差支_レ外ハ、政事惣裁職と稱_レ外も可然

思召_レ外、

但越前前中將儀 思召通相成_レ外上考、方今内外危迫

之時節_ニ付、今年中上京有之、國是之議論被 聞

食度_レ外、且同人弥上京之節考引續三郎_ニも可有上

京_レ外、其邊相含可有 思召_レ外事、

御系図 玉里久光公

文久二年壬戌四月始到_レ京師_ニ奉_レ

詔鎮_二壓浪士_一、既而凶徒起_二京攝之間_一、久光先誅_三之於

伏見_一、殘徒望_レ風而潰矣、

○五月十二日改稱_三三郎_一、

○七月二日

大家賜_二久光御刀_一備中片山
一文字一腰_一、賞_下鎮_二浪士_一之勞_上也、

○閏八月九日應_レ徵登_二

皇城_一、恭奉_二拜

天皇_一、乃_下

勅賜_二御劍一口_一、賞_下鎮_二浪士_一之功_上也、

白木御文書拾番箱中 百 十八番

包紙_二
御筆仰出

一 諸藩士浪人等_二私_二血會不可致事_一、

一 命を受すして猥りに諸方は奔走不可致事、

一 萬一異變致到來_レ共、敢て不致動搖、下知無之内其場

に不可駆付事、

一 酒色可相愼事、

右之趣先度より追々申渡_レ得共、以來猶又可相守_レ、

若此上違背之族於有_レ之者、無有捨可處罪科者也、

文久二年 戊辰四月

大坂御邸ニおひて被仰出候ト執事方帳留ニアリ

百 右包紙_二

三郎様於大坂、諸藩士浪人等_二私_二一面会不可致、其外ケ条書を

以被仰出_レ 御筆御書付迄通

右文久二年戊辰六月四日式部殿_方被成御渡_レ致格護候様佐多徳八

郎致承知、白木御文書拾番箱_二納置_一外事

雜集中

一 芳之進様御事御病氣之處御養生無御叶、今辰刻被成御

天亡_レ、此旨可被奉承知_レ、依之云々、

四月廿日

攝津

本文取次川上正十郎

一 芳之進様御法名

篤芳院殿玉雲賢露大禪章了

右之通本稱_レ候、此旨奉承知_レ様、可承御役人限り可

申渡_レ、

四月

攝津

一 和泉様御事、去ル十九日伏見被遊 御立筈_レ得共、京

都_レ被遊 御_留留_レ旨申來_レ、此旨向_レに可申渡_レ、

四月

式部

戊四月廿五日取次川上正十郎

一此節 和泉様御事於京都浪士共御鎮靜有之様、被爲蒙

勅命候付る者、別る 御冥加之至不容易御事付、今日勅書拜見濟之上、御一門方島津圖書殿并諸大身分其外月次御禮罷出外而々、於席々謁御家老、

太守様 和泉様は御祝儀被申上、諸士者御帳ニ相付、同斷可申上外、

但和泉様は兼る御祝儀申上來外而々者、追る飛脚使方可被申上外、

右之通向々は可致通達外、

四月廿六日

攝津

一和泉様御事今般御上京、

近衛様に被遊 御參殿外處、御滯京被爲在、浪人共御鎮靜有之様被爲蒙

勅命外付、

太守様 御筆御書添を以御別紙之通被 仰出外趣者、

一統奉承知通る、誠ニ以 御冥加之御事外條、弥以

御國法を相守、聊不致動搖人心相安し、御奉公方誠實ニ可心掛外、

四月

筑後

大藏

攝津

但馬

式部

右戊四月廿七日取次伊集院靜馬を被仰渡

一諸藩士浪人等は私ニ面會不可致事、

一命を不受して猥りに諸方に奔走不可致事、

一萬一吳變致到來外共敢る不致動搖、下知無之内其場へ

不可駈付事、

一酒色可相愼事、

右之趣先度方追々申渡外得共、已來猶又可相守之、若

此上違背之族於有之者、無宥捨可處罪科者也、

文久二年戊四月

右之通去ル十日 和泉様御筆を以御沙汰被爲在、誠ニ

以奉恐人事外條、御趣意之程誠實ニ相守外様、大坂於

御殿拜聞申渡相成外段申來外條、此旨向々は不洩様可

致通達外、

四月

筑後

大藏

攝津

但馬

式部

本文戊四月廿七日取次二階堂源太夫

雜集

平田延太郎於京師世態聞合之書付

此度泉州侯御上京之儀者、

天朝幕府之爲ニ薩國之力を以屹と御周旋之思召ニ外處、

今十二三日比藩士堀次郎儀大原卿に被爲召、

叙慮之達ニ被仰聞、

叙慮之大略者、是迄幕府之暴政違 勅等之儀をも寛大之

御仁惠を以御宥恕被爲遊、尚此上にも 公武御合躰、

徳川家を御保助被爲遊、賞罰を明シ攘夷ヲ候様廉々難

有御事由、斯之通ニ御受相調り哉否之儀をも被仰聞

外由ニ有、勿論

叙慮之處聊不奉違背奉畏外旨申上、否右之達ニ和泉侯に

申上、同十六日朝泉州侯伏見御立辰之刻比御京着、一

旦御邸に被爲入り外處、巳之刻

近衛殿方被爲召 御參殿被成り外處、中山公・正親町三

條公・岩倉公御參集ニ有、

叙慮之達ニ次郎人原卿より被仰聞候同様之由被仰聞、且泉州侯御存慮をも御尋

御座外由ニ有、泉州侯被仰外者、

叙慮之所一々奉畏り、乍併攘夷之儀者兎角内を整へ不置

外者不相成儀ニ付、先ツ一橋刑部卿を以 將軍家之

後見とし、其他尾張・越前を初賢明之諸侯寛罪を以禁

綱、或者退職被仰付り勤 王之御志有之御方を本ニ復

し、暴逆を逞し

天朝ニ迫りし賊を彦根侯を初關部伏安藤侯等を云輕重ニ隨ひ委ク罪ニ行ひ、

或者封を削り羽翼とし、向々逆徒

天朝に迫ル事の不相調様豫メ備を立、然後攘夷之策ニハ

相及可然旨申上、且

叙慮をも御伺被下度旨被及言上り外處、正親町三條公被仰

外ニ有、尾越公等を再本ニ復し外儀者中々難事ニ有

之、左様相成所外有者、却り内亂を醸し外様可相成旨

被仰聞外由を以、再泉州侯方是等之儀

叙慮之儘ニ不參外有者、所詮其餘之儀も不相行儀ニ付、

何卒

叡慮御決定之上、無御遠慮臣に被仰聞度

叡慮關東に下り外上、尚又奉違 勅外ハ、其節老不得

止事、臣等追討可仕、臣既ニ國を出ル之時身命を

天朝に捧ケ居り上老、聊願ル所に非ス、弊藩雖微弱三ヶ

國之人數を以屹盡力可仕、獨成否之處ニ至る老豫メ難

期といへ共、當今之人情を以相考り處、列藩之内ニ老

勤 王之志有之諸侯數多有之り外ハ、一度事相起りり

ハ、必

天闕に馳集り可申、依る

叡慮之處屹と 御英斷を以 御決定ニ相成り様被仰上度

旨被申上り由こゝ、中山公・正親町三條公早速參内及

奏聞り處、

主上頼母數被爲 思召、不淺

御満足之由こゝ、其形兩公方泉州侯に被仰聞、其餘難有

仰をも御蒙り、且當時滞在之儀を被仰聞り由、尤表向

老諸國浪士共數多洛中に込居り趣ニ付、萬一亂妨等ニ

可及程も難計、依る暫時之間右爲取締滯京仕り様被仰

聞、夜半過 御退殿、其儘伏見に御歸り、翌十七日伏

見御引拂を以七ツ時御着京相成、將亦

叡慮之儀も多分泉州侯御建白之通御英決ニ相成、久世閣

老御呼立之旨 勅書御同人に御渡ニ相成答こゝ、今十

七日關東に被仰遣り由、且又 幕府違 勅いたしり時

老、干戈を動ス御成算故、其用意老屹と相調、一左右

次第御國方も多人數馳登之御調へ相成居り由、薩藩士

有志之者共、泉州侯御供之外夥數伏見大坂等に相潛居

り者を初、其他諸藩同志之者共、萬々一泉州侯關東に

御下り之思召歟、又老聊こゝるも手緩キ思召有之りる機

會を失ひり様之儀有之時老、不得止事泉州侯之命を不

用、機ニ投し同志之者供々事を可起存念ニ有之り由、

和泉侯前件之通之思召故孰も望ニ叶ひ、右藩士ハ素よ

り諸藩之者迄も大ニ相悦ひ時を相待、且薩藩役手方も

妄之儀無之様精々相制居り由、

右四月十五日方同十八日迄之中承之文久三年戊辰

長州藩山田又助と申者、君命を受長門下之關こゝ和泉

侯に拜謁仕、於弊藩も是迄頻りに致苦心、何

天朝之奉休 宸襟度存念ニ有之り處、當時寡君關東ニ罷

在、殆機ニ後れり故、所詮先鞭老御尊藩に被取り得共、

二に到る老決る他に老不讓、屹と盡力可仕旨申上り處、

泉州侯方決る先後杯を相争り譯ニ老無之、互ニ國力を

盡し謀を合せ、

敵愾を可奉休旨被仰聞り由、長州侯は關東の御周旋被遊、幕府は是迄屢違勅奉惱宸襟外事者不及申、失敬之儀幾重にも恐入、寛罪を以退職禁錮等いたし賢明忠義の御方を本に復し、暴逆を逞し

天朝に迫り逆賊を委く討し、正道に復し上、將軍自罪を謝しり様被遊り様思召り處、有志之者ハ今に至り關東の御周旋甚手緩し、何分此機を不失、

朝廷方賞罰を正しり様被遊度存慮之由、同藩政府者大に振ひり得とも、君側ニ長井雅樂と申者有之、彼之論大害を成しり由、島津泉州侯者蒸氣船の室之津方御上陸之由、鹿兒島より大坂迄二晝夜の往來出來り由、福岡侯者御參府之筈の倉谷まで御出被成り處、同所の御病發、姫路まで御引退御歸國共、又同所の御決心御上京共云、

伏見の人は足御雇之調等有之由なれ共、御上京之儀不詳、右四月廿二日迄承之、

先達の方京攝之間に潛居り列藩同盟之志士共、廿三日之夜決心事を發し、京師之逆賊を可誅戮由にて、薩藩同盟之士も六拾人餘大坂に居り者共、伏見京邸内に居候同盟之人數不相分伏見

馳登りり由、右之企和泉侯之御聞入より干戈を動

しり者忽奉惱宸襟の儀、我藩の事を起しり者有之の者、無是非可討取趣被仰付を以、先達の方伏見に待受相諭りへ共承伏不致、不得止事六人討取り由、柴山愛次郎・橋口壯介・橋口傳藏・有馬新七・田中謙助、右事跡承知より切腹森山新五左衛門、右六人同志之頭の八組之頭と唱へ同盟之士を相率居り由、何分和泉侯之御志閣老御呼立等之儀緩なるを以、此機を失ひり時ハ事不成と決心いたしりよし、右藩動搖に依る其夜ハ事を延しり由なれ共、依右同盟撓り様之義無之、益々決心機會を見合發り由相聞、今廿三日吉御陣屋詰間崎宅一郎・多田三五郎等へ吉松寅太郎・宮路定藏兩人が書翰差越り處、同志之者共決る當夜京師之逆賊を討戮致しり付、其機を不後早く御人數御繰出し、

天朝を可奉守護云々と申越り由、
同廿五日承之、

列藩浪士上京薩邸居り者四拾人餘、和泉侯の方之御諭を以、二十七八日比大坂迄爲引退り由、

右文久三年癸亥正月廿日寫之トアリ

玉里五現書御引讓ノ内
白木十番箱百二十七番

口述

唯今忠左衛門招寄之義ハ其元 呼名和泉之處、於關東老
中水野和泉守モ有之、差當如何ニと存ク問、呼名御改ニ
ル者如何、殊ニ三郎と被改ケハ尚更之事と存ク、仍右
之通申入度旁忠左衛門入來、 御頼申入事ニ付、

(宋)「文久二年戊」五月十一日

(宋)「在口裏」

泉州とのへ 忠房

(宋)「包紙」

嶋津和泉とのへ 忠房

雜集中

五月廿一日

勅使御發駕被 仰付外節別段被 命付

叡慮之寫

朕國家之爲に日夜うれひにたえずして、幕吏苟も安から
ん事をぬすむ、依り方今汝を關東に下して、あまねく朕
か固有之志を宇内にしらしめんと欲す、願くハ汝か腹心
をしるて怠事ある事なかれ、且營中廟論の日萬一幕吏曲
直をあやまり、島津と爭論におよはん事も計りかたし、

然則汝大道をもつて是非をさとし、天下の一大事をあや
まらしむることなかれ、今日事朕一ツに汝にゆたぬ、汝
つとめて祖神の宸怒をなくさめよ、

五月

右大原卿^(兼德)に之

別勅

禁裏より關東ニ御尋ニ付大原卿製

勅ケ條書之覺

一天下之將軍職乍持、貴き神國に夷人ヲ乘陸爲致、剩交
易等之儀者勿論津々浦々に旅館を設させ付儀、第一不

審也、

一天下之政治等爲、

和宮様を關東に移 御下向之事、第二ケ條也、

一井伊掃部頭先年不慮亡死致付儀、何之辨も無之、今般

和宮様 御下向之儀、是迄自往古例無之程 御慶事と

云、不顧恐爲城使當掃部頭を差登せ付事、第三ケ條也、

一禁裏御所先年御類燒後普請ニ有、其以後龜末ニ有之、

關東ニ有る榮花ニほこり付儀相聞得不埒至極也、是四

ケ條也、

一 吳人渡來、徳川家譜代之小身大名彼は天下之掟を背キ
 一 一條、第五ヶ條也、

雜集中

一 浪人御鎮靜之儀ニ付、不容易

勅命之趣被遊御承知ハ趣老御承知通之事ハ、追々御手
 も相付、鳴津石見殿も上京被仰付、其外守衛方も多人
 數當所ハ被召置被遊 御出府ハ御事ニ有、此末何様之
 儀到來も難計、右ニ付有老

三 郎様江戸御用濟、當秋 御上京被遊ハ答ニ付、夫迄

老御自分并汾陽次郎右衛門滯坂罷在、被致指揮ハ様御
 沙汰被爲 在ハ付、此段申越ハ條、汾陽ハ被申談滯坂
 可被致ハ、

五月廿二日

小松(清康)帶刀

菱刈(天目付、隆敏)李之介殿

雜集中

一 和泉様御事、於京都從

近衛様被 仰進趣被爲 在、去ル十二日

三 郎様と御改名被遊ハ段御到來ハ、此旨可奉承知ハ、

右之通表方ハ致通達、奥掛御勝手方ハ表相達、諸郷私
 領にも可申渡ハ、

五月

川大進
 但馬

一 和泉様御事、去ル十二日

三 郎様と御改名被遊ハ付、御一門方其外月次御禮罷出
 ハ面々、明廿二日四時登 城、於席々相謁、

太守様 三 郎様ハ御祝儀可被申上ハ、

但大奥ハ兼有御祝儀等被申上來ハ面々、當日又老御

精進日間御祝儀被申上之云々、

右之通表方ハ致通達、奥掛御勝手方にも可相達ハ、

五月廿五日

但馬

本文五月廿五日取次二階堂源太夫

雜集中

一 和泉様御事

三 郎様と被遊 御改名ハ付、三之字并同唱之文字可致
 遠慮ハ、乍然喜三左衛門・喜三次杯と下ニ用ハ儀ハ不
 苦ハ、

右之通表方ハ致通達、奥掛御勝手方へも可相達ハ、

五月

但馬

一三郎様御儀、去ル七日

近衛様^に御參 殿之砌、御用之儀被爲 在^り付 御參

内被遊^り様、 議奏衆御取傳を以被爲蒙

御内勅、同九日 近衛様^に 御參殿之上、

關白様^方 御烏帽子御直垂等被進^り付、御召替^こる被

遊 御參内^外處、御懇之被爲蒙

褒勅、 御劍一振被遊 御拜領^り旨御到來、依之御一

門方并嶋津圖書殿、諸大身分其外月次御禮罷出^り面^々

者明後廿四日云々、下文無之

雜集中

六月朔日

上意振

近年不容易時勢付、今度政事向格外^に令變革^り間、何處
爲國家相心得^り儀者可申聞、猶年寄共可申談^り、

今日

上意之趣誠^に以厚

思召、國家之御慶事無此上難有事^こり、昇平殆^{三百年}三ヶ年其

流弊綱紀表相弛^み、武備御行届^こ相成兼^り折柄、近來外
國之事務頻^こ御差添い^こ相成、右御取扱振^り自然天下之
物情^こ差響、終^こ奉惱

叡慮^りこ至り、深く恐入 思召^り、素^素公武之御間柄

聊も御隔意被爲 在^り御事^こ者無^り得共、何となく御

情實御通徹^こ相成兼^り故^方之儀^こ付、速^こ 御上洛萬端

御直^こ被仰上度との 思召^こる、則御内^々被 仰出^こ相

成^り、併 御上洛之儀者寬永以來御慶典^こ相成^り御式^こ

得^り者、萬端之取調急速^こハ御行届^こ難相成^り付、暫^く

之處年寄共^方御猶豫相願^り處、此度之儀者御舊例^こ不被

爲拘格外御省略、御行粧等萬端御易簡^こ被遊^り 思召^こ

付、急^く取調次第と被仰出甚御急 思召御事^こり、萬事

御誠實^こ 思召 御直^こ被仰上、 御合體御熟算之上從

來之弊風御一洗 御武威被遊 御振張、 皇國御世界第

一等之強國と被遊^り 御偉業を被爲立、各

天朝之宸襟を奉安、下者萬民を安堵爲致度との 思召^こ

得^り者、何れも厚奉得其意、御政事向御變革之筋等各見

込^り儀も可有^り得共、聊も不憚忌怖國家之御爲第一^こ

相心得、心底を盡し可被申上^り、猶追^く被仰出^り儀も可

有^り之^間、飽迄も其意を體し可被抽忠誠者也、

雜集中

六月

一先月中旬大原三位様關東江爲

勅使御出立付、同日 三郎様ニ表當所御發駕、可被遊御出府旨、近衛様方被遊御承知り段申來り、此旨向く江可申渡り、

六月

但馬

白木御文書拾番箱中 百三十番

敬白 天爵靈社起請文前書之事

一私儀若輩之至御座候之處、今般三司官役被 仰付、冥加不淺難有仕合奉存候、弥以 御國許御奉公入念可相勤候事、

外ヶ条并神文略ス

文久二年壬戌六月十九日

宜野灣親方
朝保判

雜集中

大目付江

銃隊訓練之儀近來西洋法御採用相成、御旗本御家人老於

講武所致修行、夫々厚く御世話有之、諸家におひても追

く心掛格別出精之向表有之趣ニ考り得共、猶此上一同及熟練り様三人々々厚く世話可被致り、就る老麴町三丁目

裏火除明地砲術師範役下會禰甲斐守・高嶋喜平訓練場御

預相成、江川太郎左衛門江老兼る芝新錢座訓練場ニ御預有之之間、萬石以上以下之家來等講武所不罷出儀ニ付、

勝手次第甲斐守・太郎左衛門・喜平申談、右訓練場ニおるて精出修行り様可被致り、

右之趣向く江可被相觸り、

四月

別紙之通從

公義被仰渡り條、此旨組中・支配中・諸郷へ不洩様可被申渡者也、

戌六月六日

御軍役方
御家老座印

御勝手方

右書略

戌六月七日

御勝手方印
取次
伊集院平治

365

一 御側詰

小松帶刀

右者未年功者無之得共、此節柄不容易御用筋出精相勤付、別段之以、思召右之通御役替被 仰付、江戸・御國許共御家老座にも相詰、御家老同様御國致取扱ひ様、先月廿日京都於御殿

三郎様御直被仰付候段申來り、此旨表方に致通達、奥掛御勝手方へも可相達り、

六月

大藏

右六月十五日取次御用人川上正十郎を通達

一三郎様御儀、先月廿二日京都被遊 御發駕を旨申來り、此旨向へ可申渡り、

六月

大藏

一三郎様 御機嫌能去ル七日被遊 御出府を旨御到來り、依之御一門方・嶋津圖書殿并諸大身分、其外月次御禮罷出を面々、明後廿八日四ツ時登 城云々、

六月廿六日

大藏

366の1

雜集中

三郎様方大原卿に被進り御書寫

御口上之趣奉拜見り、今日高家來御達之御書付御見せ被下難有奉存り、扱昨夜中篤と勘考仕り處、種々存慮之儀も有之り付、別紙之通先刻脇坂方に書狀差遣り間、御心得も可被爲成と奉存、奉備高覽り、毎度亂書御推覽奉願り、先ハ右旁如是御座り、以上、

六月十六日

嶋津三郎

左金五様

極御内用

366の2

脇坂に被差遣り書狀寫

先日ハ舊來御親睦之一筋を以、御役場御離レ御面會被成下、別ゝ忝次第奉存り、殊ニ隨貴意存慮無服藏申述り處、何れ忝御吳論無之致安堵り、夫ニ付尚亦熟考いたしり處、何れ天下之御爲と奉存、僭踰之罪を不顧、左條之趣申述り間、御都合次第御同列方に御談合被成下度奉願り、

一 此節

叙慮之趣被爲 在、久世氏上京之儀被仰出り處、御受及遲滞り付不被爲得止事

勅使被差下、公武御一和 御國內一致之處無之ハ

者不相濟被 思召ハ、就ル者一橋・越前之兩侯天下之

人心歸嚮する所、御後見御大老ニ御登庸有之ハ様と之

御趣意、誠以御大悦至極之御事と奉存ハ、然處先日粗

御咄致承知ハ得者、名目之處 御評議甚六ヶ敷出、其

節者愚意何共不申出、態と差扣罷在ハ得共、退ル勅者

いたしハ得ハ、存付之儀致黙止ハ却ル不忠と奉存、

不得止事申上ハ、邂逅

勅使被差立被 仰下ハ御趣意、總名目計ニ被爲拘御評

議御決定無之ハ者、乍恐優柔不斷と可申敷、當時不

容易折柄舊格先例ニ御拘泥被爲 在ハハ、以之外之

御大事と奉存ハ、ケ様御評議御遅延相成ハハ、亦々

人心疑惑を生シ、吳説紛々流行いたシ、浪人共致蜂起

ハ儀も可有之哉、甚懸念至極ニ奉存ハ、若其次第ニ相

成ハハ、迎も

御國威御挽回之期表被爲 在間敷と實々恐入奉存ハ、

何共非常之時節御出格之譯を以、一日も早く御評議

勅使御遵奉被爲 在ハ様伏ハ奉希上ハ、尤一橋君御後

見之儀者、近比田安君御免ニ相成ハ故、際々之所如何

と之御評議ニ奉伺ハ、御尤之御事ニ者ハ得共、不容易

時節被爲惱

宸襟、態々

勅使被差上被仰下ハ御事ニ御座ハハ、快ク御受被爲

在ハ者、公武御一和之御實情御通徹被爲 在ハ御儀

ニハ、天下有志之人心表此一條ニ奉感腹、御國內御安泰

之基と乍恐奉存ハ、越前着之儀者御家門之故聊御故障

之御事も御座ハハ、御大老同様御政事御總裁有之ハ

様屹と被仰渡度、一統ハ表右之趣承知仕ハ様御達被爲

在ハハ、御國內靜謐人心一和罷成、無此上御美事と

乍恐奉存ハ、

一長州之事粗申上ハ處、御答振不分明致承知ハ、此儀ハ

先比脇方ハ、當五月二日大膳(毛利慶親)太夫より之上書落手仕、

虚實者難量ハ得共、愚意聊致疑惑ハ、御上洛之御一

條者、實以寛永以來之御盛舉ニハ申上迄も無御座御事

ニ候得者、先日も粗申上ハ通、何そ當年中不被爲行ハ

るも天下之人心紛亂仕ハ儀有之間敷、來春ハ先ニハ表

被爲行ハ者御宜敷と奉存、貴公様ニ表其趣意と致承知

ハ、然るニ長州者頻ニ此儀催促申上ハ姿ニ相見得、甚

心配ニ奉存ハ、方今之所ニハ者

勅命之通越候御登庸之上當秋上京被命、外夷御所置國

是之御評論言上有之、

叙慮御伺被成り方可然歟と奉存り、急速ニ御上洛被爲 在りる者、御道中宿々及迷惑、且於 京師種々御

評儀決兼り御事共被爲 在り者、以之外之御事、都而

皇國紛亂之基歟と乍恐奉存り、大膳太夫爰許へ罷在り

者、小子面會致直談所存ニ有之り得共、小子着を乍存

道を替前日發足之次第、何共不審千萬心底難量御座り、

(毛利元徳)長門守出府之由ニ者り得共、家督ニ無之り得ハ決兼り

儀も可有之り付、相成事り者只今之内大膳太夫再致出

府り様被仰出、小子と深厚致談合り様被仰付り儀者相

叶申間敷哉、趣意致一致 公武之御爲別る可然御事と

奉存り、右之趣家督ニるも無之身分ニるり得共、亡兄

遺言之一筋も有之、不得止事不肖之身を忘存慮十分申

上り間、若忌諱を犯しり僭踰之罪御糺有之り者何様共

可奉畏り、此節國元致發足刻、身命を抛 公武之御爲

周旋仕り儀ニる、敢る功名榮利を貪りり趣意無之、

公武御一和 御國內一致相成り者、愚身者如何様相成

りるも曾る遺憾無御座り、此趣之條々御汲取被下度奉

伏願り、以上、

六月十六日

右文久二年壬戌六月十六日於江戸

三郎様へ御老中脇坂候江御内、被差出り御書付ニ而り事

玉里元現書御引讓ノ内

白木十番箱百三十一番

鳴津三郎儀用向有之上京致しり處、浪人共相集不穩様子

有之り付、鎮靜可致蒙

御内諭、差向取計骨折りニ付御刀被下之、

(朱)「文久二年戊七月二日」

(朱)在口裏

松平修理大夫に

368

白木御文書拾番箱中 百二十九番

包紙ニ 太守様御筆仰出意通

追々申渡り通外患内憂之世態、人心ある者誰か是を痛恨

せさらんや、然者

三郎様にも

順聖院様御遺言之御旨被爲受、日々月々危急相成無御據

我等参府延引被仰出り、御斷且芝屋敷向御下知者表向之

名目ニる、内實者爲天下國家第一被安

叙慮り 思召ニる、當春御發途被遊り處、御滞京之

勅命被爲 蒙、浪士御沈靜之義被 仰出、萬々御苦心被
遊御取沈相成、其後ニ至リ重キ御品且不容易
勅命等御頂戴被遊、又々此節

勅使御同行關東御下向被仰出、御出府之上も追々相伺
處、

公邊向別の御都合宜、越前前中將殿・閤老邊にも御逢被
遊外處、只管尊 王之志被相貫、

三郎様御趣意御取用相成、越前中將殿登 城御用部屋日
勤、板倉出職、是等皆

三郎様御建白^ら被用相成外事ニ外、此旨ニ御政道一新正
大公平之御處置相成外者無疑義ニ有、我等實以大幸不過
之外、然共

三郎様御苦心之程實ニ奉恐入次第外、就る者國內之者共
弥正路を心掛、分ニ應し銘々一入可勵忠勤事ニ外處、士
以上之處此比様々之流言有之哉ニ相聞得外、時世輕重も
不量別る不埒之者共と存外、直様殿科ニ處度外得共、格
別

三郎様にも御苦心被遊外折柄之事故先暫差扣外、以來流
言等申觸外者於有之者、國家之妨相成事外條、無用捨可
及處置之條、其通可相心得外、此旨先達外^ら相合外得共、

態と不相達外、各中にも此度

三郎様公武御盡力被遊外次第、國家之爲者申ニ不及、
天朝之御忠誠

御先代様之御孝道如何相心得外哉、精々忠誠有之度存
外事、

文久二年壬戌七月

右外包ニ

文久二年戊七月廿四日筑後殿より千田七郎兵衛江被成御渡、白

木御文書拾番箱江納置外事

369
雜集中

一追々被仰渡外通、内外憂患之時態人々奉承知道ニ有、

今般 三郎様爲 御出府被遊 御發駕外處、御滯京之

勅命被爲蒙、浪士 御沈靜之儀被 仰出、厚被遊 御

配慮、浪士御取鎮之上 御出府被爲在^ら外處、公邊向

別の御都合宜、御老中様方にも御對顔 御趣意之御旨

被仰上^ら外處、御取用相成外御事共、

太守様別る 御大幸被 思召上候、就る者御領内之者

共弥正路を心掛一入可勵忠勤事外處、士分以上之者此

比様々之流言申觸外段被 聞召通、別の如何被思召上

外、直様御取扱被爲 在度外得共、先御用捨被遊、以

來流言等申觸り者者屹と御處置可被爲 在と之趣共、御別紙之通 御筆を以被 仰出、何共奉恐入事こり、浪士御取鎮之儀者實以不容易御事こる、依時機者 御國體こも相拘事り付、種々 御苦心被遊無難こ御鎮靜之御處置、一統難有可奉敬承事候處、様々流言等申觸り付段別る不埒こ被 思召上り趣、誠こ以奉恐入無申譯次第こり間、向後屹と相愼、右様之儀共會る無之、弥正路を相守、追々被 仰出り御趣意相貫、一向勵精勳可奉安 尊慮候、此旨謹る奉承知支配下下役等にも可申渡り、

七月

筑後

大藏

攝津

但馬

式部

右戌七月六日被仰渡り事

雜集中

一 太守様御儀御用之儀被爲 在候こ付、去ル二日 御名代御一類中様御壹人 御登城之處、

雜集中

三郎様御儀御用向有之 御上京被遊り處、浪人相集不穩様子有之り付、御鎮靜可被遊旨被爲蒙 御内諭、御差向御取計御骨折被遊り付、 御刀御拜領被仰付り段御到來り、依之御一門方并諸大身分其外月次御禮罷出り面々、明十九日四ツ時登 城、 太守様 三郎様に御祝儀於席々相謁可被申上り、但書略ス 右之通表方に致通達、奥掛御勝手方へも可相達り、 七月十八日 筑後

此島田(九条家諸大夫、正辰)左兵衛權大尉事、大逆賊長野主膳と同服いたし、不謂奸曲を巧み、天地不可容大奸賊也、依之加誅戮令梟首也、

文久二年戊七月

雜集中

一 三郎様此節鎌倉(神奈川)に被遊 御參詣筈之處、神川驛この御行列先に吳人三人、内壹人女馬上こる駈込り處、守衛方御供人數之内に、壹人打殺三ツ計こ伐捨有之り由、

壹人ハ腸抔出居り哉こゝの決る存命之程六ヶ敷、乍漸其

場逃去り由、右之始末注進いたしり哉、五六十人位馬

上こゝの鐵炮又老鎗拔身こゝ、右打殺り者を尋こゝ爲參筈

被察り、鎌倉御廻表御取止こゝ小田原驛に御泊りこゝ相

成りり由、右小田原驛を飛脚こゝ當所は參り足輕直咄

御座り、然處御供目付山口彦五郎殿・肝煎兒玉源右

衛門殿外こゝ足輕拾人被召附被差遣、右一條取捌こゝ御

座り半と被察申り、小松家も小田原驛に人馬差支こゝ

滞在り哉こゝも承りり付、右之譯合故御滞こゝる表御座り

半、御内分御洩申上り間御覽之上御捨可被下り事、

372の2

御家領五百石 石葉師通西南側
一中院前侍從通繁朝臣 正四位下年七十四

高百三拾石 本町淨華院前

一押小路遠江權介實潔朝臣 正四位下年三拾六

高貳百石 石葉師通北側

一中山大納言忠能卿 正二位年五十

高百五拾石 丸太町富小路西へ入

一岩倉三位貞慶卿 正三位年五十六

高百五拾石 西殿町北側

一千種左少將有文朝臣 正四位下年四拾五

右之御方、當月初比閉門被仰付り哉承申り、

373 雜集中

一筆奉啓上り、時分秋冷相催り之處、尊父様を初御一

統御勇健被遊御座り半と大慶至極こゝ奉存り、隨こゝ私こゝ

も先月六日御下向之御供被仰付、江戸表同廿一日罷立、

道中一日表駕籠并馬などに乗り不申り、昨日夜入過

錦之御屋敷方十町計之大雲院内知徳院と申寺に安着

仕申り間、乍恐左様御休意被遊可被下り、扱江戸御立

之日老、神奈川之手前こゝ、亞墨利加人共四人馬こゝ打

乗り、内壹人老女こゝ共こゝ列立罷通り、私こゝハ六郎殿

同道こゝ

上様御行列拾町位御先に差越居り付、誠こゝ惡キ姿之

者共こゝの嚙切ミをなして難なく罷通しり處、問もなく

吳人兩人馬にむち打至極けはしく罷歸申り付、何事到

來り半と私語きながら又跡を見かゑり申り處、今一人

馬を駈戻りり、其跡こゝはなれ馬壹疋駈來りり付、夫方

決る渠等御行列に相障り爲申共こゝ誰か切殺り半と思

ひ、先こゝにけ行吳人之後ろを見申り處、左之脇之下よ

りおひたこゝしく血なかれ、扱は大變到來いたしり付御

與本に駈付申きて不叶事と相考へ引かへしり處、御供

之内こゝ本多源五殿・黒田良助殿云る兩之衆追懸來られ

外付相尋申外處、推量通り之事なる、奈良原喜左衛門殿御供目付之事故、壹人を切殺し一人ニ手負せ爲申段承届、引返ス途中之草原に仰のけにたをれ居申付、立寄見申外處、いまた殺きり不申外付、六郎殿にらミ居られ外處、手を合せて斷等敷事を申様に有之外得共、一向決り不申外、就る者一人も不殘打はたすへき之處ニ、適々我々共御先ニ行なからケ様之事とは夢不存外付、無覺を取り殘念之至奉存外、然共一人手を負ひ外吳人、程なく神奈川之邊ニ落命いたし爲申由承及ひ外、尤女も手を負ひ爲申と云へる人も有之外、扱上様ニ者當日神奈川に御小休ミ之筈外得共御通ぬけニ、程ヶ谷に御泊りに相成外、神奈川之宿に老土師吉兵衛殿・高崎猪太郎殿・付役三人相残り、情實を探索致され外處、程なく貳三拾人宛四くきり計り馬より鐵炮をたつきへ來り、右之殺體を持歸り由、夫より又々百人計り歩士出來り、非常之道具ヲ持ち、殊ニ毒煙之用意など致し、御本陣に攻來る躰ニ御座外處、公儀役人差留申外由、尤忍び聞取ニ御殘し被遊置外足輕之兒玉林兵衛と申者者、彼是御本陣に御注進申上合ニ、宿馬ニ打乗り程ヶ谷に差越外處、神奈川之内ニ

吳人ニ行逢ひ、直ニ鐵炮を三筒打掛外付馬を飛下り外處、店棚の上にあをのけにたをれ、刀を抜かんといたし外得共一向起き揚ならず、漸く起あかり刀をぬき外處、直ニ逃去爲申由、誠ニ不届至極之者共ニ御座外、其上右之馬を盜取神奈川に持參り爲申由外、然共餘り御行列方ニ騒ケ敷躰無之、若攻來る事もや外半と御用心堅固ニ御備へ被遊外、九ツ時分迄ハ一人ノ鐵炮并用具等相渡居外得共、三郎様之御沙汰ニ者、夜中と言ひ地理者疎く、殊ニ手詰之勝負合に者不得手之者共ニ外得者、よもや攻來り不申外と被仰り由、夫方皆々旅宿罷歸外、就る者是より御國に老仇をなし可申々難計外付、不日ニ到來之處（懸之）嫌念ニ奉存外付、尚助殿・元榮殿・元俊殿（元）も其心得ニ折角無懈文武之執行可被成外、

一昨日者大津と京都との間之宿（山城）げあけと申所方惣供被仰付、爰許方一里計なる近衛關曰公之所に御上り被遊、右之御門内ニ我々共迄入込ミ誠ニ恐入次第ニ者、我々式卑賤之者ニ御公達之御門内に罷上り外事、一生之面目無此上（奉）次（忠）第ニ者、其上中山大納言様・扇松様・（飛騨）井中納言（三）位重徳（實）様、（實）松様、（實）松様、大原様御四頭之御入りニ者、御下り之折

八拜謁等仕申り間、板鼻氏并久保氏などへも参られり
砌ハ御咄可被成下り、

一三郎様ニ老京都御滞在ニ罷成り、いまた今日迄老御日
限も相分り不申り付、後便申上奉るべく、川村氏
にも至極元氣ニ有る大雲院ハ一里計有之り相國寺と申所
に被居り、先老此段荒々爲可申上如斯ニ御座り、恐々
謹言、

戊閏八月八日

宮里孫八郎

正容

御兩親様

尚助殿

元榮殿

玄俊殿

其外

尚々無御痛御保養被遊被下り處念願ニ奉存り、

374

雑集中

八月十六日出立

谷村十右衛門

宮里新次郎

樋脇五人

東郷五人

隈之城五人

同廿一日出立

千田喜三次

内山四郎右衛門

國分拾人

清水五人

串木野五人

同廿六日立

山城新右衛門

伊集院八郎

伊地知八郎

櫻島五人

小根占五人

高山五人

鹿屋五人

閏八月十一日立

本田彦次郎

川上六郎

加世田拾人

志布志五人

蒲生五人

閏八月十六日立

石塚清右衛門

有馬藤七郎

始羅郡

山田五人

帖佐五人

伊集院五人

市來五人

閏八月廿一日出立

圖師崎良助

菱刈束

新納休藏

福山五人

伊作五人

指宿五人

羽月五人

右之通江戸爲守衛出府被仰付り事、

375

白木御文書十一番箱中 一番

(島津寄紙)
松平大隅守

(本文書ハ二五二の二号文書ト同文ユエ略ス)

右包紙ニ

一番

文久二年壬戌閏八月廿七日黒田嘉右衛門宰領^ニ而從江戸持下、
御家老衆御拜見之上、毎之通可致格護可致旨、式部殿^ハ致承知、
白木御文書拾壹番箱へ納置外事

八番 御封書一通 箱人也

外包^ニ

松平修理太夫殿

松平豊前守
水野和泉守
板倉周防守

猶以支度出來次第其元可有發足^ハ、道中被差急^ニ不
及^ハ間、常躰之日積^ニ可被相越^ハ、供廻小勢可被

召連^ハ、以上、

其方御用之儀^ハ間可致參府旨被 仰出^ハ、可被存其趣^ハ、

恐^ク謹言、

閏八月廿五日

板倉周防守
勝靜判

水野和泉守
忠精判

松平豊前守
信義判

松平修理太夫殿

外包^ニ
文久三年亥三月十三日大藏殿^ハ毎も之通格護可致旨平田九十
郎致承知、白木御文書拾壹番箱へ納置外事

辨集中

一三郎様御儀此節被遊 御參内^ハ處、御懇之被爲蒙

褒勅 御劍被遊 御拜領^ハ付^ル者、

齊興公朱衣肩衝御茶入 御拜領并

齊彬公御差之御大小被遊 御拜領御例より、諸事御手

重キ方致取しらへ^ハ様被仰付^ハ旨、可承向^ハ可申渡^ハ、

閏八月

(喜入久庵)
攝津

辨集中

松平肥後守京都守護職被申付、御警衛行届御安心被 思

召候、然處一藩奉職^ニる者人心居合^ハ如何可有之哉、御

掛念被遊^ハ、依之嶋津三郎儀今般 公武御一和之基本を

致周旋、爲

皇國盡誠忠之者^ニ、此末 公武之御爲別^ル可然被 思

召、旁御別段之

叙慮を以斷然守護職被 命^ハ、於大樹家尚亦

叙慮貫徹之様、肥後守申談相勤^ハ様被進度 御沙汰^ニハ

四番
 外包_二左_一二行
 一三郎様_正御後見御願立之御書付_迄通
 一公義_々御附紙_迄通

實父嶋津三郎事、私家督以後國政向萬端心添致し、精勤之趣入 御聽、參府之上老國許政事向猶厚心得、萬事行届_レ様可取計旨

御内沙汰被爲 在_レ段、去年三月御内達之趣承知仕、難有仕合奉存_レ、然處方今之時勢品々心配之筋_及有之_レ付、私後見被仰付被下度、左_レ老國政向萬端猶又申談厚指揮_レ様仕度相願_レ、此段御内意申上_レ、以上、

九月廿八日

松平修理大夫

書面願之趣_老其方_二取計_レ儀_老可爲勝手次第事、

右外包_正

文久二年戊十二月九日筑後殿_々何之通格護可致旨千田傳一郎

致承知、白木御文書拾壹番箱_正納置_レ事

御系圖 齊彬公御子

一男 女八人

一女子

貞姫 貞君 光蘭 近衛内大臣忠房公簾中
 文久二年壬戌九月追擬_二齊彬養女_一、實久光之義子、

在執事方帳留

久光公御筆

家老中_正

一我等事先般

御内勅を奉戴し關東_正に_レ出府、公武之御爲聊微力を盡し、再上 京復命_二及_レ處、不圖も先月九日_正 内被仰付、議奏衆御取次を以不容易奉蒙

褒勅、殊_二重き御品迄も拜領被仰付、誠_二以武門之冥加不過之事_一、全體我等素志_老

皇國內外之大患不堪傍觀、且

順聖院様御遺託之御旨紹述度赤心_二、事之成否を不顧、忌諱を侵し犬馬之勞を致して、王臣之分を盡し_レ迄之趣意_二、格別之奉蒙

殊遇_レ義不存寄事_二、且關東_正におひて一橋・越前登用相成、尊 王之道追々相立_レ勢_二、暫奉勅之厚薄、處置之得失

叡覽被爲 在度、大略御治定相付迄之間、我等滯京仕_レ様再三承知いたし_レ得共、及歸國_レ譯_老、早竟攘夷

之儀先くより之

叙慮ニ被爲 在、兎角此未大事之譯ニ有、國家之本治
定不相成り有者、時機ニ應し十分之勤 王難相叶り得
者、富國強兵之術大急務と存り、尤於關東六月朔日且
先月被 仰出り趣も有之、屹と此涯國政之大躰相立、
人心致一和り様變革ニ及度り間、各中にも不容易大事
之時世を辨し、上者

朝廷之御趣意を奉し、下我等之忠誠を通徹し、忠直を
盡し其職を勤、國家之柱礎と相成り様心懸、尚熟慮之
上存寄之程も承度事ニ有、且又今度留守中士分以上之
者共種々雜說等申觸り段も相聞得、以之外之事ニ有、
事之善惡ニよらず國家之爲上書之儀者、

御先代様被 仰出置り得共、表向上書いたし有者臣子
之當然之事ニ有不苦り間、猶亦各中勘考有之、國中一
統趣意貫通いたし有様有之度存り事、

文久二年壬戌九月被仰出

右ニ付 太守様方御筆御添書

一御別紙之通被 仰出、我等ニ至り別る感伏涕泣ニ不堪
有、各中深御趣意奉汲受、粉骨碎身屹と其詮相立り様

精力を盡し丹誠を凝、

三郎様之御趣意を奉助、我等之不肖を補ひ、國家之良
臣と相成り様有之度存り事、

文久二年壬戌九月被 仰出

382

雜抄 御添書

去九日二丸於 御座之間、

太守様 三郎様御出座ニ有、御一門方・嶋津圖書殿并我
等共・若年寄・大目附 御前江被召出、厚御沙汰之趣承
知仕、猶又御別紙二通之通

太守様 三郎様御筆を以被仰出、何共奉恐入御趣意之御
事ニ有、今度被遊 御出府等儀者、御別紙にも細く被
仰出り通、 公武之御爲 御深慮之御譯被爲 在、不容
易重大之御事柄被遊 御盡力候處、於 公武も段々御變
革之御處置も追々被仰出、實ニ天下之大幸不過之有、早
竟 御趣意御通貫之御譯ニ有、誠ニ以奉恐悦有、然者第
一我々共初一涯精勤可仕儀者勿論、一同深奉汲受 御素
志、御國家之御爲誠實ニ盡心萬端相勵、不容易世態之程
致勤者、

皇國之御武威致更張り様、文武之道盛大ニ被相行、禮義・

廉恥・質素・節儉之風俗相嗜、富國強兵之道被相行ハ様可心懸ハ、且亦存寄之條々者、兼ハ被仰出置ハ通可致上書候處、無其儀猥ニ雜說等申觸候儀共、士分以上殊更有之間敷儀ハ間、能ク御趣意相心得、夫々盡職分可奉安尊慮ハ、此旨謹ク奉承知支配下下役等ハ可申渡ハ、

九月

筑後

大藏

攝津

但馬

式部

帶刀

在執事方帳留

口達

一臺場之事

右者 先御代方神瀬御築立之 思召被爲 在ハ得共、

御逝去後御取止相成、別ハ遺憾之事ニハ、然處當時危急切迫之世態相成ハ付ル者、先當分之處沖小島ハ築立度存ハ得共、臺場之儀者衆人之死生ニ係リ不輕事ハ條、大目付以上者勿論軍役奉行・軍賦役中可否十分可申出

事、

一集成館之事

右者大砲鑄立者勿論追々軍艦造立之含も有之、當時格別之場所ニハ條、掛役々等右等之處深相心得、猶存慮もハ者十分可申出事、

一寶藏金五萬兩

但古金

右繰替相成ハ者拾五萬兩ニも可及ハ付、内五萬兩者寶藏ハ納置、残り拾萬兩を以神社修造并集成館等當座之用途ニ可備置事、

一窮士之事

右救之爲勘定所其外ハ一往書役勤等申付有之事ハ得共、以來右人數總ハ造士館・演武館ハ致出席ハ様申付、造士館者教授之印、演武館者師匠之印を以扶持米相渡、出席帳者月末掛御側役ハ差出ハ様有之度ハ事、

一米價之事

右精々盡吟味、今一段直下相成度事、

一諸色之事

右諸色方之義掛役々吟味を以取扱之事ハ處、近比より徒目付壹人出席之由ハ得共、以來側役より掛申付、徒

目付兩三人掛置、時々吟味之形行側役に届申出外様可致事、

文久二年壬戌十月被 仰出外

在執事帳留

一軍政之儀考

金剛定院様御深慮を以、慶長以前

御三代様之御舊法に被爲基、西洋之砲術御採用に御

變革相成外處、

(鳥津齊彬)

順聖院様分り御心志を被爲碎、調練等時々御指揮被爲

在外得共、未半途にも不到事なる實以遺憾不少次第に

外、然處近年外夷愈猖獗之姿致増長、漸々危急切迫之

世跡相變外付の者、軍政向一涯嚴重無之の者不相濟

事勿論に外、就の於富國者每事西洋人之舉動に倣ひ外

義者、兎角人心歸嚮薄く、逆も十分之境に到り難く、

別の令心痛外、依之猶又致熟行、慶長以前之御舊制に

隨ひ、軍備改革申渡外間、軍役方之面々綿密盡吟味、

趣意致貫徹外様可取計外、尤攘夷之儀今般

勅使を以關東に被仰進外由致承知外得者、若夷賊掃攘之義 台命相違外節者、其通速に被行外様手當不行届

外の者、奉對

天朝幕府無申譯事外條、此旨厚相心得聊緩急之儀有之

間敷外事、

但臺場備の大砲等者是迄之通西洋之規則に基可申外、

乍併是逆も萬事彼法制を學ひ外の者、我國力に不

應義も可有之の間、右等之處又深相辨、成丈簡易

にして行れ安き様可致研中儀專要と存外事、

文久二年壬戌十一月被 仰出外

385

御系函 齊彬公

文久二年壬戌十一月十二日

大家奉

勅贈に權中納言從三位、是賞に齊彬生前效に忠誠於

王家之功也、

386

雜集中

一攘夷之儀先年

叙慮方今更に御變動不被爲在外、於柳營追々變革新政

を施行し、

叙慮遵奉に相成外條、

叙感被爲在外、然處天下之人民攘夷ニ一定無之外者、人心一致ニ表難到、且國亂之程表如何と被惱

叙慮外間、於柳營弥攘夷ニ決定有之、速ニ諸大名に布告有之の様 思召外、尤策略之次第者武將之職掌ニ外

得者、早速被衆議り至當之公論ニ決定有之、攘夷拒絶之期限をも被議奏聞の様 御沙汰ニ外事、

一 今般攘夷之儀決定有之、天下に布告ニ表相成外上ハ、外夷何時海岸を劫掠し畿内ニ闖入之程も難測外間、

禁闕之御守衛嚴重ニ被 仰付度被 思召外、然處海國者夫々之防禦向も有之、海岸ニ引離り諸藩者救援之手

當等有之外事ニ付、邊鄙に畿内警衛指出りる者、自然不行屈之筋ニも可出來、且自國之兵備手薄ニ相成、國

力之疲弊ニ表可到外間、京師守護之儀者御親兵共可稱警衛之人數を不被召置りる者、實以 宸襟をも不被安

外間、諸藩に身材強幹、忠勇氣節之徒を令撰募、時勢に隨ひ舊典を御斟酌ニ相成、御親兵と被遊度被 思召

外、右親兵を被爲置り付る者、武器食糧等準之外間、是亦諸藩に被 仰付、石高相應貢獻致しり様被遊度、

但是等之儀者制度ニ相渡り事ニ付、於關東取調諸藩に傳達有之外様被 仰出外、尤即今之急務ニ外間、早速

評定有之外様 御沙汰被爲 在外事、

(編註) 中川侯藩小河彌右衛門歸藩之節被 仰渡り趣

此節 勅使關東に被差下り處、

叙慮之件々遵奉相成、猶此末有志之諸藩一同志を一にし、夷狄掃攘

皇國之御威徳相輝、

叙慮貫徹り様有之度と岡藩ニおひて小河彌右衛門一列當

夏已來罷登、島津三郎勤 王之忠志ニ隨從戮力いたし居

外段被 聞召、 叙感ニ 思召外、今度歸國之儀申出之

趣無據譯ニ可任所意、尚御用之節可抽忠節外、右者藩

主忠誠之有志之儀且平常行届、士風教諭宜故と頼敷

思召外事、

但彌右衛門一列歸藩之上、中川侯に押込被申付り由、

然處此比江戸に御用召ニ出府ニ付、伏見驛止宿之

處、長土之誠忠家等青蓮院宮之令旨之由を以、右

御沙汰被成下り忠臣を禁錮しり者、君侯 王家に不

忠之故致誅伐と申事ニ成立、長州侯中入ニ鎮靜、

一先中川侯は大坂へ退居相成り由、